

茶に十徳あり。諸神加護、五臟調和、睡眠消除、煩惱自滅、孝養父母、息災安穩、壽命長遠、諸人愛敬、天塵遠離、臨終不亂、之を云ひ、又珠光が東山殿に答ふる語にも、能く和、能く敬、能く清、能く寂と云ひ、又或人は閩里の童蒙をして君長に仕へ、朋友に交る道を知り、身を修め情を養ふ、以て是示教の一助たるべし。古遠州の壁書中に曰く「それ茶の湯とて外にはなく、君父に忠孝を盡し、家の業を懈怠せず、殊に朋友の交りを失ふこと勿れ。春は霞、夏は青葉がくれの時、秋はいと淋しさまざる夕べの空、冬は雪の曉、何れも茶の湯の風情ぞかし。凡て茶の湯は禮儀修身は勿論、頗る風教を助け得べき要素多き事、比々然らざるはなし。」

然るに茶の湯と云へば、角張りて窮屈なるか、或は奢りケ間敷かの様に心得られ、兎角茶人と稱し、一種異人の様なる者の如く視なざる、こそおぞましき。利休の歌に「茶の湯とはたゞ湯を沸かし茶をたて、呑むばかりなり本を知るべし」と、是よき教へなり。惜て又驕奢ならんとの想像も甚だ間違居るべし。往古田舎の詫人より利休へ金子一兩送り、何品なりとも茶の湯の道具を求めて給はれと云越ければ、利休其金残らず茶巾布を購ひ送りけるとなむ。詫は何はなくとも茶巾だに奇麗なれば、茶は呑めるぞと云ひ、又利休へ或人が茶席は如何なるがよきぞと問ひしに、うめの木の多きが面白しと答へし杯、其他一釜一つあれば茶の湯はなるものを萬づの道具好むはかなさ」の古歌もあり、旁々以て聊か奢侈に流るゝ嫌ひあるべからず。若し之を謹まざる徒は、またもつて斯道の數寄とは稱し得ざる

なり。利休の歌に「あらばありなくばなきをば其儘にする茶の湯こそすたはなりけれ」。又茶人とは數寄といふことなり。利休は一枚起請の文中に、數寄といふは我胸さへ綺麗に候へばよろづ其中に籠るなりとあり。

石州流の茶の湯を貴び且つ専らにせんと欲せば、格別の意にもあらず、元來茶儀は禮と和とに基き、一身世を處するの要道と心得たればなり。故に之を奉行せんとなれば、尤理事二つながら全き所の流儀を撰ばざるを得ず。即ち理は内に主として體となり、事は外に顯はれて用となり、何れの流儀とて理事を外づし居る様なけれど、中には其時代の茶儀を以て國民治具の一端とも爲せしより、竟に法度格式を取崩すまでの氣轉を學び行ふあり、陰陽五行備りをも亂し、規矩準繩の要をも外づすに至れり。噫我邦美術業且つは家庭の教として、將たそれ惜しむにも餘り有ることなり。然れども幸に流儀を重んじ、所作を相傳、師弟の間分限を立てず、久しきを保持する處、予が敬慕する所の石州流是なり。祖宗關の門弟少からずと雖も、藤林宗源、高源院怡溪、殊に出色なりとす。而して是等皆流祖の神髓を享け、後進の爲め「三百ヶ條」「和泉艸」など茶書を著し、且つ宗啓が物せし南坊録といふ祕書を愛して、點茶儀の考證に委しかりき。尋いで怡溪門には朽木澤翁、小泉宗阿、伊佐幸琢、小菅別翁等孰れも茶道にて自然諸侯の師となれり。殊に伊佐幸琢半々庵、及び半提庵、半寸庵、いづれも御數寄屋頭となり、將軍家に仕へたり。而して伊佐の門より溝口家の茶道職數名を出し、何れも流儀一心に

歸向し、其内灘谷意齋、阿部休巴等、尤所作を究めたり。當時藩主溝口信濃守翠濤庵も茶事に留意し自身休巴の門となり、休巴をして古今茶儀の蘊奥を研究せしめ、自身亦頗る修行に怠りなき丹練の餘竟に皆傳をも受けられたり。翠濤庵は身諸侯の列にありと雖も、學問藝術の志厚かりし由。夫れ禮ノ用和爲、貴とは、儒教能く言へり。茶儀亦之に基くべき事なり。將軍義政公、珠光を召して問て曰く、茶事は如何なるものぞ。對へて曰く、遊に非ず、藝に非ず、又放樂に非ず、一味清淨、法喜禪悅、趙州是知己、陸羽豈到其佳境耶と、又曰く、物の通行するを道と名づく、茶に合せては茶道といふ。次第をさして禮と云ふ。意齋曰く、茶は飲食の遊びに非ず、天遊なり、莊子の所謂逍遙の心なり云々。寔に然り、斯道を習得て、禮節の一端ともし、且つは女子等が器物調度の際、手やかなる身の容、落つき居らん様杯、濃茶、薄茶、平手前位まで心得置くこと執心なりせば、幾許も耳を費さずして可ならんか。夫には別して流儀の次第を吟味すべし。昔針屋宗眞に尋ねける人有り、其答に、利休、織部共に大宗匠なり、然れども織部の手前は扱もく立派なる事、今に眼に付様思はれ候、あの如くにも點て申さるゝ哉と感入る。利休の手前は見取り候はんと眼を留め候へ共凡意を離れたるなりと云へり。石州流は少しも虚を好まず、實を以て奥儀とし有る也。故に他流に比すれば、無造作とや見ゆらん。是が所謂針屋宗眞が利休に感服したる見處なるべし。縦ひ無造作なる手業と見るも、又訖度としたる理事は、必ず一舉一動に各備はり有る也。茶席には平手を疊に着けず、體の陽、用の陰、又は十

文字、縁切などこれなく、寔に順序は整然立居れり。怡溪和尚曰く、心と作法と相離れず、始終遲速なく、諸事目立たざる様、すらりと走る事專要なりと。何事も目廉立ち易き物は、見習ひ易きことなれども、器物の扱ひ和かならず、動もすれば恥辱を引べき事なり、用心すべし。右の思召書は、不昧公の思召を茶道の門弟たるものが認められたるものらしく、不昧流茶道の本旨として夙に知られたるものなるが、何人の認めおきしものなるか、今審かならず。半寸庵伊佐幸琢の門下として、古今茶人系譜に載するもの次の如し。

- 大地宗琢 松平下總守茶道 如々庵
- 伊藤長太夫 松平田羽守家臣
- 竹口如林 千々庵 六角佐渡守茶道
- 津田外記
- 松平出羽守 不昧 未央庵 大圓庵 宗納 一々齋 一閑子
- 丹羽加賀守 長祥 奥州二本松侯
- 松平溪山 此君庵 清陰庵
- 北村彦藏 町年寄 半閑庵
- 福地善兵衛 半聽庵 江戸町人
- 水村仁兵衛 半日庵 江戸町人
- 藤森藤嚴 御袋師 半圓庵 阿部休巴 半求庵 宗求 溝口信濃守 翠濤庵 越後新發田侯
- 椎名忠右衛門 御指物師 半松亭 洗々庵
- 伊佐幸琢 初名榮琢 號看山

公が半寸庵の門に入りしは齡十八歳の時にして、半寸庵が公のために之が傳授を爲せるは、實に明和七年、即ち公の二十歳の時なり。半寸庵が公に授けたる茶湯傳授極秘は、一、仕様無習。一、教外別傳不立文字。一、見聞知。一、見聞情。一、外道知。一、禮樂。一、數奇、克己、塞欲。一、性情。一、情所作奇。一、露地。一、四疊半座舖。一、維摩經問疾品。一、草庵大目。一、一疊半極秘。一、心のカネを用ふる事。一、疊リウキウなど。一、腰張青紙又は澁紙など。一、掛物紙表具、竹軸、黒棗、ワレ茶碗。一、黒塗棗、赤樂茶碗。一、會席、會法席などの目を擧げ、これに簡單なる説明を附し、終に「右一冊は口授を覺爲書畢、努々他見他言ゆるすべからず候、其實なるを數年見定めてゆるすべし、一兩輩をかざるべし、口授の意味なれども、後世にうたがはしき事も出で候はんやと、染筆也」と書けり。その見聞知の條に、茶道の人にちなみ、諸流の作前を見覺え、法語且つ和歌の心をたづねて覺え、其筆者の筆法を覺えて、團、數奇屋の法式を聞知すべきを説く。公が多年家臣に各流各派を習はしめて自ら之を批判し、また親ら禪書歌書を學び、殊に定家流の書法に於て大成したるは、この秘傳の條項を實踐躬行したるものといふべし。教外別傳、不立文字の條に、一回相を描きて有無を説き、晝夜四季に於ける有無觀を説き、利休より石州の傳秘事、全くこゝに在ることを説き、生死を知りて常に驚かず、一服の茶を一人飲みて萬人の客を得るが如き常靜觀を説く。其他直指人心、見性成佛といひ、煩惱即菩提といふが如きことに關しては、半寸庵の傳授以外に於て、公は大嶺に就きて禪三昧に入り、拈据數年に

して大悟徹底せるものとす。

公は初め荒井一掌に就きて三齋流を學びたり。一掌本名を荒井三郎兵衛といふ。別に古帆、一青、宗音等の號あり。江戸青山の人、父を三郎といひ、麴町の味噌屋にして家富む。母は赤羽の人、竹内幸七の女なり。初め幕臣古賀大内記正武の妾なりしが、妊娠中三郎に嫁す。生れたる子は、即ち一掌なり。彼幼にして茶を好み、書畫を能くし、柔術及び弓道に名あり。性溫厚にして、剛毅の風を具ふ。夙に幕府の茶道無事庵志村三榮(初名三休)に就きて三齋流を學び、數年にして眞臺子を受く。自ら以爲らく、臺子の眞味は參禪に如くものなしと。乃ち所有金を三分し、一を弟三平に與へ、一を妻に與へ、残る一を携へて駿河の白隱和尚に就き、修業九星霜、遂に杖拂を許されて歸郷す。その別るゝ時、和尚彼がために一の字を墨書し、喝して曰く、之を掌にせよと、因て一掌と號すといひ傳ふ。私案に「一掌を與ふ」といふのは、禪林に於て師僧に打られたることにて、禪定の允可を得たることなり。この一掌の名も彼が白隱より允可せられたるための名なるべし。嘗て入門の時、所有金を修堂料に寄附せんとす。和尚肯んぜず、因て辭するに臨み、村人に托して去る。江戸になほ舊妻あり、孤閨を守りて再嫁せず、嘗て受けしところの所有金全部を捧げて再婚を求む。因て之を諾し、麴町に一草庵を結び閑市庵と名づく。公夙に彼を敬畏し、家臣高井宗休、林久嘉、矢島金鱗をして、彼に就て茶事を學ばしむ。公もまた屢々彼を召して、茶事禪法のことを問へり。彼深く公の知遇に感じ、心を傾けて公に盡すところあり。伊佐幸琢

も「眞臺子の事は、一掌より御傳授受けさせられ候て苦しからず」とさへ云へりとか。彼はまた屢々松江に入り、茶道のために謀る處あり。門人林久嘉の茶室を設くるや、閑々庵また一放軒と名づけ、在松中歳首松のうちにはこゝにありて茶事を教へたり。晩年一切の茶器を一放軒久嘉に與へ、三齋流の奥義をも傳授せりとぞ。今なほ出雲に三齋流多きはこれに基く。文化元年八月八日、歳七十八を以て歿す。江戸青山、法一寺に葬る。閑市庵一青古帆宗普居士と諡す。實に三齋流中興の祖なり。

嘗て麴町の居宅附近に出火ありし時、門人矢島金鱗、公の愛馬雲井に打跨り、一目散に馳せつけて一掌の安否を伺ひしに、彼は從容として名残の一服を喫せんと、茶室の掃除をなし、靜に炭をなし諸具を飾り、點茶して金鱗に與へ、自らも服しぬ。時に猛火既に天井に移りしかば、金鱗頻りに立退を促す、一掌乃ち今は心おきなしとて、師無事庵より讓られし百如釜一つを携へて、金鱗と共に退出せり。この時金鱗初めて一掌居士の膽力に感じ、おのが職とする馬術の語に、鞍上無人鞍下無馬とあるの極意を悟り、益々茶事を勵み、遂に一掌より臺天目の傳授を受くるに至れりとぞ。

二 不 味 流

凡そ祕事祕傳といふもの、武術に、歌道に、遊藝に、唯形式に流れて、その本體を辨へず、茶道また然り。この故に、公は伊佐幸琢より祕傳を授けられたりと雖も、こは唯世間一般の形式を踏めるまでにして、公の研究は更に着實の進歩を遂げ、古往今來の各流を看破し、本末支派の別を立てず、虚飾を去りて實體に就き、虚禮を棄て、眞相に入り、こゝに眞正なる茶道の精髓を發揮し新一流を創立せり。

公は家臣をして各流各派の門に入らしめて、彼等よりその傳來を聴取し、また自ら大和尚に參禪し、小堀遠州に私淑し、佛法歌道の研鑽を勉め、天下にありとあらゆる茶書を蒐集して之が比較研究をなし、祕事祕傳といひ、本家本宗といひ、もしくは支流、末流、別派など、各一局部を見て相互に蝸牛角上の争を爲すの愚を悟り、その根本を見極めて、茲に初めて不味流を大成したるなり。故に不味流といふは、いかなる流派にも共通する所の公式定理の上に立ち、敢て何流何派といふべきにあらず。公の語を假れば、諸流皆我が流なり。但し形式の上に於て不味流は石州流に屬すれども、決して純石州流にもあらず、不味流と他流との區別あることなし。然れども強ひてその異なるところをいへば、他流各派が茶技の末藝に拘泥せんとするが如き弊を避けて、茶道の本系を辿り、其の眞相をあらはしたるものとす。他流が形式的にして一局部を争ふものとなれば、不味流は精神的にして全局に亘るものとす。公の言に「茶を知りて禪を知らざるは暗中に物を賭んとするが如し」といへり。古今茶人の多き幾千百に上れども、そのよく禪門に悟入したるもの甚だ稀なり。故に公は特に怡溪派に入りてその奥を叩き大嶺に

就きて喫棒十數年に及べるなり。この嚴格なる意義に於て不昧流を見れば、不昧流は、不昧前不昧流なきは勿論、不昧後また不昧流あることなし。不昧流は、唯不昧の人格あつて初めて存するのみ。然れども公はまた決して茶技の美術的、文藝的、圖藝的、建築的、骨董的の形式的方面を看過したるにあらす。この故に、公は他流他派の發達せる一局部の美はよくこれを認めて隨喜し、曾て他流他派を貶斥したることなし。例へば遠州流に對する次の戲文の如きは、宗甫の長所を賞揚して、その茶恩の忘るべからざるを力説せるものとす。

さる役所にて被_レ仰渡_二候覺左之通

一、應仁文明の頃より茶事行はれ、茶器類賞翫有_レ之候へども、未だ微細に吟味も無_レ之、其後天正文祿の頃、専ら直段等も定り候へども、在_レ々所々に至りては、辨へざる者も有_レ之候處、寛永年中小堀遠江守政一、茶事に被_レ達、殊に器の新古、和漢等の直段、それ_レに被_レ分、夫より以來、數奇道具屋共、家業繁昌仕り、今日安穩に家内を育て候も、政一公の御茶徳故に候處、端々には右御茶恩忘却仕候者も有_レ之哉に被_レ存候。

右體之儀有_レ之間敷事に候條、當年より二月六日(宗甫公の歿日)は、數奇屋清淨に致し、早朝より釜かけ、掃除等念入慎み可_レ被_レ申、石燈籠とぼし候事は、心次第の事に候。鳴物は無用に可_レ被_レ致候。但し鉦は不_レ苦候。尤もガンと云はぬやうに可_レ被_レ致候。此段申合候條、御達申候。

要するに、不昧公が千家の表裏または官休庵或ひは藪内流を擇ばずして石州流を採られたるは、この流祖は利休の長子道安に創まり、四代將軍家綱の師範たる片桐石州に傳はり、更に東海寺の怡溪和尚を経て、幕府の御數寄屋茶道たる伊佐幸琢三代に傳はれる故に、幕府を宗家とする松平不昧はその正統の繼承として、この石州流を選ばれたるものなるべしと信ず。乃ち前記、不昧公石州流思召書を見れば、思ひ半ばに過ぐるものあらん。

三 門 人

公の茶道を大成するや、公の門に遊ぶもの多しと雖も、公は其身もとより幕府親藩の國侯なれば、普通一般の宗匠の如く、容易に弟子取りして之に教ふること能はず。その傳習の如きも、諸侯及び茶道を除くの外は、直接に公の指南を受くること難く、多くは代稽古にて、云ひ傳へ聞き傳へて之を學べるなり。今出雲に於ける不昧流の正統は、有澤氏に傳へられたるべけれど、其他多少の相違を見るは、乃ちこれがためなり。故に嚴密にいへば、公の門弟と稱すべきもの甚だ多からず。左に古今茶人系譜、安食善知の記せる「茶人系圖」、藤井長古門人錄、岡崎淵冲著「點茶活法」中の系圖、及び有澤氏の系圖等に

よりて、公の門弟たるものを列擧すべし。

酒井雅樂頭 播州姫路侯、一得庵、宗雅、拂袖、造好

朽木近江守昌綱 丹波福知山侯、不見庵、宗非、龍橋

鈴木新兵衛 朽木近江守家臣、大空庵、宗得

有馬涼竹 朽木近江守家臣

蒔田玄蕃頭定靜 寄合衆、六毛

松平上野介直義 支藩廣瀬侯

井伊兵部少輔

本多豊後守 信州館山侯、一點庵、宗龍

永井大和守 大和新庄侯、岐水

松平日向守直益 越後糸魚川侯、三關庵

日下宗珍

岡田將監善功 向月亭、雪臺、宗月

武藤祐兵衛 雲州茶道、清順

奈倉斗八 雲州茶道、斗齋

山口長三郎 銀座々人、宗一

坂本慎 雲州茶道、大雄庵、宗猷、雄峰、一茶、臨々齋

村田幾右衛門 雲州家臣、青山、玄峰庵

松平志摩守 支藩母里侯、不二庵、四山

伏見屋甚右衛門 江戸道具屋、龜田宗振

小森玄可 雲州茶道、一松庵

横川如川 栗原智靜、加藤楓川

堀本一甫 名古屋人醫師、青々庵

根土宗靜 孤輪庵、根土宗藤 支藩廣瀬茶道、玄風庵

岡本宗修 松江藩醫、瑞庵、有心庵

牛尾宗苔

伊佐榮琢 半寸庵の子、看山

藤井長古 雲州茶道、秀俊、提起庵、宗興

藤井長古 雲州茶道、慎、不徳庵、宗古

爲石九方 雲州茶道、休市、伊藤博教 向峰庵、宗心

山田勘悦 雲州茶道、後素庵、有慶

藤坂松保 雲州茶道

安食善知 雲州茶道、明露庵、宗現

不昧

虎屋重兵衛

森脇忠兵衛

野波屋庫三郎

山崎克三 雲州茶道

有澤式通 雲州家老能登、一步庵、宗侯、有澤式善 明々庵、宗意、菅田庵、向月亭

有澤式惠 止々亭、宗山、有澤式審 松壽庵、宗閑

有澤式恆 菅田庵、宗滴、有澤式也 菅田庵、宗也、有澤式保

右系譜の如く、不昧流の宗家は有澤家とす。現に公の茶室菅田庵、向月亭の存することは、普く世の知るところなり。

公の茶道門人の名を知り、その門人の稽古に對していかばかり熱心なりしかを知るに足るべき書簡、次の如し。

以廻狀申上候、當年私留守中茶事稽古之儀、同性上野介（支藩廣瀬侯）方にて、十二日、廿六日、毎月稽古仕候儀に申付置候間、各様方御越被下度、此旨御承知之上、廻狀どまりより、上野介方へ御返事可被下候、以上。

卯月二十三日

赤坂

朽木隱岐守様

井伊信濃守様

米倉長門守様 (敬請)

松平日向守様

堀本一甫様 (奉)

本田豊後守様

堀本好益様 (奉)

深尾權太夫様 (奉長候)

彦坂九兵衛様 (奉長候)

松平三郎太郎様 (奉)

蒔田備中守殿

右の書簡は近年堀本家より出でたるものにて、故松原如方氏の珍藏たり。次に門人中その傳記の知れ、公との關係厚かりしものに就きて列記せん。

一得庵 酒井雅樂頭忠以は、姫路の國侯にして抱一上人の實兄なり。公にとりては茶道の門弟なり。次の書翰は、現に酒井家に藏するところにして、公の面目を發揮し、不昧流の精神を知るべきものな

り。

一、和泉草のこと、御せつぎにて存出し、いそがしきに取紛、しかし外へはかしは致さぬ也。御歌の徳にて、即ちあげ申候、御寫し濟候はゞ、御返し可被下候。

いかなこと、わきへ流れぬ和泉草、

和泉來たとて、かしもいたさず。

九月十七日

一 得庵様

不 味

公茶事覺書の中に

- 一、露地數奇屋は宗且、物數奇好之物は宗甫どの、茶の湯の法は宗關どの、一人にしたらば、天下一人也。其心にて可修行。
- 一、茶の湯は閑靜幽寂活手段と云々
- 一、掛物掛ること無習、見て直なるを吉とす。
- 一、茶の湯の上手は、客の面白と思ふが上手。
- 一、手前のよきは人の氣の付ぬがよき也。

一、道具置合は、見てよきが習。

一、會席はくはれぬものゝ無きが會席。

一、茶の湯は雪の朝を捨てず、

一、茶湯は雨にしをれたる竹の如く、雪をかけたる松の如し。

枯れはてゝなか／＼秋の露よりも、

いろなき野邊の色ぞ身にしむ。

一、手本によきは又隠の庭。

一、客は我より下手と思つて亭主するもの。

一、風爐の灰の仕様は、大覺寺金岡が石に、西行の「庭の石に、めでつる人もありなまし、かどあるさまに、立てし置かねば。」

一、夕ぐれの花は、藤、夕顔。夜は白梅。朝は朝顔、蓮。晝は其外數多あり。詩歌に賞翫し、又は人のよく知りたる花の外無用。佗しきは畑の花か。

一、四季ともに其節々に叶ひ過る、うるさし。

一、炭取に炭組様、とかく見能きやうに。

一、會の習は、客の心に叶ふやうに、叶ひたがるは悪し。夏はすゞしく、冬は暖に、炭は湯の沸くや

うに、茶はふくのよきやうに、花はその花の様にと、利休傳來にて候。

茶の湯とは只湯をわかし茶を立て、

呑むばかりなり本を知るべし。

此の歌は茶の眼也。

(以下數十條あれど略す)

右條々存出し次第、書留め置候覺書、無相違候、以上。

卯月一日

宗 納 (花押)

一得庵様

未央庵主人の座右に有之覺書を模寫して、是に奥書を乞ひ、珍藏するものなり。

天明七年丁未四月二十一日

宗 雅 (印)

此書を寫す時、米倉長門守、深尾權太夫、共に寫す。井伊和泉守は、本書を乞ひ得て歸る、依て各奥書を乞ひしなり。

一得庵宗雅の壁書は頗る簡單明瞭にして、よく不昧流の眞髓を傳へたるものとす。其文次の如し。

諸惡莫作衆善奉行

炭 湯のわくため

茶 服のよきやう

花 その花のやう

夏 すゞしく

冬 あたゝかに

三寸童子能知之、百歳老翁不能行

一得庵は、寛政二年七月十七日を以て卒せり、年三十八。法號を起宗院殿拂袖源昭大居士といふ。時に公四十歳の時なり。この熱心なる門弟も、公の益々茶界の偉人として世にあらはるゝを見ずして逝去せるは惜しむべし。

不見庵 朽木近江守昌綱は福知山の城主、宗非または龍橋と號し、公の妹の夫にして、公と最も近き親族なれば、茶門弟の中にも頗る親密の間柄なりき。不見庵は公の命名に係り、楞嚴經曰佛告阿難云吾不見時」の語に取る。夙に古錢家を以て顯はれ、中谷願山の著「孔方鑑」「珍貨鑑」の誤謬を訂正して上木し、また「新撰錢譜」「泉貨鑑」「弄錢奇鑑」等の著あり。嘗て侯が三輪山と稱する茶入を購求し、また公に對して茶器購求の照會及び廣澤(茶入の名)の購入に際し、公の送りし書翰は、誠に眞率飄逸なる公の性情を遺憾なく發揮したるものにして頗る珍とするに足る。その全文、次の如し。

御手紙拜見仕候、日々暑氣御坐候得共、御壯健御事、珍重奉存候。然らば、田沼口の義、御尋被仰下、荒々宗振(道具屋、伏見屋宗振)ふら／＼として申上候事と奉存候。甚右衛門(道具屋、伏見屋甚右衛門)能く存じ候間、御尋可被成候。私儀は大弱りにて候得共、段々世話を致し遣はし、據處なく需め候品々、少々左に申上候、嘘もなく候間、左様思召可被下候。山雀(中興名物茶入)は未だ賣

れ申さず、是は中々急に出で申間敷候。是れも私より申置候義有之候間、外へ出で申す事にては無之、御望みも御坐候はば、掛合可申候。何れにても、御出での上、可申上候。私需め候去年以來の品々、明白奉言上候事、實正也。

- 一 残月
- 一 坂本井戸
- 一 瀧浪
- 一 舜舉梅之繪
- 一 梁楷二幅對
- 一 一几
- 一 木枯
- 一 天筒山
- 一手枕
- 一 垣根
- 一 藤重
- 一加賀井戸
- 一天狗 長次郎赤
- 一 水の子 しがらき
- 一 園城寺茶入
- 一 遠浦歸帆 牧溪八幅之内
- 一 江戸とや
- 一 河茶草

先づ四年以來今日まで斯くの如く御坐候。此上に望みの品も御坐候得共、右之通り故弱り果て、見合申候、最早世上に浪人の者、畠山、廣澤、貯月、逢坂、其外唐物の類、羽室の類、京邊江戸かけて、五つ六つ、三輪山は福知山に納り、鬼の餌と爲り申候由何も其外道具は之なく、荷口の残り何も無之由に御座候。荷口にて、空中水指、備前水指、刷目茶碗、志野茶碗、茂古林墨蹟など、私需め、中々一文の餘も買はれぬ身の上と成り果て、唯小豆のみのすくねにて候、以上。

水無月三日

不見庵主公

不 昧

用 答

(三島神道氏藏)

藤井長古は、實に雲州に於ける不昧流の名人にて、この門下に幾多の秀才を出せり。蓋し江戸にては小森玄可、公に代りて之を傳へ、出雲にては藤井長古公に代りて之を藩の士民に傳へたればなり。彼はもと松江の大工藤井萬之丞の次子にて、母は紺屋一郎右衛門の娘なり。天明五年八月十一日を以て生る。幼名を新次郎といふ。長男夭折したれば、母之を憂ひ、この子また我家にあらば夭死すべしとし、別に藤八を養ひて嗣子とし、新次郎を出して其分家にして茶道坊主の家なる藤井超古の養子とす。享和元年給米四石、二人半扶持、坊主並となり。藤井長古秀俊と改む。文化元年二月十七日側坊主となり、文化十年正月十六日公より茶名提起庵の號をたまはる。一男一女あり、男夭死し、一女阿利久に養子す。これを二代長古不昧庵とす。山田、爲石、藤坂、安食、森脇、山崎、虎屋、野波屋等の門弟あり。長古の門弟山田勘悅は、萬延二年唐物建、文久二年盆建、元治二年臺天目の傳授を受く。其の孫山田恒太郎氏の家に長古門人録の巻物を藏す。そのはしがきに曰く、

數寄之道。五宗匠之流を汲む事、貴となく、賤となく、久數世に傳り盛なり。父宗與、君公(不昧)中興の大業を相傳へ、其下流予輩に及べり。因命、父の業を請亞ぎ、その諸門弟を教示せよとの蒙仰、於予幸然之至也。今改めて披其席、繼其志、歡喜餘りあるかな、依之諸門生の姓名且年曆をこの巻末に記し、精々不怠成業榮ん事、是祈而已。

安政二卯年六月

藤井宗古

慎 (花押)

とあり。以て如何に藤井長古が不味流を教ふるに熱心なりしかを知るべし。

有澤能登 は字を子貫また龜峯といひ、一步庵、宗佚と號す。初めは公のために茶事の導引をなしたれど、後公を師として深く不味流を學ぶに至れり。列士録に據るに、元祖有澤織部直玄は寛永の時高眞院に仕へ、二代織部、三代土佐、四代土佐を経て、五代即ち能登に及ぶ。代々家老にして二千五百石を食む。明和三年十月二十九日家老となり、安永五年五月二十八日歿す。公の信任を得ること厚く、公また屢々彼の宅に臨みて喫茶閑談せり。安永四年十一月二十三日公その宅に臨みし時は、赤樂茶碗、銘雲門を献上したること、年譜に見ゆ。六代織部一善は字を君鷹といひ、明々庵、宗意、菅田庵、向月亭の號あり。明々庵の茶室は、もと一善の所持せるものなり。六代織部嘗て公の所望により利休臺、袋富田、奥高麗茶碗、古備前水指、茶臼等を献上す。また公の意に由り百の内播茶囊を受く。文化七年十二月十二日歿す。七代止々亭式惠、八代松濤庵式審、九代菅田庵宗滴、十代菅田庵宗也、十一代式保に及び、依然として不味流の宗家たり。家に公の書簡類を藏すること多し。その茶事に關して最も不味流の面目を發揮せるものを掲げん。

昨日申入候亭主の約束之儀、委細承知仕候。しかれば、何時も麻上下着用可然存候、法式にかゝはり

かたくなるは、不亭主との事なるほど、麻上下など着用致し、四角四面に嚴重に法式を正し候はゞ、和は無之と存候。我等存候は、隨分法式ども嚴重にかゝはり候儀は、なるたけ略儀なく、衣服も麻上下着用致し、心に和をもち、始終の挨拶取さばきやわらかに致候はゞ、かたくもなく、略儀にもなるまじきか。裏附繼上下などは、無用にいたし可申候。此已後、我等よりもしも、茶を教へ候ものにも、着服は麻上下にて、略儀なく法式を守り可申旨、傳へ可申と存候。尤もかたくならぬやうにと申儀を、始より申候はゞ、茶會雜會に相成可申と存候間、傳授も致し可申と存候。節々かたくならぬやう、心を用ひて申聞せ可然と存候。初心の内より、かたくなくと教へ候はゞ、雜になり、大酒大めしなど食ひ、客も亭主も、なまゑひの茶の湯に相成可申候間、初は法式茶會法を守り可申候やう、傳へ可然と存候。會得の上にては、たとへ甲冑を着し候て、茶を致し候ても、心に和を專らに致し候はばおそろしくすさまじく見えまじと存候。昨日の返事の趣如、此に致しては如何に御座候哉。

一、風呂の灰、利休南坊時代は、臺子の如く、かきあげのよしなり。土風呂には火氣の用捨にて、灰つかうと有り。只今も是を學び申候ては如何に候哉、人のせぬ事故、事を好むやうにて候間、相談申候。

一、爐の灰、利休ふくさ灰のよし、是又ふくさに致し候ては如何。無住抄の箇條には、利休有馬へ湯治に參り候節、山の崩を見て後、あられ灰出來とあり。又續錄には、古織(古田織部)より、あら

れ灰出来と有之候。續録の事に習ひ一ふくさ灰に致し度候。是又只今無之致方故、相談申候。
一、初坐に輓帕を用ひ候儀、先日も申入候。我等已後初坐に輓帕さらしの手拭の如しを用ひ度候。是又學古候にては有之候へども、人のせぬ事故、相談申候。

能登殿へ

公のその他の門弟中、蒔田玄蕃頭、伏見屋甚右衛門、坂本雄峯、奈倉斗齋、村田青山等はそれ〴〵後に述ぶべし。井伊兵部少輔、本多豊後守、永井伊豫守、松平日向守、日下宗珍のこと、今これを知るに由なし。要するに、大名の門弟としては姫路侯、福知山侯、最も熱心なるものなりき。江戸藩邸には村田青山、坂本雄峯、小森玄可の茶道あり、出雲にありては藤井長古、有澤式通あり、長古は民間に之を傳へてその跡絶え、有澤は今なほ不昧流の宗家として現存す。

公が茶道を指南するや、極めて嚴肅なるものあり、事毎に實踐躬行して門弟を率ゐ、水屋の事の如きも決して人手に任せざりき。筆者が始めて不昧流を學べる時の師山崎克三翁の直話に、勞働は神聖なりとはこのことにて、公が歴代の藩君中長壽を保たれしも、かゝる原因の存するに由ると。また曰く、袱紗調べは亭主にとりても大切なるもの故、公は參觀の途、籠の中にも常に袱紗の研究をせられたりと。また曰く、茶事は由來質素を主とすべきにより、如何なる客に對しても、諸道具中唯一品を新にするの

みにて足れりと、教へたまへりといふ。

四 贅語及び茶礎

むだごと

つらく世間の茶道を見るに、後人の作意にして、其本を知らざる故に、事理本意に違ふこと多し。夫れ、茶の湯は、東山慈照院殿の時、能阿彌、相阿彌等、臺子の茶の湯を専らにして、誠に金銀をちりばめ、名器を集めて、榮耀の至極なりとぞ。其後珠光法師に至りては、少々是を略す。然れども、六疊敷に臺子を飾り、珍器を集めて、點茶ありとなり。臺子の茶の湯は、結構を本として、少しも略儀を致すことなし。今いふ眞臺子、皆これ能相の用ひし所なり。珠光以後、武野紹鷗、四疊半の坐到袋棚といふ棚を飾り、大に略して點茶す。それよりして紹鷗、利休相談にて、草庵さうあんの茶湯を作り、専ら禪林の清規せいぎに本づき、白露地びやくろちの本地を定む。これ茶の湯の根本なり。當世の茶の湯といふは、皆草庵の茶なり。然るを、美をつくし結構を成すことになりしは、にが〴〵しき事なり。休の靈魂も、なりはてたる茶のてい、さぞ口惜しく思はんと察し入り候。是非もなき後世と存するのみ。

予若年、殊に未熟の事なれども、幼少の時より此道を好み、近年片桐貞昌の茶道を學びて、當年唯三年、としも漸く二十歳になり、やう／＼人らしくなり候故、能く／＼案じ見るに、いかにも此道の成りはてたる事ども、當世人の口ずさみにも、茶湯、俳諧、碁双と、一口に唱ふるやうになりしこと、殘念千萬、中々筆に盡し難し。然れども未熟の我々、いかやうに存じて、當世の茶の風儀を取直すべき様なしと、牙をかみて日を送る。

露地と數奇と、本を知るべきのみ。事世塵に埋れしこと百有餘年、爰に當流秘傳の書に、滅後の書といふは、此書に、宗易段々後世の事を思ひやりて、南坊の宗啓へ申されし事ども記しあるに、當時の茶に引くらべ見るに、一つとして相違の事なし。誠やかの諸葛孔明の未だ茅廬を用ずして、天下を三分に分ちけるも、休の茶湯の成行を、百年の前に云はれしも、その品はかはれども、其妙なる處相同じ。誠に名人の上なれば、かくあるべきことなるべし。

今の世、茶の湯といふものは、唯慰み一通りの様に、皆人々此道を得度して、是を以て治むる時は、天下國家を治むる助ともなるべし。一心を修め慎み、清淨潔白を本として、禮樂かね備り、親疎貴賤の隔なく、一和の業を成すことなり。人君の人をつかふにも、是を以て助とせば、誠に善人を得ること疑ふべからず。説苑に

楚莊王好獵。大夫諫曰。晉楚敵國也。楚不謀晉。晉必謀楚。今王無乃耽於樂乎。王曰。

吾獵爲以求士也。其榛聚刺虎豹者。吾是以知其勇也。其攫屏搏兎者。吾是以知其勤有力也。罷田而分所得。吾是以知其仁也。因是道也。而得三士焉。楚國以安。故苟有志。則無非事者。此之謂也。

此の如く、小事にも心を用ひ行ふ時は、一國を治むるの助力ともなるべしと思はるゝのみ。

家康公にも、茶道被遊、御好み専ら御用ひ有りけるも、此意を御得心被遊、上下和順の御方便と成されしこと、明白に奉愚察。殊に其頃は、亂世の後故、隔意のものも、なんと小座敷にこと寄せ、和意を被遊しこと、誠に明君の思召、かくこそあるべし。續で秀忠公、家光公、家綱公にも、古田織部、小堀遠州、片桐石見に茶道御學び被遊、専ら御用ひ被成しこと、右御用意と奉存。秀吉、信長、其外古の諸侯は、専ら茶を用ひしこと、幾千萬といふ數を知らず。右の如く一國を思ふなれば、中以下にては、無用の事と存する人もあらん。是れまたさにあらず、大は大、小は小にて、一家を治め一身の治めとなすこと、その意味かはる事なし。

夫れ人は常に手隙なく居る物なり。慰なくして靜に獨居する時は、色々の悪しき事を考へ出すものぞ。されば、もろこしの人、琴など好むも、右の惡念を忘るゝためなり。即ち音樂も其惡念を忘るゝ爲なる由、茶も亦是に同じ。茶を知らぬ人、唯慰みつきのやうに思ひ、金銀を費して驕りをなすなど云へど、此の妙道を知らざる故なれば、尤至極の事なり。

世の人茶湯を嘲りて、茶人の家作は、曲りたる柱など好み、扱又茶席にては、無性に頭を下げて、主のなす事する程の事を譽めそやし、何もかも御出来々々と、輕薄ほめに譽める、其上茶人は、色々の道具を好みて、ない物食ふと云ふが如く、世間にないを好み、古ききたなき茶碗に、鹽辛壺のやうなる物を茶入とて、本は何やら知れぬ物を、高金を出して買求め、其内へ茶を入れて、人に吞まするなどとて、人々の笑ふところ、更ら／＼無理にあらず、甚だ至極の事なり。休の歌に、

釜一つもてば茶の湯はなるものを、

よろづの道具好むはかなさ。

又

茶の湯とはたゞ湯をわかし茶を立て、

吞むばかりなり本を知るべし。

此の二首の如くならば、人のあざける事はあるまじや。中にも末の一首、本を知るべしと詠じ、本、字、心あり、茶湯は湯をわかし、茶を立つるばかりなれども、其の本を知るべしとぞ。其の本といふ事は、前にも記したる如くなり。茶道の道の字、心付けて見るべし。道といふ文字のある物に、道のなき事はなきものぞ。茶道不心得の人は、道の字心付かぬ物なり、能く／＼心付くべき事なり。扱又道具の事、釜一つもてば茶は成ると申しても、茶入茶碗も無くては、茶立てられず。然れば、何とぞ

茶の氣を消さぬやうにありたく、古き茶入、茶碗、水指を好む事なり。新しき茶入は、土氣ありて茶の氣を消すものなり。いかにも土氣うせて、古きを好むべきことなり。水指、茶碗も右に同じ。塗物の茶入も、うるしの氣ぬけて、茶の氣にさわりなきをよしとする故に、後人取違ひ、唯ない物食ふに古びを好む事になりしは、茶の人道のたがひしと同前なり。

又金銀の費えありと、人のいふ事、又尤の事なり。然れども、人をもてなさんに、食物、器物、天よりは降らず、地より湧かずと見れば、其人々の程々に見合せ、鹿末なきやうにあるべき事なり。家作は勿論、茶器、食物に至るも、此の心得にて然るべし。然るを、當世は道具を見せに呼びながら、道具御覽に御入あれと云はずして、茶の湯とて相招き、茶湯は第二とし、客も道具を専らに譽め、主も亦道具を自慢して、扱又懷石は、懷石の譯を知らぬ故、色々のことを思ひ付き、金銀を入れて、客を呼びながら、侘々と思ふこと、片腹痛き事なり。世の人の笑ふ所、誠に感服の事なり。

世の中の茶人に、大先生ともいはる、程の人々、釜一つ持てば茶の湯は成るといふことは、能く聞き覺えて知りながら、世につらされて、本意を失ふこと、笑止千萬の事なり。今の世の茶の湯／＼といふものは、甚だ惡道にて、誠に驕りのみちびき、是に付ての惡しき事は、さまざまなるべし。まづ、高慢になりてゆき、過ぎたる事になり、道具好をする人は、盜人根性になり、人をだますことを心がける事になるものなり。其外の惡しき事をも出來することは、いくらといふことなし。

本意知らずして、茶の湯はせぬがよし、當世の茶の湯學びたまふは、御無用の事なり。茶を知らずしても、事済むものなり。茶湯學びの手隙には、學問、手跡、御習ひ候へかし。今の茶の湯は、何の役にも立たぬものなり。悪しき事計りにて、善き事はなし。茶湯嫌ひの人々こそ、正しき御人にてあるべし。予も茶湯好きながら、當世の茶を笑ひたまふ人々の、御ひるき仕るべし。随分茶湯御笑ひ可有、御きらひの御人達の思召、御尤千萬にて、いかにも當時は、かくなり候筈にて候、古織。小遠時節より、はや達亂致し候なり。已に當流の書物にも、所々あまり多く候ぞや、氣を付けて御覽候へかし。愚意に悪しきと存する處々、左に書留め、人々の笑草にもなりなると、記し置き申候。かやうに茶湯を打込み候ても、元來御好きの人は、本意能く知りたる師匠へ稽古したまへかし。當時は本意を知りたる人少なし、只、閑市庵の先生（一五三頁参照）こそ、予が意にも違ふまじ、此の先生に修行あれかし。とかくいふも、誠のむだことなるべし。

明和七庚寅九月十七日

未央庵宗納

茶の湯は、何の爲にしたるといふ事を、人皆知らざる故に、事理本意に違ふこと多し、夫れ茶道は、知足の道なり。知足は足ることを知ると讀むなり。皆人々程々に、不足にても事足るものと言ふ事を知ることなり。

昔東山殿時代華美に長じ、天下の人氣、皆分々の程々を忘れたりしかば、宗易の時も、其の風止ます

易是を見て、いと悲しく思ひけり。此に佗の茶湯を作り、知足の道を行ふ。茶の本意は、知足を本とす、茶道は分々に足ることを知ると云ふ方便なり。足ることを知れば茶を立て、不足こそ樂しみとなれ、皆分々を知ること人なれ。是を以て茶は皆不足の具にして、茶を立て樂しむべし。人として足るを知らざるは、人にあらず、不足にて茶を立て樂しむが人なり。此の意にて身を修め家を齊ふる事もなるものなり。茶道は足ることを知らせんための作なり。依て數奇といふスキも、又知足の事、知足は何覺るにあらず、心得るなり。

茶を立つるもの、茶の法はこゝろえたれども、知足を知らず。又茶事には足る事を知る人も、萬に一人もあるべし。然れども、日々家事まで、茶の本意通り、足る事を知りて行ふ人は、萬人に一人もあるまじ。若しありたれば、話に云ふ首替なり。茶の湯は知足の教の道なり。此意、茶の時ばかり、數奇屋内ばかり、知足にても、一家内に知足なきは、知足にあらず。知足の行を教ふべし。是故に、禮法に基きて、教法、禮法、古道にあらずんば、知足事叶ふまじ。知足こそ茶湯、數奇道の根本、不審庵利休宗易居士の本意なり。此意を利休居士の心腹に道入り、心の内を能く見たる人は、百年の前にもあるまじ、百年の後にもあるまじ、知足の儀より合點すべし。それを何ぞや、生質知足の人も、茶をすれば知足を忘れて事を好み、求めて知足の體をなす事になりしや。

今の茶の湯といふものは、古物みせのやうなる斗りにて、事を好み、金を入れて、佗の體を扱ひ、知

足の體をなす事になりしなり。數奇屋、古柱にて造ること、これ此様なことにても、家雨漏らず、住居もなり、又茶を立て、樂しめば、又樂しみも其中にあるものぞと手本に作りたるなり。此の本意を知つて茶をすべし、これを知らずしてはせぬがよし、先づせぬ方が上分別なり。

今時の茶、此の心を知らず、故に表裏の事になりたり。至極の惡道、人間のする業にあらず、人柄悪しくなるものなり。今の世の茶する人は、盗人同様に惡むべし。盗人にも劣りたる盗人なり。盗みして日を送り、妻子を養育す、是も食事足らずば、乞食しても、足る事を知らざる故に、盗みするなり。今の茶人もこれに同じ。盗人は金銀米穀を盗み、今の茶人は茶道の字を盗む大罪人なり。誠に礙け物なり。知足の二字知らずしては、一日も濟まざることを、心に知ると、心得る事能はず、耳に覺え、心に聞くことならず、目に見て、心に見る事能はず、口に云つて、心に知る事能はず、食すれども其味を知らず、大小便に通じたる様の事、知足を行ふ人、今日までなし。

茶 礎

茶の湯は稻葉に置ける朝露のごとく、枯野に咲けるなでしこのやうにありたく候。此味をかみわけなば、獨り數奇道を得べし。其外客の龜相は、亭主の龜相なり、亭主の龜相は、客の龜相と思ふべし。味ふべき事なり。客の心になりて亭主せよ、亭主の心になりて客いたせ。習にかゝはり、道理にからまれ、かたくるしき茶人は、田舎茶の湯と、笑ふなり。我が流儀立つべからず、諸流皆我が流にて、

別に立派あるべからずと、可覺悟なり。

茶の湯に心を寄する人に送るもの也。

明和七庚寅極月三日

一 齋

贅語は公の若き時の作、茶道初心の者、昔も今も同じく茶道門外觀の月並的茶道警戒のものなり。茶礎は公の晩年の作、老成圓熟したる時のものにて、速州公の書捨文に勝るとも劣らぬ茶道の眞髓の表現したるものと謂ふべし。

五 大崎名園

公が退隱後、靜に茶禪一味を樂みたる菟裘の地は、江戸在の下大崎なる下屋敷とす。今東京都北品川御殿山町に屬す。その地の大半、舊長州藩士子爵山尾庸三氏の所有となり、民屋百餘戸櫛比して舊時の面影を存せず。唯そのやゝ廣き所に僅かに古櫻樹の殘存するを見るのみ。東面一帯の街路は今も昔と變らざれども、西面の高地より山手線の鐵路を下瞰すべく、北面藪を拓き、谷を埋めて新に街路を通じ、殆んど昔時茶亭清溪の傍だに偲ぶこと能はず。

年譜に據れば、この大崎の別墅は享和三年金三千兩にて買上げしが、表向きは戸越屋敷と相替ふを允されたることゝす。文化三年三月十三日こゝに引移るとあり。總坪數二萬一千九百七十五坪一合にして内拜領地一萬七千八坪七合、抱地四千九百六十六坪四合、その内東館坪數一千五百十三坪、西館構坪數一千七百四十七坪六合にして、西の方庭園祠堂、倉庫、曝涼所、其他長屋向、諸番所、所々地坪、一萬八千七百十四坪五合とす。而して總建坪二千二百四坪四合、坪の内百四十坪二合、庭廻り並びに道畑とも一萬九千六百三十坪五合とす。園内の茶屋は、十一箇所に於て、松暎、(冲天橋あり)爲樂庵、篋々閣、窺原、眠雲、(松荷堂、臥月眠雲の額あり)富士見臺、(向峰の御茶屋)一方庵、(御兩殿御涼所)清水茶屋、獨樂庵、紅葉臺、(四散の御茶屋)利休堂(直入舎)あり。四箇の吾妻屋はこの外にありき。

嘉永の年浦賀灣の黒船に、幕府の狼狽へんに物なく、江川太郎左衛門の提案に由りて品川沖に臺場を築かんため、あたはこの名園は幕府に沒收されて陣屋となり、數多の茶室は取毀たれ、庭石の如きは臺場を築くに用ひられたりと云ふ。當時佐久間象山は、この臺場無用なり、觀音崎あたりに設くるにあらずんば江戸の安全は保たれずとの意見なりしが、江川翁の勢力に壓せられて、その説遂に容れられざりき。今や數箇の臺場、徒に吾人をして凄愴の感を禁ぜざらしむ。今日なほこの名園の存したらんには東都隨一の樂園として、音に好事家を娛ましむるに止らざるべきことを。文政十二年三月十八日、越後國中蒲原村松の藩主一閑庵堀丹波、この園に來り遊び、幸にその紀文を残せり。これ實にこの名園の面

影を偲ぶべき唯一の資料とす。因てその全文を左に掲げん。

大崎名園の記

年頃心にのみ懸りける、大崎なる松平不昧公の園生に物せんとて、彌生の十日餘り八日といふに、左近將監松平主と共に、彼の見まくほしかりける園生になん詣うでける。

今日は曇りて空の景しき晴々しからねど、花の折なれば、いと面白し。先づ乗物にて、かの一構ひには至りぬ。

豫ねて御門の外にて、乗物より降りて、右左並木などの植方をも打眺めまゐるべく思ひしに、定めもある由にて、編笠門の前にて降りぬ。

星野久民出迎へて案内せらる。先づ御客屋に至る。此處にて、役人衆出迎もあり、楮編笠門より道二筋あり、右へ至れば獨樂庵の門なり、左に廻れば「喫茶去」の客室なり。同處の入口の上に額ありて「喫茶去」の三字横一行、板に彫りて胡粉塗なり。書は不昧公の御筆とかや。遠州公に能く似て、たがふ事なし。右二疊臺目なり。此處にて今日詰合の御側用人望月圓次主を呼出して、一禮を述べ。

其より繼上下を取りて、久民案内す。留守居蒲生忠兵衛主の附添にて、先づ稻荷社に詣づ。鳥居の内左右に石燈籠凡そ六本立てり。社の造りさまは、常體になく古代めきたり。階の土右左りに、木彫の白狐立てり、これなん名高き小林如泥の作とかや。木地木目を見せて作りたるを向ひ合せに据ゑあり、

實に珍らしき作りさまなり、之に金網覆ひたり。正面の扉二枚にて、上下はしはみ入り、煮くるみやうの鐵具を仕つけ、眞中には同じかねにて、海老鏡なり。社の造りさま、なべて木地に見えたり。境内右の方林の内に、赤松の大樹あり。左右の樹木は雜木なれど、殊に綺麗なり。其れより利休堂あり、直入舎に入り一覽なす。此の茶屋は襖反古貼り仕立にして、世に珍しき文、或は唐筆の切れなど貼り付けありて美し。竹の腰掛作り方いと面白し。外へまはり戻らんの心なれど、相客先きにまゐられたれば、眠雲の茶屋に至る。

その途中「吹吐」といふ額あれば、此の亭に至りて見るに、左右叩き泉水にて、縁通り唐松の透し欄干やうの者あり。此邊はなべて唐風にて、又和らかにて、僅か硬くは見えず。此處に舖瓦眞中に、唐もの、古作曲縁を据ゑ、虎の皮を掛けらる。此處より左の方へまゐれば、から門あり、潜りて入れば花畑にて、花壇くさくあり。獨樂庵の趣よりや、御好みならんと思はる。右の方へまゐれば、三本柱の井戸は、直入舎より此亭までの間か、又は此亭より眠雲までの間か、さだかに覺えずなりぬ。鏝り井戸、丸石疊みあげにて、木の井筒を組み、車にて釣瓶を仕掛けたり。屋根は杉皮造なれど、いと面白く、花壇の處より左を見渡せば、御茶屋一棟あり。之なん不昧公の後室より子の方の住居とかや。其より眠雲までの處は野徑にて、誠に面白く作りなされたり。左右野芝生ひて、田圃も多くあり、赤松、櫻、柳、梅など交植にして、かたくな面白し。石燈籠所々にあり、一々覺えかねたり。されど

上方より御取寄せ給ひしものならんかし。

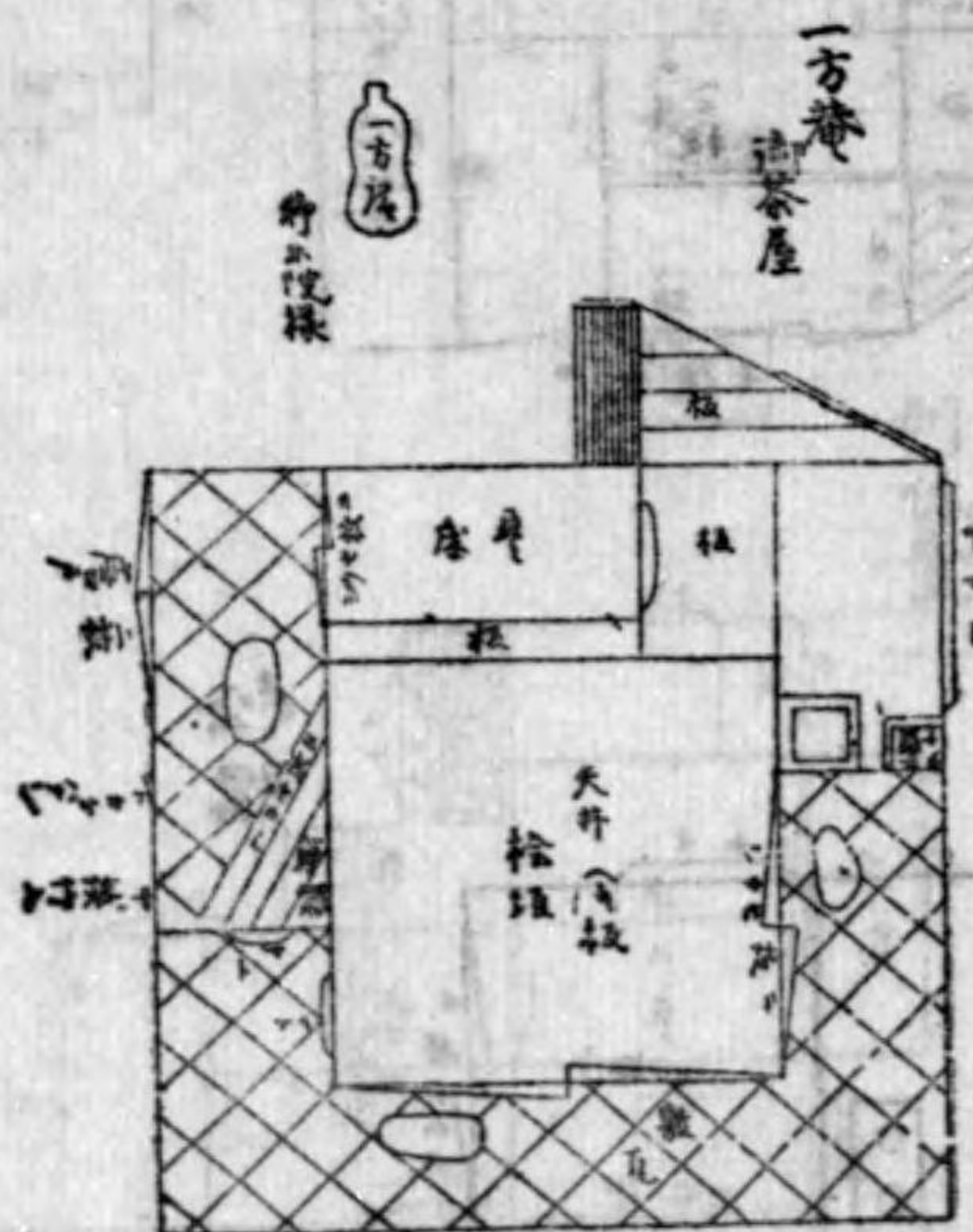
眠雲の御茶屋入口に門あり。唐戸にて披き、内庭の圍ひは、外かたを見渡す爲の趣向にて、和らかに仕なしあり。砂の鋪き方は大徳寺塔頭にあるをうつされたるならん。此處の石燈籠は、利休居士の所有なり。手水鉢は澤庵禪師の所有とかや。いづれも世に名だたる品にて、目とまる者になん。

此の御茶屋にて暫しやすらひて、相客などに會うて、これより庭の内をなん物せんとて、再び立出でぬ。案内は坂本雄峰老なり。先づ通天橋のうつしの處を見んとて出でぬ。この途中に亭一ヶ所あり、其脇に空堀あり、砂利敷にて、泉水の形もあり、土橋もあれど、すべて土橋の上も眞石を敷きて、長段の如くに作られたり。是なん雨天の時、庭下駄の跡つかざる爲の御趣旨とぞ思はる。それより彼の橋に至れば、山より山へ九間の橋廊にて、一間毎に左右柱立欄干もあり、橋は勾配なくて、眞直に作りなされたり。其實中に「冲天」の二字、不昧公の書にて、胡粉塗、ふちなし木地の額あり。橋の左右、山楓と一行寺楓とを植込みて、秋のながめは誠に目さむるとなん承る。實にさもこそと思はるれ。橋下は空堀砂利敷にてよろし。

渡りなせば、松暎の御茶屋なり。こゝも入口に額打ちて「松暎」の文字、清巖の書にて名印もあり、古木に彫りて、胡粉塗なり。此御茶屋作りやう、特に面白く、叩きの所にて長段あり、骨石をねり土に混ぜ磨き出したるなり。石は出雲國の産のよし。磨きさまつやくしく光りて宜し。張出板縁の處

より左を見れば、御殿山よく見渡さる。花の折なれば、之をめぐる人多く見えたり。かの「百敷の大宮人はいとまあれや云々」の歌の心ばへ、思ひやらる。此の茶屋の床柱珍らしく、案内せる雄峰老に問へど、打忘れたりといふもをかし、笑ひもて行く。

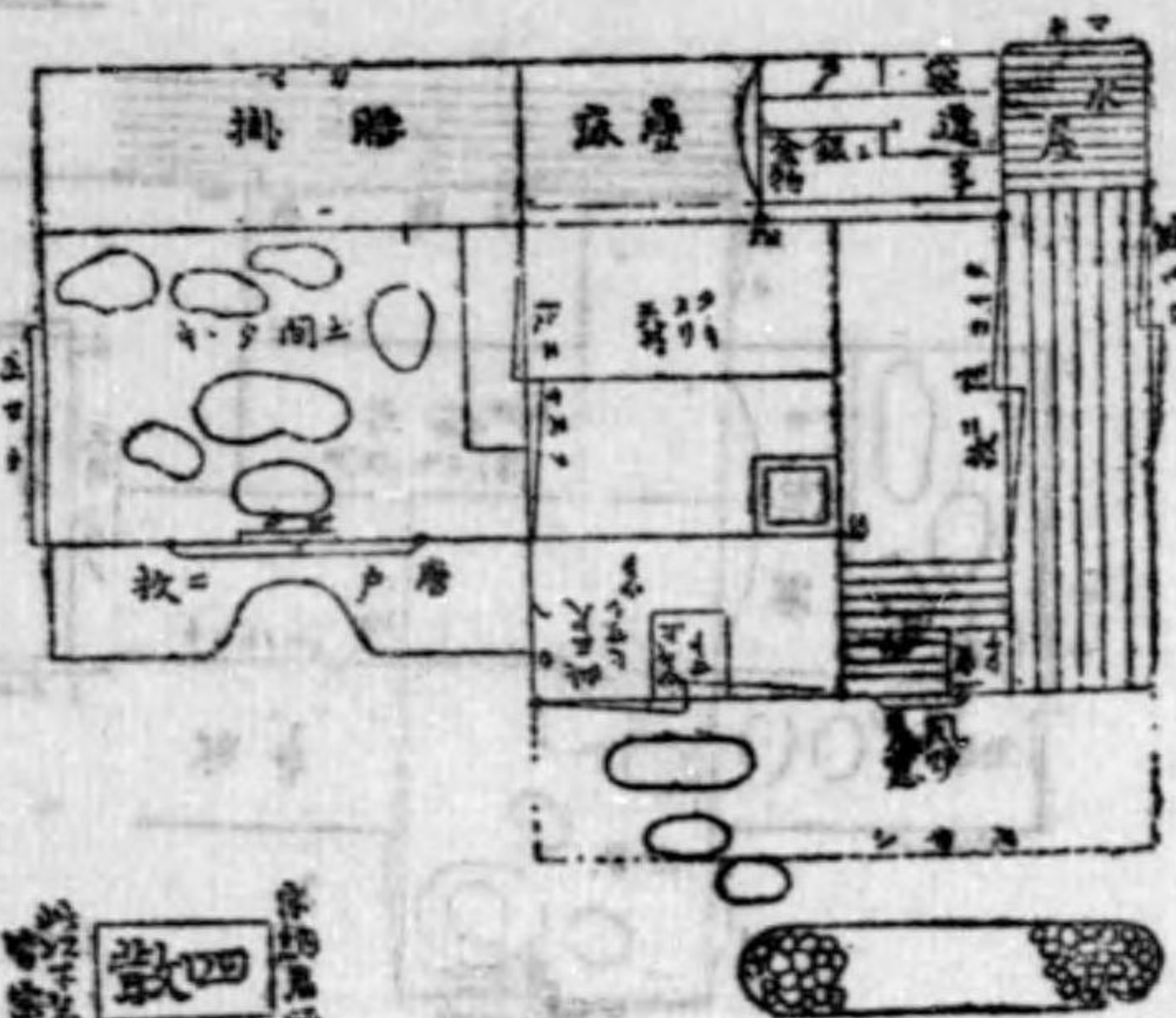
爲樂庵に至る。入口門あり、合天井にして、屋根の作りざま殊に面白く、門に額懸れり、三角の形にて、木地ふち無し。「關門」の二字、豎一行彫りて胡粉塗り、書は遠州公のよし、爲樂庵に入る。此茶屋第一に面白く寔に美を盡したる作りざまなり。さびの處は、清水にとゞまれど、善美を盡されたるはこの茶屋になんありける。額は御間の内にかゝりて、唐紙横一行に三名の筆にて、(爲の字は江月和尚、樂の字は松花堂、庵の字は遠州公なり) いづれも世に名高き人々の書ける者なれば、數寄者の殊にめづる品になん。襖の古畫は松榮の書ける者とかや。筆の力よく行き届きたる者なりけり。水屋も廣くして勝手までの都合よく、表の方なる手水鉢は、御影の六角なり。これなん羅生門の柱の石とかや。世に二つなく珍らしき者にて、寔に目醒むる心地す。火燈は赤松正目にて、曲げたる者なり。此細工だけに目を驚かしたり、之はかねて承る指物職の九兵衛といふ微人、作りたるとなん。勝手の土へつひはぬり立たる内に、瓦をしきに入れたる處、おもしろく見ゆ。此處を出て簇々閑に至る。されど晝飯の頃にして、染みく／＼と見ざれば、飽かぬことになん。もとの眠雲に還りて、こゝにて懷石をなん賜ひける。亭主役は、始終雄峰老なりけり。



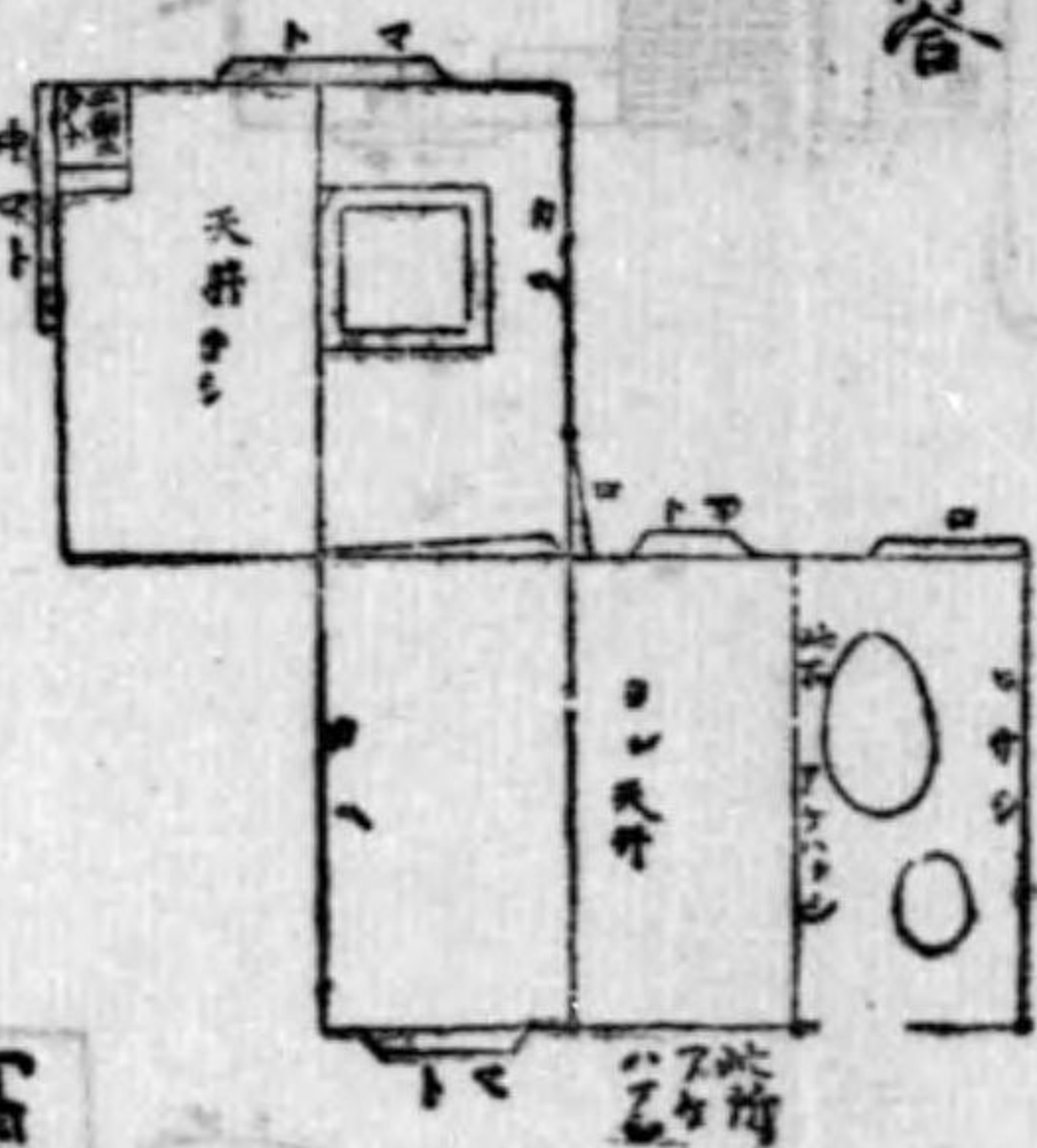
に目を驚かしたり、之はかねて承る指物職の九兵衛といふ職人、作りたるとか、
ぬり立たる内に、瓦をしきに入れたる處、おもしろく見ゆ。
此處を出て簇々閣に至る。されど晝飯の頃にして、染みく〜と見されば、飽かぬことになん。もとの
眠雲に還りて、こゝにて懷石をなん賜ひける。亭主役は、始終雄峰老なりけり。

大河雲洞御教寄居之圖

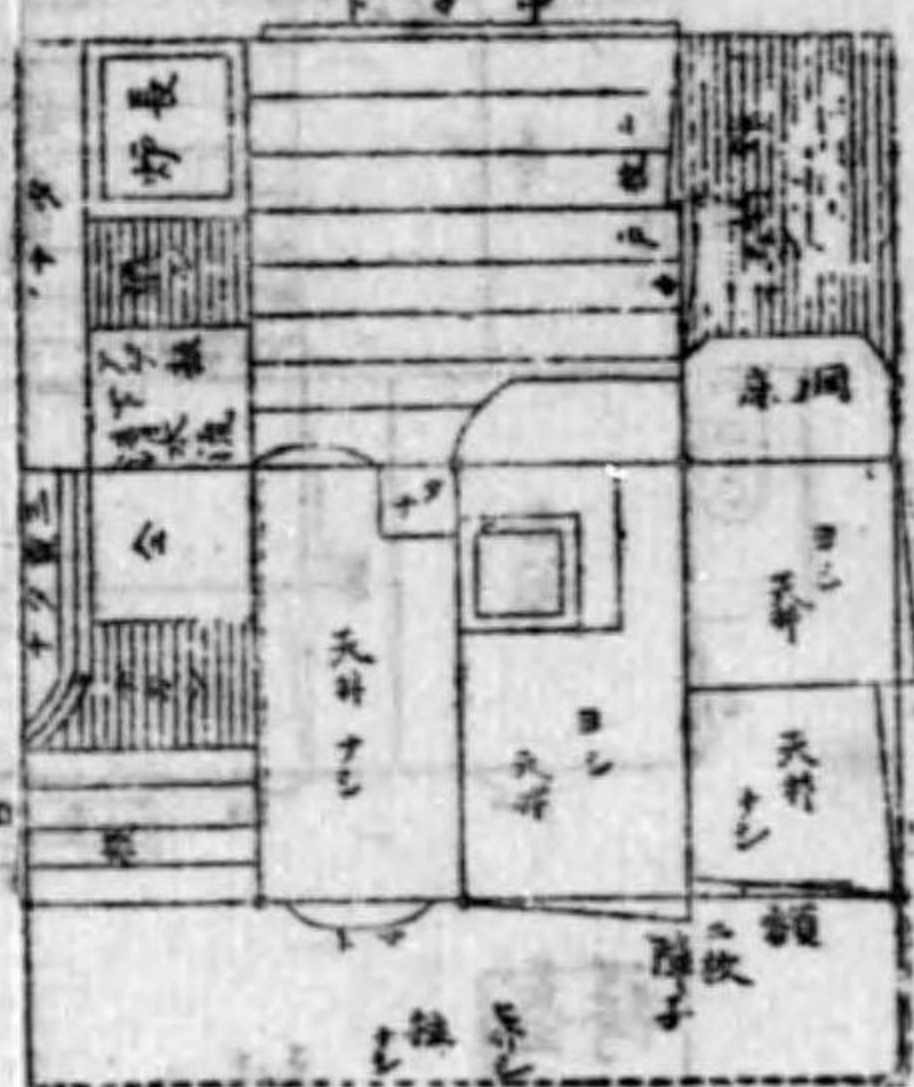
御茶室



清水谷待合

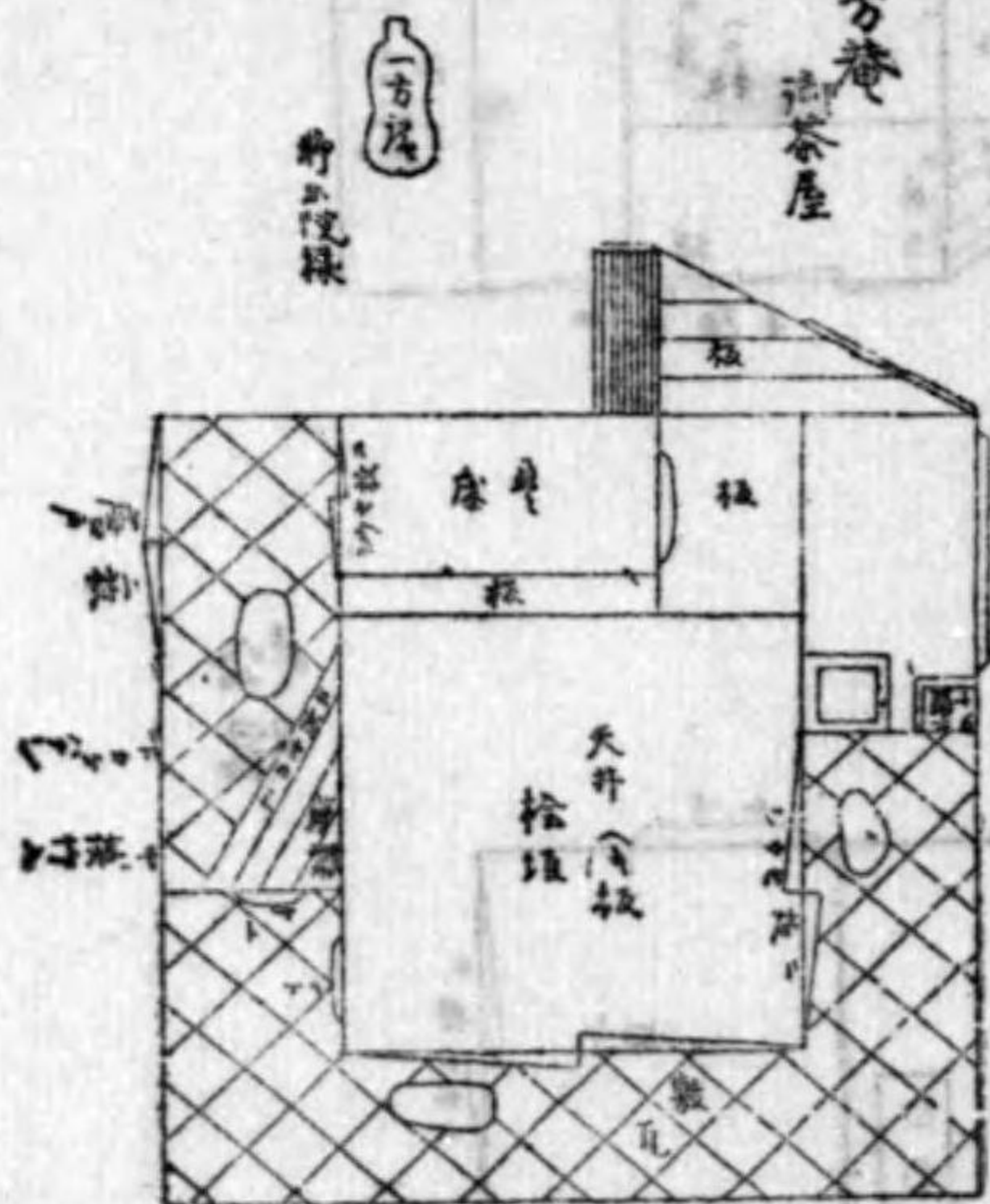


清水谷茶室



一方庵

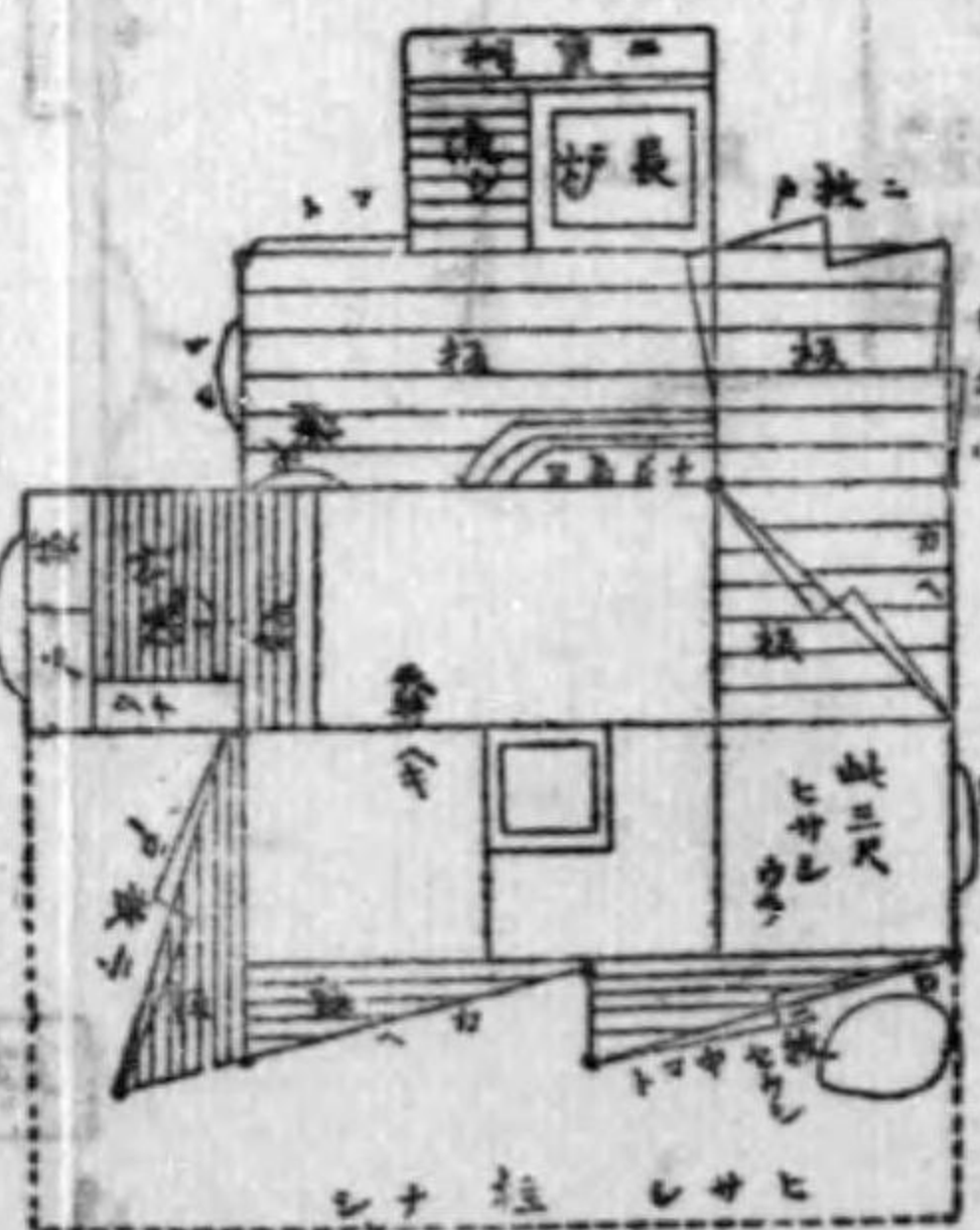
御茶室



簇々閣



富吉瓦臺



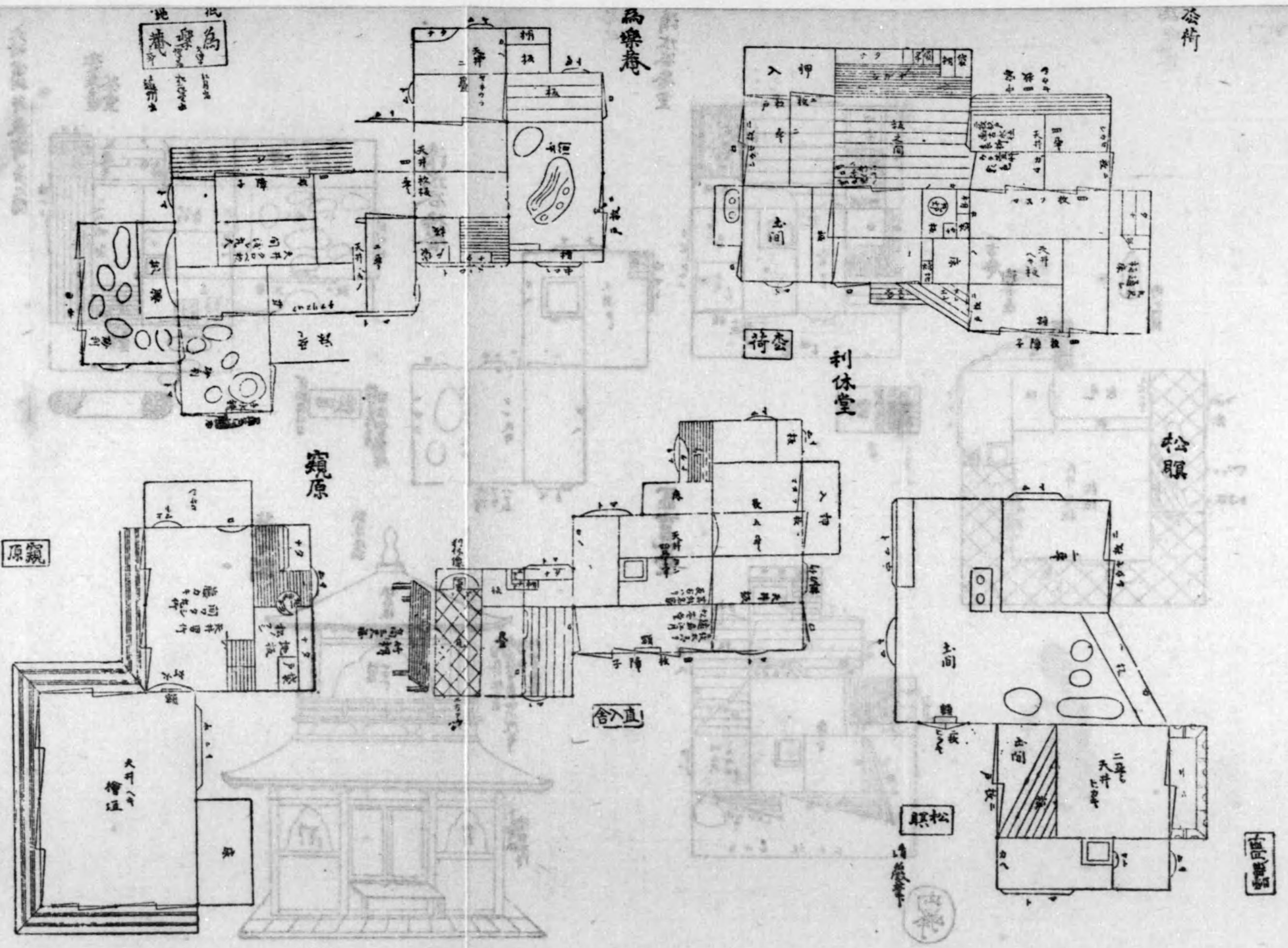
向峰

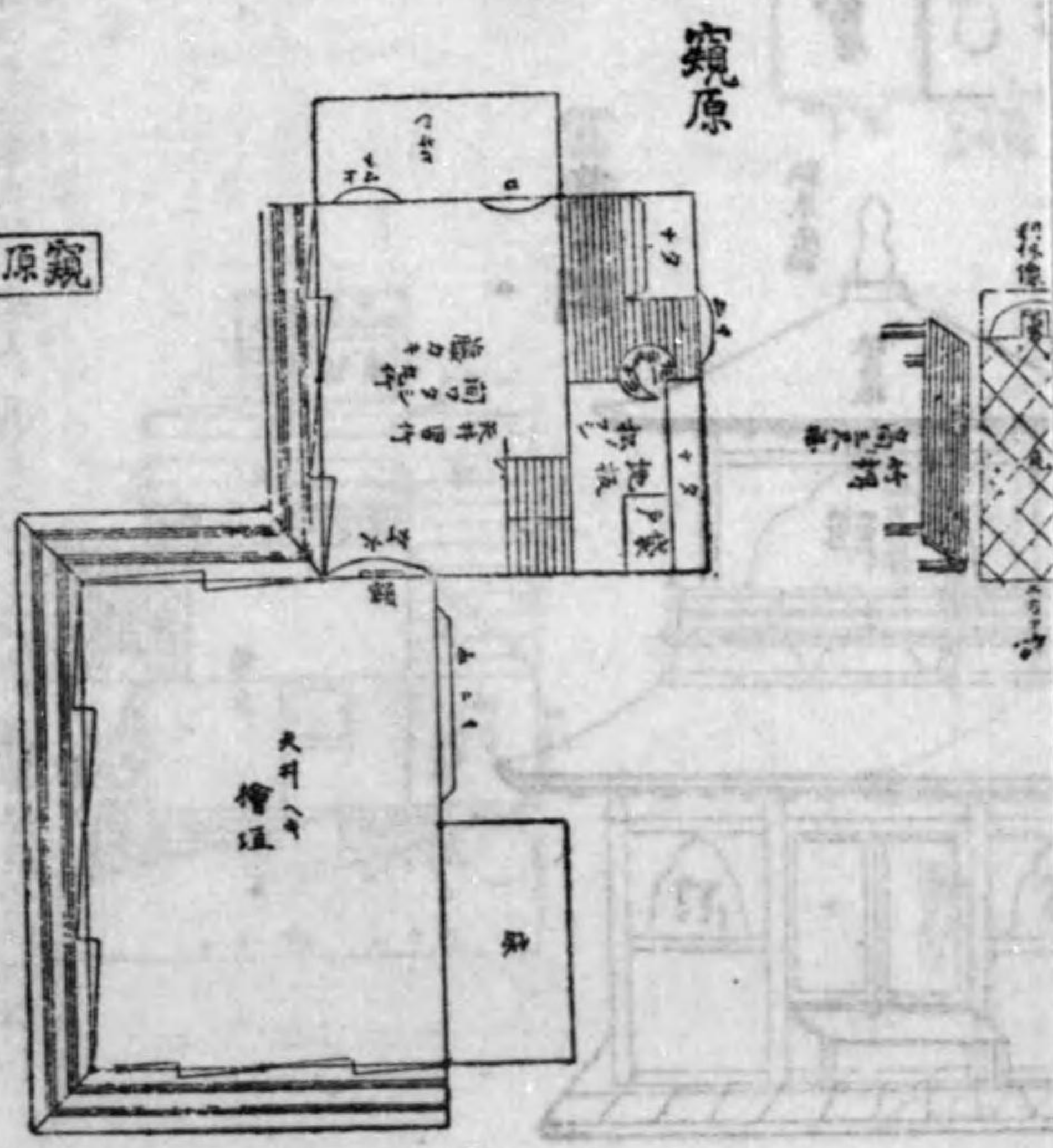
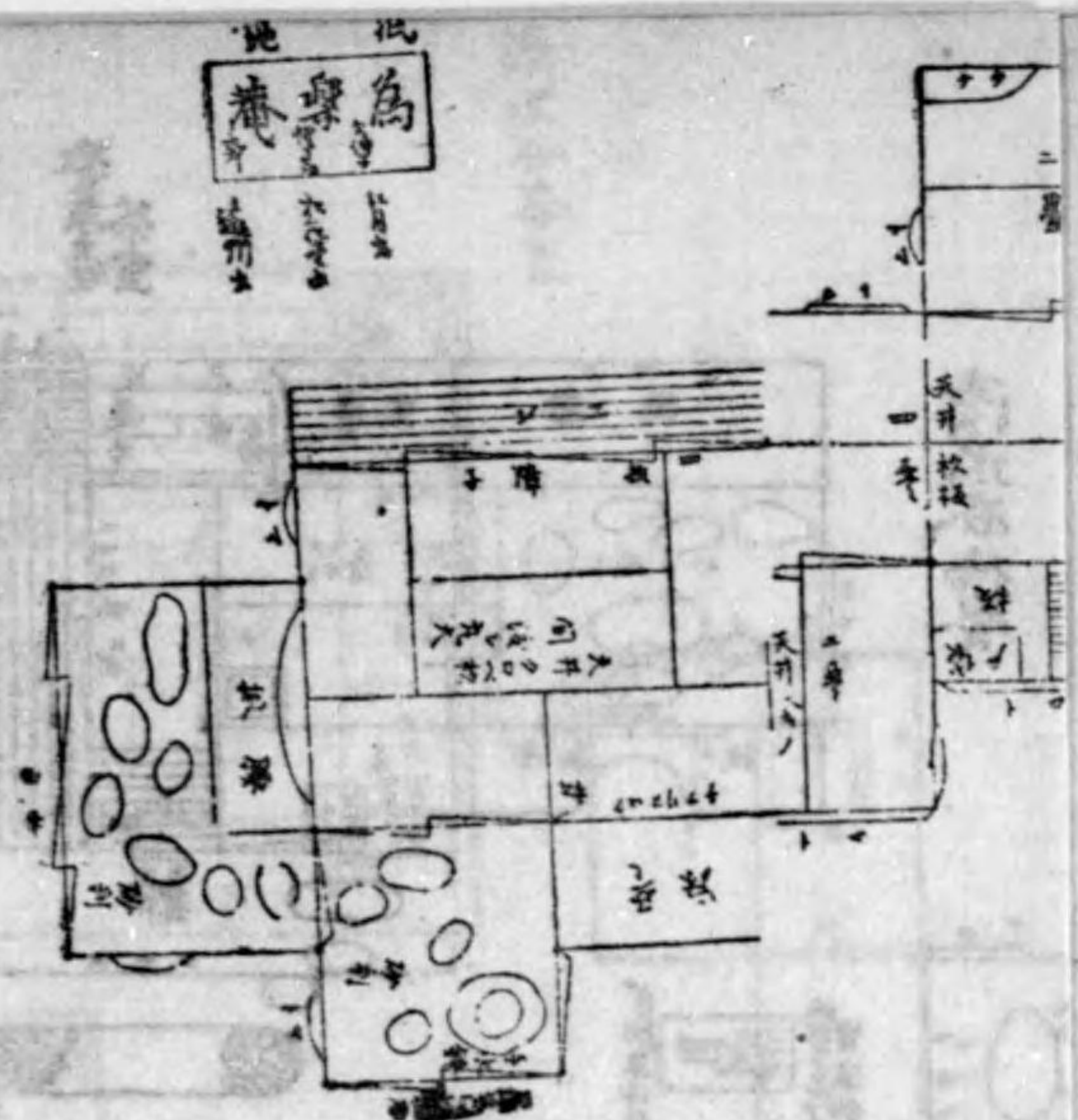
椀
 向皿
 鮎つくり身
 煎り酒
 三角焼豆腐
 雁笹かし
 吸口ふき
 かき立みそ
 同子
 午券

汁
 めし
 引物
 深庵漬大根
 白美濃
 鱈煮上げ
 いたや貝
 麦みそ
 よめな
 ちんび

中酒
 伊丹
 引盃
 取肴
 鰯山椒
 梅花漬
 醤油附焼

湯こがし





向皿 鱈つくり身 同子
すりわさび 煎り酒

椀 三角焼豆腐 午券
雁 笹かし

吸物 かき立みそ
白魚 袖のめ

御菓子 さつまかん
しそにしめ

汁 麥みそ ちんび
よめな

引物 鱈煮上げ
いたや貝

香物 澤庵漬大根
白燕漬

中酒 伊丹 引盃

取肴 鰯山椒醬油附焼
梅花漬

湯こがし

獻立書付及御銚附をも望みて貰ひたり。不昧公の御在世には、御銚附獻立とも人々より望みても渡されざりきとなん。之は覚えかねる位の人には、無益との御心しらひならん、實にさこそ思はるれ。己れ及ばぬことながら、數寄の道なれば、書附なしとて、大かたは覚えおらるゝ者なれど、近き世のはやりなれば、之にならひて、かくは物したるなり。

松荷堂にて、雄峯老をたのみ、薄茶のぞめば、同名の手前にて二服喫しぬ。此席も面白き作り方なり。之なん松花堂の御うつしとかや。丸爐切やういとくわびて面白し。相容ともに、妓處を出で、御數寄屋向ふまはりたくと望みたれば、「いと大破にて掃除も届きかねたれど」など、言葉を残して見せらる。このたびも雄峯老の案内にて、眠雲よりぞ見ける故、後の露地より入る。此あたり空堀泉水なり。

まづ四疊に至る、この露地入口の左の方に門あり、大ひらき中ぐり小開戸にて、面白き作りざまなり。此の四疊の席は向地にて、釘箱棚あり、總じて木の古き色に見ゆ。

それより一疊半長柄の橋柱の御席（獨樂庵、橋柱三本）に至る、是は柱太く丸く削りたるなり、天井格子にて、やり違の鏡板にて、いと／＼面白し。もとの四疊に戻り、水屋に入り、それより茶立口に入り、三疊臺目に入り、とくと見るに、面白き作りさまにてなん。さて外をまはり、腰掛を中ぐり、獨樂庵の御門までうち見て、外へまはりぬけるなり。境々の塀は杉皮多く、妙心寺垣は聞きわたりし如く、細工も面白し。此露地の飛石も、上方より御取寄せられたりとぞ。もとの如く石配りありしとなん、げに不昧公の御心入れの届きたる事は更なり、言葉にも筆にも述べがたし。石燈籠又は手水鉢の据えやう、一々おもしろく、作者及由來をも、詳に尋ねまほしく思ふなれど、雄峯老は相容の案内にて居合せられず、眞に残り多き事になん。なべて上方風を寫されたる所多く、江戸風に見えずして、古作の趣なれば、かゝる所に目を付けてこそ、後學の益少からざるなれ。獨樂庵の門の扉は、古作黒塗にて、朱塗の處も剝げ、聊かづつ残りたるが、古色ありて面白く、譬ふるに物なし。これなん彼の世にもいみじき豊太閤より、千利休へ賜ひしものとかや。げに言葉の及ばざる者になんありける。利休堂の前を通り、山を廻りて、半腹の處にて、しがらみにて土を盛り、腰掛あり、又おりて四散の御茶屋に入る。こゝは濕氣深くして、いたみも聊か見ゆ。席の内に水屋ありておもしろし。袋棚

は古きを用ひたまひて、戸は近江八景のよし、常には替戸のかんこ張り立居たり、けふは八景は見ずなりぬ。

かり込屋根のところ、突揚げ窓あり。その作りさまいと／＼面白く、襖戸白桃に鳥の圖、古畫うつくし、古永徳の筆とかや。又山を下り、藤棚の所に至る。しがらみにて土を盛り、腰掛三ヶ所ありて棚の下に在る藤の棚門をくぐり行けば、柳の多き所に出でぬ。池もありて、土橋二ヶ所に渡し、池の中張り出る處に亭あり、こゝの石燈籠は、前に「權大僧正云々」と彫りたるが立てり、年號及由緒も開漏したるは口惜し。

それより清水の御茶屋に至る、待合もありていと好き所になん。閑雲の御茶屋は、不昧公の御好みの内に、是のみ御心に叶ひたるとなん。げに清水の流を水屋にて汲み取るやうの作り方にして、寔に清淨かつは風流にて、何とも云はん方なし。茶人の第一に目とまるは、この御茶屋になん。此處の入口額あり、「閑雲」の大字横一行、そのするに面白き句（拾新汲瀾煎茶外）あり。書は不昧公なり。檜板に彫りてふちなし、胡粉塗なり。此席一枚障子、竹骨にて、さびたる趣面白し。床の作りさまも同じ。勝手竹縁あり、藤蔓編みにて、佗びの作り方、いと／＼みやびたる事になん。

又山を登りて向峰の御茶屋に至る。此處は殊更なる作りさまにて、一席の内に屋根裏を見せ、下り天井二段にこれあり、遣つかひのつく柱の頭は、染付の蓋やうなる物に附けられたり、之は器の蓋の

離れとぞ見ゆ。

山を降り櫻の多き所に至る。土橋を渡れば、流の側に御茶屋あり、次の間の境入口に額あり、「窺原」の二字横一行、唐様なり、書は蓬雪となん。縁は赤松皮にて作りたり。こゝの明障子、こしあぶら竹なり、割りたるを表裏互違に並べ打ち、腰張は此御茶屋ばかりは、鼠色の塔紙なり。此處にて相客と暫くやすらひて、茶箱も出し、樂しめりとぞ。己も持込みたる茶箱を取出でて、雄峯老を呼び返し、翁と共に茶を喫して物語りしつゝ、花をながめれば、世の外の心地す。

此處に出し置かれたる菓子器は、きぬた青磁の鯉手の鉢にて、美事なり。湯器は銅瓶にして、眞中に火を入れ、提げありく器物にしておもしろし。

山を上り、簇々開の前に出る途中に、山より山に懸けたる物あれど、損じたる所あるよしなれば、もとの眠雲には歸りぬ。こゝにて御酒、御吸物、其外種々たまはる。此うつは物は、すべて宜しき物なりけり。

はや七ツ半時にもなれば、相客はさきに歸られたりとなん。己は残り居て、再び盃を取りて、望月、蒲生の二主を呼び出しつゝ、盃の數も重なれば、いたく酔ひぬ。さてかるへさに、雄峯老の案内にて、おく締りのうち、一方庵へまゐりたり。かのより子の方の老を養ひたまふ所となん、今迄釜かゝりしものにや、席中火氣残りたり。此處をしも見せられたるは、格別に言葉かゝりしものならんと、いと

いと尊し。此處の水指、空中作と彫りあるを、わざ／＼見せらる。蓬雪の自畫讀夢の一字、蝶の畫の掛物は、げに珍らしく面白し。此處は早く立出でて、順路の通り歸りぬ。最も編笠御門外にて乗駕、そのうちまで役人衆御茶道及取持の人々まで見送りありて、いと／＼怒なる事どもなり。おのれも眠雲の御茶屋にて、側用人望月ぬしを始め、けふの一禮を述べ、年頃の宿願一時に叶ひ、殊に花のをりにて、實に後學の益する所少からずと、かへす／＼申し述べおきたりとなん。

附添ごと

廣大なる御庭内なるに、飛石のつなぎ無き處は、聊か見えす、隅々までいさゝか塵なく、寔に掃除の行届きたる事は、江戸中に外にこれなくと知られたり。吳々も残り多きは、一日の事なれば、寸法までも覚えかねたると、六疊ばかりの不昧公の御居間の作り方を一見せざると、其外紅葉と菊の境を見ざるは、口惜し。今日を縁にして、重ねて紅葉の頃、必ず拜見致度と、立會の人々に深く頼みおく。所々に戸障子のはづしたる、入れ置く處あり。此の御好み、誠に感心せる事どもなり。又所々に便所あれど、皆作りざま違ひありて、宜し。なべて金具類に至るまでも、御好みあり、寔にこまかなる所まで、御心付けられたるものなり。樹木は思ひの外大木少し。されど廣き處なれば、數は多くあるべし。又大石はなく、清水の流れ落にこれある石は、まづ大石のかたならん。なべて和らかなる作り方にして、たとへば大和山水とも謂ふべく、簇々開より庭のはなれ、見卸の景色、遙に遠見の田畑、

又は遠き森など、見のよろしき事どもなり。

簇々開の天井は、格天井にして、鏡板、杉、砂摺、金箔押し、墨繪浪にて、みな丸の内であり。筆者は伊川法印なり。上の件りに洩したるは、冲天より松溪、爲樂庵、簇々開の形を御舎にて致されたるものならんかし。己れ北國在所なれば、上方更に知らざれば、けふ大崎の園生を見るは上方一見、或は大和廻りも同じやうに楽しみたり。櫻の多き所に、古銅燈籠あり。棹廻り二尺餘、臺は亘り三尺餘もあるべく、珍しき燈籠なり。

庭内長壇の作りやう種々ありて面白し。根夫川石は偶に見えたり。今江戸にて俗用の黒ぼく石は、一つもなく、又くらま石も見えず。御數寄屋あたり、樹木植込み、筆にも及びかねたり。隨流垣の大きく高き作りやうもおなじ。

いづれの御茶屋も、壁は皆鷹ヶ峯さびの土に、大つた入なり。爲樂、四散、向峰は、殊更にさびよく出でたり。雄峰老に尋ねれば、さび過ぎたりとぞ答ふ。

木品はみな木地にして、なぐり多くあれど、江戸職人の作りたると違ひ、これなん眞のなぐりとや云はまし。かねて聞及びたる連子窓、竹打様も同じ。なべての御茶屋からふきこみ、つやくしく見えて、疵はいさゝか無く、今作りたるやうに見ゆ、實に御手入の行届きたるには驚きぬ。

手水鉢見たりのまゝ、蓋を取り見るに、すべて綺麗なり、石燈籠は皆白さびにて、悪るさび苔つ

きはなし。飛石は高く綺麗なれば、時々土を洗ひ流したるものならん。御數寄屋の脇に在る噴穴は、亘り凡そ一尺六寸ならん。又長段の内に、青小砂利敷、又はごろた石をまばらに入れたるもありて、一とやうならず面白し。所々の御門、みな作り方違ひたり。唐戸、透し戸、色々ありしかど、覚えかねたり。敷瓦は、口つれの處も、古作になし、又御茶屋の屋根は、むねばかり丸瓦鬼瓦にて、なべて瓦屋はこれなく、只より子の方の御すまひの方に見えたり。椽下は竹並打ち、所々にこれあり。腰掛の處は、皆靴脱ぎ石なり。土べつつひは、皆大津土にて、下よりぬりあげたり。

腰張りは、大美濃紙一枚だけ、或は一枚半にて、二枚がさねは見當らず、美濃紙は親原ばかりなり。天井まはりぶちは、木品四品にて造りたる處多くして、いろ／＼なる合天井、所々に在り。一日にては、詳しく覚えかねたり。

下地窓の葭、今江戸にて用ふるみがき葭は、一ヶ所もなし。又藤のからみさま、殊更にて、俗にこれなく、面白し。水屋棚釣りやう、格別違ひたるも無けれど、竹流しの内は、板の交りたる作り方、品々あり。又茶碗棚は、かどを切りたるが多く見えたり。水屋棚などは、正目はこれなき方ならんかし。さび竹なげしの御二階は、より子の方の御住居にて見ざるも口惜し。元信筆の雁、芋の圓袋戸も同じ。

光琳筆竹の襖も見當らず、残りおぼし。清水切れの張り小襖同じ、これは當時後室殿の御すまひの

よし。

不昧公御在世に生れあはゞ、珍しき器物も拜見し、又は木の芽の道をも種々伺ふことの、さはなれど、年代後れたるは致方なく、残り多し。かつ雄峯老は、相容の先き立ちにて居合せなければ、役人衆へ尋ねてもさだかならず、かへすく口惜しき事になん。いづれ雄峯老をまねきて尋ねべくと、能く能く契りおくことにこそ。

右の外、心覺のあらましを、別紙に記しておくになん。見ん人その心して、誤りを正したまへかし。

(略下)

一閑庵のためにこの名園を案内せし坂本雄峰は、名を慎といふ。別に一茶、大狸庵、宗理、臨々齋等の號あり。定江戸、格式奥列にて、奥家老及び守役を勤め祿高百三十石を食めり。かねて公の命によりて立花の技に長じ、屢々御賞賜を受く。公の歿後茶器曝涼の事を司る。列士錄に因るに、文化十二年十二月二十六日新番士に列す。是より先文化二年二月十五日、立花出精に就き賞を受け、文化二年四月二十一日公歸國の際公に従ひて伏見逗留中、京都の池坊に立花を學び、同三年三月八日公退隱のため老公御側坊主たり。列士後文政二年七月二日大圓庵像堂並びに庭普請を勤めて賞あり。天保四年三月朔江戸に歿す。二代は養子にて坂本慎右衛門といふ。

松平樂翁侯は政仕後、花月を友とし、時に東都の名園を尋ねて遂に大崎に來り、その風勝を賞美するの

あまり、谷文晁をしてその眞景を描寫せしむ。この繪卷の跋文に曰く、

守國の君(樂翁侯を云ふ)山水を好ませたまふ御本性なれば、致仕したまひし後に、花もみち月雪のをり／＼に付、こゝかしことはせ給ひぬ。

出雲の侯治郷朝臣、世を通れたまひて、不昧と稱し、御城の南、大崎といふ所に、新に菟裘を營みたまひ、専ら茶を好みたまひつゝ、世に名高くいましぬ。この朝臣、世を去りたまひし後、年を経て、堅田の正教朝臣(江州堅田の藩主堀田攝津守)ものしたまひて、共に大崎へ行かせ給ひき。家居のかまへ、山水のたゞすまひ、木草のさまざまで、見る處多く、殊に賞し給ひて、やがて谷文晁に、その眞景をかゝしめたまひぬ。

あづまの都に名園いと多ければ、こと／＼に眞景を寫させ給ふ御心ばへと思ひ奉りしが、未だ幾くもなくて遂に失せたまひぬ。しかのみならず、かた／＼の御庭の繪さへ、一卷は焼け失せて、これだに全からず。かの名園を觀て、天下の盛んなるを知るといへば、御志をつぎて、つき／＼に書かまほしうなん。

天保二年八月 日

田内親輔しるしぬ

原繪卷二卷、桑名藩邸に在りき。大崎別業の全勝を悉く描寫せしが、文政十二年春三月江戸大火の際桑名藩邸たりし八町堀の上屋敷並びに築地下屋敷、共に一日の中に灰燼に歸せしを以て、その上卷を燒

失せり。この奥書の筆者田内親輔は樂翁侯の侍臣にて文事あり、頼山陽、佐藤一齋なども交はれり。焼け残れる一巻の繪卷は、明治二十九年磐瀬玉岑之を臨摹し、同三十二年臘月裝潢成りて東京帝國圖書館に納む。この繪卷を見るに、獨樂庵、直入舎、利休堂、向峯亭、四散、紅葉臺、清水茶屋、簇々閣、芳齋亭、稻荷社など十三枚つゞきの極彩色にて、鬱蒼たる綠樹竹林、艶麗なる櫻花楓葉、或ひは清楚たる蓬池清溪の裡に、樓閣茶亭の駢立する眞景を寫し、觀者をして心神恍惚、さながら仙境に遊ぶの想あらしむ。

樂翁侯も自ら再度この名園に赴き、その風光を嘆美し、各亭に對して和歌を詠ぜり。その歌集「あさち一雜之部に

大崎の雲州の別莊に行きてよめるが中に、臥月眠雲の額かけたる亭

雲かゝる折々ごとに夢や見む月のしたぶしあかぬよすがら

亭あり、案内のものに名をとへど答へず、主人この世去り給ひし後に此亭落成したりしなど語る頃、遠寺の鐘

聞えければ

庵の名を問へど答へず袖の上につゆうちそふる鐘の音かな

再ゆきてよめるが中に折りしも雨ふりていと物さびしき秋なりければ、彼亭にて

鐘の音も去年にかはらぬ夕暮にうち重ねつゝぬらす袖かな

松江市井川洲氏は樂翁自筆のこの歌卷物を藏す。

獨樂庵は當時茶界に名聲噴々たりしものにて、公もまた頗るこれを愛玩し、近火の折はこの茶室を全部滑草にて覆ひ嚴重に保護せりといふ。さて獨樂庵の名は利休の茶室に基く。大崎名園中にある利休好二疊園即ちこれなり。その初天正の頃、利休が長柄の橋杭三本を發見し、豊太閤に請ひ得て柱となし、宇治田原に一室を構へて、獨樂庵と名付けしものにして、「獨樂庵」の額は天林和尚の筆なりき。其後尾形光琳、銀座内藏介に勸めてこれを京都に移したるが、年を経て荒廢し、遂に大阪町人阿波屋某の手に移りたり。其後、阿波屋没落するに及び、この名庵もまた荒廢に歸せんことを嘆き、京都の茶具商竹忠事竹屋忠兵衛の紹介により、文化の初、公の手に歸し、舟越伊豫守好三疊大目の茶室と合せて、大崎名園に移築せられたるなり。このこと裏千家三代目六閑齋泰叟宗安の筆記せし「太柱獨樂庵覺書」といふに又文齋一燈の添書せるものあり。

金森得水の古今茶話に曰く

(前略)此持主(阿波屋)身上不如意になりて、此席も人手にわたり、其後これかれと流轉せしに、いづれの手よりか、京都の骨董商竹忠なるもの媒介して、不昧侯の有となりぬ。壁土敷石までも、残りなく取り下し、同侯大崎の別業に住營し給ひしと云。さてこの圖を得まほしく日を送りしに、赤坂に伊勢屋八郎兵衛と云、有徳の町人、御用聞のよし、殊に今の隠君(不昧公孫)御左右近く御出入いたし

候との事承り、幸ひ此の八郎兵衛へたのみしに、大崎別荘はさし上相成、此席はやすめ有之候よし、隠居の御指圖もありて、漸其圖を得たり。こゝに江戸深川は伏見屋甚兵衛と云、極老の骨董家、若年のころ、不昧候御在世中、茶の御用に伺候せしが、そらおぼえのまゝ寫させて、平井宗三よりおくれり。世にいふ趣とは、大きく相違なれども、伊勢屋が手筋、雲州家より出たる圖と、甚兵衛そら覺の圖と、符節を合せたるが如し。さて獨樂庵は、二疊向板入の向切にて、勝手の方に續きて、舟越好三疊臺目、又泰叟好の四疊半あり。此二席は外持主の建そへしか、不昧候の物數寄か、心得がたし。左候へば、獨樂庵も、利休好正眞のまゝか、手を入れられし事か、外持主の手を入れし事か、いづれも不分明の事なり。

公の茶會記を見るに、獨樂庵にて茶事を行はれたること頗る多し。殊にこの獨樂庵に附屬せる舟越好の茶室を使用せる時とはちがひ、獨樂庵の茶事は道具粗雑にやかましく、大名物茶器は大抵この獨樂庵にて使用せられたり。

獨樂庵をはじめ大崎名園に在りし諸茶室の平面圖は、帝國圖書館藏の寫本をはじめ民間に在る寫本好古家の間に傳へられ、近き頃好古類纂にも山本麻溪氏縮圖して刊行したれば、人の既に知る處なるべし。かくの如く由緒ある貴重なる獨樂庵も、直指庵時代に江戸在砂村の下屋敷に移されたりしが、海嘯の難に遭ひて空しく流失しけるこそ千秋の恨事なれ。

六 孤 篷 庵

山城國愛宕郡大宮村紫野なる臨濟宗大德寺派の大本山龍寶山大德寺は、大燈國師の開基にして、後醍醐天皇宸翰を賜ひ、本朝無雙禪苑と稱したまひ、建武元年五山の上に列せしめられたり。その地勢たるや、東は舟岡の鼻に至り、南は嵐山寺に限り、西は鷹峯の土手に及び、北は千束藥師山の北邊に延ぶ。今や寺域や、縮少したりと雖も、尙ほ六萬八千四百餘坪あり。佛殿、法堂、山門、勅使門、唐門、北門、庫裏、相竝びて立ち、諸寺、諸院、諸庵、各所に散在し、緇素名門の墳墓隨所に存す。就中、大仙院（開祖大聖國師古嶽宗直和尚）には古溪宗陳の塔、聚光院には千利休の墓、三玄院には春屋宗圖の塔、石田三成の墓、古田織部の墓、眞珠院には一休和尚の塔、山崎宗鑑の墓、龍光院には江月和尚の塔、黒田長政の墓、總見院には織田信長の墓、天瑞寺には豊臣秀吉の母天瑞寺殿の墓、竝びに豊臣一家の墓、正受院には里村紹巴の墓、黄梅院には毛利輝元、小早川隆景の墓、清泉寺には片桐且元の墓、正宗庵には松浦隆信の墓、高桐院には細川幽齋の墓、高林庵には片桐石見守貞昌の墓あり。而して小堀遠江守政一、大有宗甫の墓は實に塔頭孤篷庵に存す。

抑も孤篷庵は、慶長十七年江月和尚、小堀政一の設計に由りて龍光院内に之を造り、寛永年中今の地に遷せり。寛政五年回祿にかゝり、幾許もなくして再興し、客殿は雲林院より之を移せり。孤篷庵の寮舎に禪徳庵あり、久しく中絶せるを文政二年公再興し、改めて大圓庵といふ。このこと次に掲ぐる世子月潭に與へし遺書に審らかなり。

大圓庵建立の儀、委細之趣意、申入置候。我等事、十九歳にして禪に志し、天真寺大巖和尚を師として、六年にして得ニ本来面目、生死を出離して大自在を得。又若き時より好茶、茶禪一味なることを辨ふ。世に數寄者ありと云へども、道を不得、茶を好むのみ、道は俗人の評判するものに非ず、禪坊主といへども禪といふものは何の事か不知者多し。當世只五六輩に不可過。茶は又世間にも流行、我等茶事の世に知る人多く、末代茶の名は不朽定と申すべく候。道はさらに知る人なし。空しくなるべし。我が道を人に賣るにては無く候へども、道名の末世に人の不知も口惜く、幸ひに孤篷庵に禪徳庵とて、小遠(小堀遠州)時代、江月の建立の名計りにて、庵無之、是を再建して、大圓庵と改め、大徳寺の一庵となし。我等が庵になして、今孤篷庵預置き、我等歿後の佛事をなし給へと申置候て、即ち法號大圓庵不昧宗納と號し、祕藏の雪舟の圓相の軸、我等が像となし、自費して大圓庵に置き、又壽塔を建て、以自筆石に刻み置き、見事に一庵建置候。然れども年々修覆も有之者、是迄は我等手元にて物入致し建置候へども、末代迄の儀、世々手入無之では、大破にも可及、何卒此庵、千歳の

後迄、不朽破損無之様に、御申付給候はゞ、大孝と思可給。當年歸國の節、立寄見物被成可被下、此後最早我等方より修覆等不致候間、破損も御坐候はゞ、京都留守居まで申出候様に、孤篷庵へ頼み申候間、其上見分致し取つくり申候様に頼入候、以上。

七月五日

不 昧

出 羽 守 殿

一、遺偈一字殘置候。六より九迄書在るを、切て可入候、大徳寺孤篷庵に可收事。表具上下、茶紙、

中納戸、茶しけ、一文字なし、風帶白張り。

一、法號は像の箱に書付候通り、淨土宗譽の字を付候はいやにて候間、此通り可致事。

一、一圓相の像、孤篷庵へ遣し候節は、三百金添可遣事。

出 羽 守 殿

其外役人中へ

雪舟の描ける圓相は、即ち公の御靈代とも稱すべきものなり。伊川法眼の極書に「雪舟筆一圓相、雖無模樣有畫意、依證之畢、伊川法眼、未十二月九日、榮信(花押)」とあり、而して箱書の表に公の自筆にて、「大圓庵出雲國主羽林次將不昧宗納居士像一軸」とあり。其蓋裏に自贊「道箇圓相、多論圓方、不方不圓、松平治郷」とあり。大圓庵は乃ち寶海和尚を以て開基とし、二代大鼎和尚、三代保叔座元相

承く。嘉永五年四月二十三日の夜火災に由り、公の建てし茶室焼失す。同七年舊に依りて牌堂を建つ。茶室は遂に再建を見るなく、今その跡に土藏一棟を存するのみ。大圓庵の總坪数は、七坪半にして、屋根檜皮葺、疊敷四疊半、佛前疊敷四疊半、其他三方悉く板敷なり。本尊は觀音及び達磨を安置す。正面に圓相の幅を掲げ、其前に大圓庵前出雲國主羽林次將不昧宗納大居士の靈牌を安置し、左側に月の畫幅及び彭樂院の靈牌を飾り、右側に月潭院及び直指庵の靈牌を飾る。各靈位を安置せる前面塗籠の上部中央に觀音金像を安置す。大圓庵の正面は四枚の襖、他の三面はすべて腰高障子にて、四面悉く十牛の畫を描く。筆者は中務卿勝川法眼藤原雅信にして、金色燦然たる小色紙十枚を貼る。歌は公の筆にて、十牛の讚歌なり。即ち東の襖に「尋ね行くみやまの牛は見えずしてたゞ空蟬のこゑのみぞする」心ざし深きみやまのかひありてしほりのあとを見るぞうれしき、南の襖に「青柳のいとの中なる春の日につね遙なるかたちをぞ見る」はなさじとおもへばいと心うしこれぞ誠のきづななりける、西の襖に「日敷へて野かひの牛も手なるれば身にそふかけとなるぞ嬉しき」すみのぼる心の空にうそぶきてたちかへり行く峰のしら雲」而して北正面の四枚の襖に「よしあしとわたる人こそはかなけれひとつ難波のあしと知らずや」雲もなく月もかつらの木も枯れてはらひ果てたるうはの空かな」法のみちあとなきもとの山なれば松はみどりに花はしら露」手はたれて足はそらなるおとこ山かれたる枝に鳥やすむらん」の十枚の小色紙、各々書き方を異にして認む。大圓庵の門に「認蹤」横一行の額を掲ぐ。乃ち庵内十牛の襖に對

照せしむるなり。而して大圓庵の側に石を以て疊める窪地あり。竹林これを繞る。その石廊の中央に公の廟あり。石の圓塔をくりぬき、その中に石製の位牌を安置す。

公の歿後、即ち文政元年六月十三日、小倉源左衛門外敷名をして公の遺命を奉じ、雪舟圓相の畫像及び遺偈を庵に納むると共に、祠堂金三百兩を納めて佛事を修めしむ。大鼎和尚之を司る。同三年九月大圓庵永代修葺料として金一千兩を寄附し、以後の修葺は一切孤蓬庵に托す。同五年正月執政柳多四郎兵衛、江戸より歸國の際、名物本多井戸茶碗、一名喜左衛門井戸を大圓庵附什物として寄附す。これと同時に彭樂院及び月潭夫人酒井氏より、銀三十枚を添へて寄附す。また齊恒は手書を以て、この茶碗を門外不出となし、且つ何人たりとも松平家の許を得ざれば、之を觀るを禁じたり。その箱書に曰く、

内箱書附

本多能登守忠義御所持

舟越伊豫守添狀

いとちやわん

中箱裏面

本多能登守御所持

高麗井戸茶碗（慶長の頃喜左衛門と云ふ者指上る故に喜左衛門井戸と云ふ）舟越伊豫守殿弄玩書有、後和州

郡山引渡之節、泉南中村宗雪求之所持、今寛延四辛未年、塘氏爲家藏。

荒木一齋(印)

この喜左衛門井戸は、實に本邦大名物井戸茶碗中の大王にして、公の愛玩斜ならず、しかるにこの茶碗を所持すれば腫物を患ふといふ迷信ありて、公が腫物を病みし時、之を手離すべく夫人の勸告ありしに拘らず、終生之を手離さざりき。公歿後、嗣子月潭侯また腫物を病みしかば、遂に之を孤蓬庵に寄附せられしこと、既に述べたるが如し。今國寶に編入せられ、孤蓬庵隨一の寶器たり。

文政五年六月二十日月潭、公の位牌を納むるに添へて白銀二十枚を寄附す。文政十三年七月十一日彰樂院の畫像に充つる伊川榮信筆月之畫一軸を納むると共に、供養料として白銀三十枚を寄附す。なほ其他に松平家の寄附に係れるは、魚屋小服茶碗(箱書付不味)桐木地提茶箱(遠州好、表不味自歌養、裏遠州の歌三首、公の書)紫色金襴の戸帳、古ハンス茶碗(宮春慶塗)了入赤茶碗(共箱)公の好み大菊蔴繪(羊遊齋作公宮書付)公自作の象牙茶杓(共簡)巻物(御額下地々張付有之)古切一卷、盆石黒塗盆、唐銅風爐、御好桐木地料紙硯箱(總白粉、利休桐置上ガ内箔置キ)及び次に掲ぐる茶會記中の○印の附しある茶器等なり。また公の筆に成る「式瓢」「大圓庵」「看路」「空閑」「壺隱」など横一行の額面あり。「式瓢」の額は床の正面に掲げ、「大圓庵」は佛殿正面に掲げ、「看路」は孤蓬庵書院より大圓庵に通ずる廊下に掲ぐ。是より先き文化十四年正月二十五日、公大圓庵茶室に於て席披きの茶會を行ふ。其時に於ける茶會記次の如し。

二十五日大圓庵披き

午時半 菓子茶湯 一疊半

(客) 賽海和尚 大鼎和尚 宗了

二十七日大圓庵御茶正午時

相伴 宗靜 了我

掛物一圓相 雪舟筆 ○蓋圓相紋 藤兵衛作(表に圓相の紋あり裏に大圓庵什とあり)

○香合 紅花綠葉存屋 ○△炭取 ふくべ ○△炮烙 樂

三ツ羽 大鳥 水次 片口木地 ○花入 青竹尺八

○△水指 木地釣瓶 ○棗一双 葵紋(遠州公用ひし者) ○天目 瀬戸(遠州公所持)

○天目臺 根來朱 ○茶杓 (象牙無學和尚竹形) ○こぼし 曲

○ふた置 青竹 ○△薄茶碗 樂

廣座敷

○掛物伊川筆二幅對 右幅松に鹿、左幅竹に蜂窠及猿猴(別書に不味好蟬鹿蜂窠とあり)

○硯箱 (利休形一閑張四方硯箱) 別書に不味好白木桐浮上げとあり

○△文庫 (不味好白木桐浮上げ)

書院床

○△盆石 かつら盆添

釜 孤蓬庵より手合 白木長板

水指 出雲燗權兵衛(箱書不昧の樂山水指の四字あり)

薄茶溜 不昧好、竹、中文 茶碗 樂出雲燗新

待合

硯箱 (不昧好一閑張金桐浮上) 卷紙

菓子

○木地足打

耳皿 楊枝 三本

右之外入用之品は先方にて借用可仕

薄茶菓子 木地之衝立 くわし 良安にて手合(別書に平土器、不昧好松葉とあり)

○印は其儘留置の品 △は八左衛門方にて出來有之候品、點なきものは此方にて手合、殘置品にて

無之事

茶、初昔 三入方にて挽候事

插花

こぶし

れんぎやう

紅梅 此内にて

薄茶 中の白

煙草盆 木地釣瓶

火入

以上は公が主人となりて、寶海大鼎兩和尚及び本屋了我を客としたる茶席なるが、當時その席に陪せる根土宗靜手控の大圓庵茶會記には、寶海和尚主人となりて公と宗靜と了我とを客としたる茶席を次の如く述ぶ。

文化十四年正月二十七日於大圓庵

主 寶海

客 不昧侯 宗靜 了我

掛物 大燈國師墨跡 一風雲印金中白茶地紗上下茶北組 花入 青竹一重伐不昧侯作 花 ゑんどう豆花所留

釜 寶海好 庄兵衛作 水指 吳洲菱馬 遠州寄附の書附あり 炭斗 唐物菜籠 龍光院什物 宗及所持

茶入 藤四郎茄子遠州書付 茶杓 石州作 拜上孤蓬庵大和尚禪室 宗關とあり 炮烙 半田燒

建水 古銅 箱遠州 蓋置 古銅 箱遠州

廣間

懸物 御寄附 二幅對 花入 遠州二重伐 花梅棒

附書院

硯 遠州好 御本江月詩あり

卷物 遠州筆 定家卿寫

古銅水入筆架

第三篇 茶 道

茶 不味公

二〇六

唐物棚

瀬戸平水指 箱書遠州
茶杓 象牙筒 江月和尚

茶器 竹瓢 藤重作 箱遠州 茶盃 いつも罇 齋麥寫
萬曆獅子摘み大ふた物 箱書遠州 菓子 紅白きんとん 床へ飾る

料 理

染付皿 向 巻ゆば三岩茸 さや豆
引物 大徳寺鉄 粉山椒 氷しほ 吸物 アンズ しぼり生姜 取肴 酢漬うど、すい田くわゐ火とりうど芽
香物 奈良漬瓜

汁 わらびからし 椀 揚しよゆう とうふ 椎茸紅切

唐物盆

惣菓子 遠州好 干くわし

孤蓬庵寶海和尚は諱を宗峻といひ、一瓢子また隨緣道人といふ。京都の人、その俗姓を詳にせず。大徳寺四百十五世、孤蓬庵第六世たり。曾て筑前の國主の請に應じて同國崇福寺に住し、享和二年六月肅岷宗敬の後を嗣ぎて開堂し、同三年東海輪番を勤む。文化三年崇福寺を辭して孤蓬庵に還る。公牌堂茶堂を建立して、禪徳庵を改めて大圓庵となすに及び、師之に與る。同十四年八月二十六日(或云ふ十七日)示寂す、壽六十有六。文政六年八月二日勅して圓應妙運禪師と謚す。寶海和尚と公との間柄に於ては、禪學のほか茶事に關して親密なる交際ありき。今孤蓬庵に藏するところの公自作の茶杓銘「殘雪」銘「殘

花」を見るに、その共筒の上に

上 寶海大和尚禪室

宗納

とあり、またその箱蓋に

茶則殘

花

雲州大守治郷公作

とあり。また茶湯釜に公と寶海との合作自筆を彫せるものあり。寶海は「人亦閑」と書し、公は「牛亦空」と書す。釜師庄兵衛の作にして、その蓋のつまみは瓢形にして巧なる蟲喰の刻あり。釜の環孔も瓢形とせるなど、數寄を盡せり。また十牛の香合あり。一箇づつ繪を異にし十牛之圖を描く。黒地金粉粗畫にして裏に在明畫とあり。其他桐製胡粉盛桐花模様硯箱及び同模様桐製の料紙入箱等を藏す。共に公の創意に係る。

大鼎和尚は諱を宗允と云ひ加州の人なり。寶海の歿後、即ち文政七年四月十七日開堂し、同八年東海寺に住す。大徳寺第四百三十九世、孤蓬庵第八世たり。天保三年十一月七日示寂す、壽五十八。嘗て公の肖像を描きたるものに、公の自贊語たる「遺箇圓相。多論圓方。不方不圓。松平治郷」の文字を書す。この肖像何人の手に成りしかを詳にせず。晩年法衣の姿なり。この肖像の上に老叟漢三の贊あり。曰く、

喫茶喫飯六十年

不味一言一不傳

雲州國裏畱難住

倒跨須彌上梵天

第三篇 茶 道

1107

文政戊寅孟冬とあれば、公の肖像はその歿後數月にして成りたるを知る。文久四年正月に至り松江院之を松江の月照寺に納む。公の肖像として世に残れるは唯この一幅あるのみ。この肖像の由来を尋ぬるに、文久三年の冬藩臣高橋九郎左衛門長徳の所持せるを、當時の國侯松江院に獻せるものとす。當時の文書に、

大圓庵様之御肖像、不思議に手に入りければ、手前に奉安置候も恐入候に付、殿様へ献上仕候へば御嬉不斜、直に月照寺へ御納に相成り、仍而此双幅拜領被仰付候事。

但此幅は於津山御痘瘡被遊御煩候節、御貫被遊候由。

慶應元丑年

とあり。長徳の子長超の記せるものなり。九郎左衛門長徳がいかにして之を手に入れしかは知るに由なけれど、京都に出役せる折、或ひは京人の手より之を譲り受けたるものなるべしと傳ふ。

明治の世、大阪の豪商千屋こと平瀬龜之助氏、深く公を慕ひ大圓庵の滌掃等に至るまで自ら之を負擔せり。氏夙に茶事を好み、一方庵、露香、宗十、獨樂庵、春慶、宗超、貞瑛等の號あり。和歌書畫にも巧なり。かねて千家武者小路流の茶道を學びしが、改めて不昧流を學ばんと欲し、出雲なる有澤宗閑氏を聘して之に師事し、臺子の皆傳を受けたり。明治四十一年二月八日歿す。嘗て維新後大圓庵維持困難なるに際して、斡旋頗る力めたりき。谷松屋第八代露吟彌七また共に盡す所あり。乃ち公の廟側に露

香、露吟(明治三十八年歿)の墓碑二基を建つるに至る。

七 茶 友 錄

其人を知らざれば其友を視よと司馬遷はいへり。其人を知らんとせば其人の周圍を見よと西諺にもいへり。公の茶道を知らんとするに當りて、その交遊を知るは極めて必要なりとす。

一得庵酒井雅樂頭、不見庵朽木近江守、一點庵本多豊後守、三關庵松平日向守の如きは皆公の門人にして同時に無二の茶友なりき。一得庵、不見庵のことは既に説けり。公の主義として茶會を記録に残さず、懷石の如きも獻立を書きしるさざりしを以て、如何なる人が公と席を同じうして茶を喫したるかを知るに由なし。蓋し公の意は苟くも茶會に出づる程のものにして、獻立を記憶せざるが如きは共に茶事を談ずるに足らずとなせるを以てなり。然れども幸にして寛政九年より文化十四年即ち逝去の前年まで二十一年間に於ける茶會記の殘存せるあり。これ當時席に列せしもの、心覺えに書き残したるものとす。その中客の名を逸したるもあり、茶會を悉く網羅したるにもあらざるべければ、之に因て直ちに公の茶友を斷定することは早計に失すべきも、他に由るべきものなければ、暫くこの殘存せる茶會記中に

掲げられたる人名をイロハ順に列記し、その頭に茶席に出でたる回数をしるさん。

- 十回 伊勢屋權平 二回 伊勢屋藤兵衛 一回 伊勢屋萬川
- 二回 出雲屋彌三郎 一回 市原八十郎 一回 泉屋六郎右衛門
- 一回 泉屋理右衛門 三回 今宮宗了 一回 伊佐宗琢
- 一回 伊佐榮琢 一回 石東宗達 一回 五十嵐次兵衛
- 一回 一止和尚 一回 花屋吉介 一回 走井利兵衛
- 二十三回 本多駿河守 三回 本多隨翁 一回 本多豐後守
- 二回 本多甲馬 一回 本阿彌六郎右衛門 一回 本阿彌重右衛門
- 三十八回 本屋惣吉 十回 本屋藤吉 十五回 本屋了我
- 四回 道具屋勝兵衛 三回 東陽和尚 十七回 千柄清左衛門
- 一回 茶具屋勘助 十六回 筑前屋作右衛門 二回 筑前屋太郎吉
- 一回 筑前屋新五右衛門 二十一回 大坂屋庄三郎(本姓松井)二十三回 大樺彦左衛門
- 二回 綿村屋喜三右衛門 一回 渡邊雄庵 十一回 川村及夢
- 九回 河内屋宗海(姓野村) 三回 河内屋喜兵衛 一回 龜屋源太郎
- 十回 上總屋勝野右衛門 四回 川邊開雪 一回 鹿島貞吉
- 一回 賽海和尚 一回 河村宗演 一回 河村宗濃

- 四十一回 川村宗順 四十回 芳村觀阿(號物外) 七回 萬屋九兵衛
- 一回 萬屋助三郎 一回 吉澤小助 一回 田邊閑節
- 一回 谷松屋權兵衛(號休芳) 七回 谷松屋貞八(號宗潮) 一回 竹田豐後守
- 二回 樽與左衛門 二回 竹本屋五兵衛 一回 竹屋忠兵衛(號宗郁)
- 一回 竹屋榮三郎 一回 竹屋喜助 一回 竹屋花助
- 一回 大鼎和尚 一回 瀧本坊 一回 佃屋勘左衛門
- 三十二回 根土宗靜 十五回 根土良榮(又了榮に作る) 一回 永井大和守
- 四回 長曾根又玄(又祐元に作る) 一回 中川修理大夫 一回 中村喜兵衛
- 一回 中村徳市 一回 村松宗智 一回 村井勘兵衛
- 二十一回 牛尾宗苔 一回 野村宗阿 一回 岡本宗修
- 三回 久世道空 三回 黒川左膳 四十七回 山口長三郎(宗一)
- 一回 山口準人 六回 山下養我 四回 大和屋宗閑
- 一回 大和屋平八 三回 大和屋源兵衛 一回 大和屋甚兵衛
- 一回 矢倉九右衛門 四回 柳澤轉 二回 松平姫山
- 一回 松平志摩守 一回 松平佐渡守 一回 松平甲斐守
- 一回 松平豊後守 十三回 松平堯山 一回 松本善悦

一回	松平豐前守	三回	松村敬藏(又桂藏に作る)	一回	松村玉藏
三十八回	伏見屋甚右衛門(號宗振)	十三回	伏見屋甚兵衛(號宗貞)	一回	伏見屋利右衛門
一回	伏見屋新五兵衛	一回	伏見屋十右衛門	一回	福島覺兵衛
一回	布施源兵衛	一回	古筆了意	一回	古筆喜右衛門
十一回	幸地仁右衛門(號逸齋)	一回	鴻池榮三郎	二回	後藤縫殿助
一回	榎本筑後	二回	天眞寺	一回	天王寺屋五兵衛
二回	會田豐吉(金吾)	一回	有澤織部	二回	安藤小左衛門
一回	佐々佐々	六回	切屋入左衛門(號無盡藏)	一回	木下長久
一回	吉文字屋久米藏	一回	木津宗詮	二回	三井八郎右衛門
一回	三井元之助	一回	三井三郎助	二回	三星庄三郎
二回	宮本屋庄兵衛	一回	白崎彈之	一回	島屋市兵衛
二回	柴田傳右衛門	十三回	疋田一二	二回	樋口官務
九回	平井宗逸	一回	千宗守	七回	仙波太郎兵衛
二回	仙波勘兵衛	一回	誠拙和尚	二回	杉村元破
三回	墨屋助三郎	一回	墨屋善九郎	一回	瑞聖寺

右の表中、同人にして異名なるものもあるべけれど、今その實際を知ること能はず。この中道具商類

る多し。竹屋といひ、伏見屋といひ、谷松屋といひ、本屋といひ、河内屋といひ、墨屋といひ、上總屋といひ、いづれも有名なる道具商なり。谷松屋貞八は京都、谷松屋權兵衛及び道具屋勝兵衛は大阪の骨董商、切屋八左衛門、竹屋喜助、竹屋忠兵衛、樽與左衛門の如きは、いづれも京都の骨董商にして、伏見屋甚右衛門及びその子伏見屋甚兵衛は江戸の骨董商なり。これらの人々が、競うて天下の名器を發見して公に納めたること、「大崎様御道具代御手控寫」と稱する書類に據りても知り得べし。

谷松屋權兵衛は、戸田休芳のことにして、一支庵と稱す。文化五年春公その宅に臨み、庵號の揮毫横一行の額を授く。文化十年歿す。家に公より受くる所の竹尺八花入、一閑張囊等をはじめ、公の書簡類を藏す。現主人を第九代戸田彌七氏とす。露吟はその前代なり。

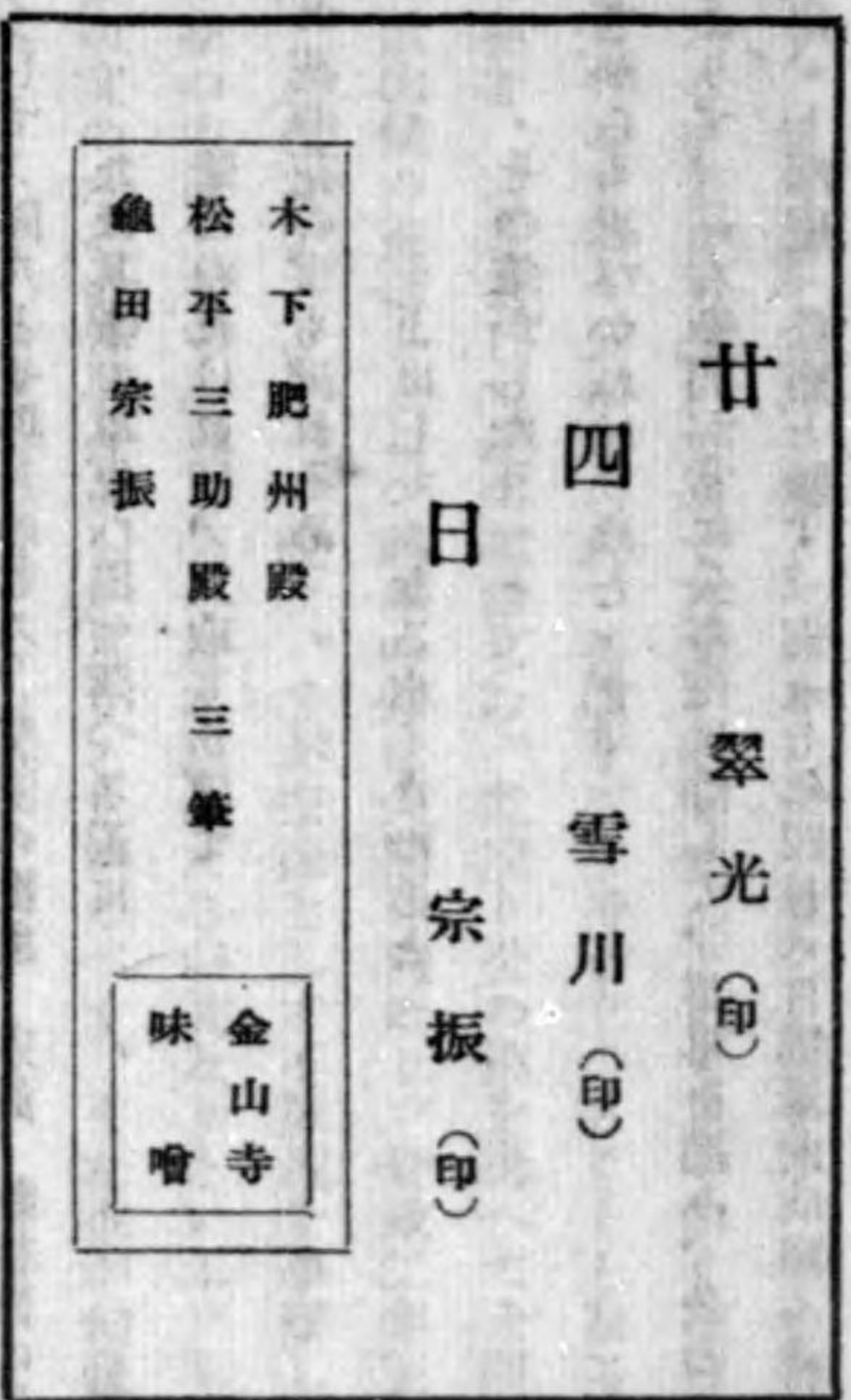
谷松屋貞八は宗潮と號す、その父文右衛門、大阪の谷松屋より分家して京都に移れり。茶事に達し、茶器の目利を以て公の優遇を受け、屢々江戸藩邸及び大崎若園、または出雲松江に赴けり。嘉永六年歿す。養子貞八これを繼ぎ、宗潮と號す。鑑識に長じたる豪放なる男なり。荻野獨園の近世禪林僧寶傳に曰く、

谷松宗潮、西京一奇士也。其在江門、嘗謁雲州不昧侯、侯曰、寡人今日約誠拙和尚、來修茶禮、卿亦陪筵可也。宗潮曰、臣將遊吉原妓樓、不能陪筵也、遂去。師後在玉龍、疾篤、宗潮携羊糝一包、來問疾。師舉首瞋目、謂宗潮曰、汝往在雲州侯所、曾不能與我遊、余以汝爲高雅膽大、今何

面目復來問余疾。宗潮遂逡曰、和尚真可畏也。

竹屋宗郁は「墨蹟祖師傳」の著者にして、鑑識を以て聞ゆ。本姓を藤野といひ俗名を忠兵衛といふ。子二人あり、忠兵衛及び榮三郎といふ。五兵衛、喜助、花助はその分家なり。公常に伏見屋甚右衛門に向ひて、宗郁歿せば天下に目利といふものなくなれば、早く目利になれ〜と手の内に丸め云々と奨勵したることあり。大阪の戸田家及び平瀬家には公が宗郁に與へられたる多くの書状を藏す。

伏見屋甚右衛門は本姓龜田、號を宗振といふ。宗眞甚兵衛の父たり。茶會記中三十八回も公の茶席に列したるを見れば、公の信任厚かりしを知るべし。公の奨勵指導に由りて鑑定の道に進み、遂に著名なる鑑定家となれり。公の著述として世に残れる陶器濫觴三卷は全く彼がために述作せられたるものなり。其子甚兵衛の書けるものに頗る趣味深き一話あり、父宗振が嘗て公の茶席に招かれし時、公の揮毫を請へるに對して、公はまづ當日同席すべき客に筆を執らしむ。宗振更に公の自筆を請へるに、公は三筆云々の文字を書捨にす。然るに公は遂に二十四日を以て逝去したるを以て、この書捨を珍重すること暫ならず。宗眞次の如く箱書にその來由を敘し永く家寶となせり。これを見るに「廿」の字は翠光木下肥州の筆、「四」の字は弟松平雪川、而して「日」の字は龜田宗振の書けるものとす。而して公の筆は次の圖に示すが如く、短冊形の中に三人の名を認め、その下に三筆と書し、更に金山寺味噌といふ好諧謔を書したるものとす。



箱 書

今は昔、寶曆の比より文化のころまで守り給ひし、出雲の國つかさを、羽林治郷の君とぞ申也。此君常に茶湯を好みたまひ、世に名高き種々の品を集め給ひしことは、寶徳の頃相國、寛永の小遠侯も及ぶべきまじきとぞ、其頃の人知る處なり。我家父宗振は、此君御覺えめでたくして、晝となく、夜となく、御側に仕奉りたり。或日君の仰に、近き内に口切の茶催す也、話に來るべしとのたまふ。そは有りがたき事也、賓客はいづれの御方や、近頃物の覺えあしくなり候まゝ、何卒御筆を染め奉りた

しと言へば、いと安き事なりとて、その人々の筆にて、廿四日の三字と名をさへ添へてたまひければこはめづらかなる品かな、かゝるものは古筆何某の極め書がほしきもの也と申せば、いと笑はせたまひ、猶そのはしに、書添へてたまひしを、おのれは父より傳へて侍りしが、星移り霜重り、文政元年卯月二十四日、此君かくれさせ給ひぬ。聖人その終る所を知るといふも、うべなるかな、この色紙の文字御忌日になんなりければ、いと尊みて、日夜に表具せばやと思へど、力足らずして、同姓の章成に與へて、其の志をつけよといへば、悦びて箱をさへ作りて、我にその往事を記しおきてよといふを、いなみ難くして、同八とせ卯月のころ、巽浦の慶翁、宗眞、新樹園の燈下に是をしるす。

なほ其頃の事思ひ出て落つる涙に

筆のぬれければ、又取りあげて

卯の花の花の雫も流れそめ

よにしたふなる水くきのあと

その筆かしたまへとて

萩 勝

そちからも忍びかねけりほとゝぎす

この文によりて、甚右衛門が常に公の側に侍して、茶事を勵み、公の知遇を得たることを知るべし。木津宗詮は、卜深庵、松齋と號す。安永七年四月八日攝津西成郡木津村願泉寺に生る。もと大阪天王

寺の俗人たり。父歿して寺務を繼ぐべかりしが、彼之を欲せず、弟の加賀に在るを呼びかへし、その未だ寺に着せざるに先立ち江戸に出て古樂を研究せんとして意の如くならず、越前不遇の後八百善の料理番にまで零落せるを偶々公に知られ、茶道を以て身を立つることとなる。公、一吸齋千宗守江戸に在りしを大崎に招き、宗詮をして就て學ばしむ。業成り公の幅を携へて大阪に歸り、千艸屋に寄食す。天保二年七月和歌山侯の茶道となる。禪學の師は大綱和尚なり。安政二年正月一日歿す、年八十一。二代は得淺翁宗詮、三代は宗一とす。一説に、公が宗詮をして不昧流を學ばしめずして他流千宗守に學ばしめしは、三千家の中にて宗守流最も公の意に適ひたるが故なりといふ。もとより然るべけれども、なほ公が各流比較研究のために資せんとしたることもあるべく、また彼が旬歳の人たるより、將來郷里に歸りて身を立つることを遠く慮れる懇情にも由るべし。

其他茶會記中にあらはれたる人に、鑑定家として古筆了意あり、茶人として伊佐幸琢、同榮琢、根土宗靜、同良榮、牛尾宗苔、千宗守あり。根土は支藩廣瀬の茶道たり。禪僧として天真寺の東陽及び一止、孤篷庵の寶海及び大鼎、鎌倉の誠拙和尚等あり。武術家として越後流の師範たる本多隨翁、弓術の達人たる久世道空あり。其交遊の多方面なるを見れば、何人も公が談笑の間に衆智を集めたるを知るべく、公の雅量を追懐し、公の造詣の由來するところを想到し得べし。茶會記に載する所の人々の中に、最も多く公の茶席に招かれたるものは、芳村觀阿にして、實に四十回の多きに達す。

芳村觀阿は江戸の人、俗稱を太郎兵衛といふ。夙に文藝に長じ、物外、指月齋の號あり。頗る茶事に通達す。茶名を聽笙といふ。蓋し袁宗道が爐火に添うて瓶笙を聴くの記事に取れるなり。彼多く名書畫珍器を藏するを以て都下にあらはる。夙に俗塵を厭ひ、懷妊の婦を棄て、環膝の孩を遺し、出家して廬を淺草に結び、その莽に命じて白醉といふ。蓋し暄の暖を以て酒の醉に代ふるの意なり。因てまた樂此軒と稱す。時に年三十四。その僧となりたる日、藏する處の珍寶を悉く知友に頒つ。唯東大寺大勸進俊乘坊重源法華經會勸進狀のみは留めて護惜甚しく、常に身邊を離さざりきといふ。俊乘坊名は重源、南都東大寺の中興なり。高倉帝の治承四年本寺兵火に罹りて焦土となり、聖武帝の時鑄る處の五丈五尺の大佛銅像また燬銷す。後白河法皇深く軫念あらせられ、彼をして再興の大勸進たらしめ、四方に淨財を募集せしめ給ふ。觀阿その秘藏を東大寺に寄付せんとするの意あり。偶々大勸進公般上人これを聞き、千金を以て購はんと請ふ。物外以爲らく、吾れ死後、この寶物流落展轉するを保し難し、之を寺に獻するに如かずと。乃ち上人に謁して曰く、我れ今年五十有三、既に半生を過ぐ、且つ吾が祖大和より出で六世の時江戸に移る。故に吾れ骨を祖先の國に埋めんことを欲す。上人もし本山方丈の地を以て吾に與へらるれば、吾また悦んで勸進帳を割愛せんと。上人大に悦び、彼が爲に寺内に地を給して、壽像の碑を建つるを允す。因に云ふ、この重源大和尚の勸進牒は幕末または明治の初頃、東大寺より出でて奈良の素封家中村雅眞翁の手に入り。余は往年翁の宅にて之を拜覽せり。其後國寶に編入せられたれば、翁の志を以て東大寺に寄贈せられたりといふ。

白醉茶觀阿道人墓表

道人名觀阿、號物外、別號指月齋、俗姓芳村氏、江戸人也。初名明昭、俗稱太郎兵衛、天資伶俐、頗有文藝、又精陸鴻漸茶道、因稱聽笙、蓋取諸袁宗道、緩添爐火聽瓶笙之句也。其家多蓄名書古畫珍器奇物、以好事而鳴于都下。然而自少時、既有出離世間、捨妄歸真之念、遂棄懷妊之婦、遺環膝之孩、削髮着緇、出家而不反。乃結團焦于郭北淺草、而居于此、命其莽曰白醉。其意、蓋在于以暄之暖代酒之醉也。因又稱樂此軒云。時年三十四矣。其爲僧日、出家藏珍寶、悉皆贈與友人、而輸之、唯餘俊乘坊所親書之化緣簿一冊、而不離身、護惜尤甚。俊乘坊名重源、南都東大寺中興、弘德之師也。高倉帝治承四年、本寺罹兵災、而爲焦土矣。而聖武帝所鑄五丈五尺毘盧遮那佛銅像亦燬銷矣。帝深憂之、新召俊乘坊、勸再興之事、乃賜大勸進之號、而募貨四方焉。此簿即其化緣之簿引、所謂勸進牒也、實希世之珍、而價當連城焉。今大勸進公般上人聞之、請以千金購求之、道人於是竊以爲、吾死之後、此牒流落展轉、入沒字碑人之手、則受覆器之辱、不可知也、或遭臺六曉廻之厄、而爲六丁所奪去、亦不可測也。不如還于鄰娘、而永與靈光俱存于本寺也。乃謁上人曰、余今年五十三、已過半生矣、且我上祖出和州、六世之祖徙于江戸、而家焉。於是吾願于和州之地、而歸骨于祖先者久矣。若今以本山方丈地換之、其何贈如之、上人感其志、

與_レ關山僧_一謀、乃於_レ俊乘坊遺蹤之傍、割_レ壽藏地_一以賜_レ之。又作_レ換帳一通、以付與。道人_レ大喜、欲_レ立石以表_レ其地、徵_レ之文於余。曰、如_レ銘則俟_レ吾之死_一而自誌_レ之、請先生_レ惟述_レ其事而已、乃爲_レ之記。嗚呼道人亦可_レ謂_レ奇士_一矣。

文化十四年歲在丁丑夏五月

江戸

龜田 興 撰

抱一釋暉眞眞書及題額

東大寺域に碑を建つるは容易のことにあらず、而も龜田鵬齋の撰文、抱一上人の筆に成る碑石を建つるを得しは觀阿の至幸といふべし。往年この碑文の磨滅を思ひ、京都富岡鐵齋氏石摺として世に傳ふ。觀阿は嘉永元年六月十九日歿す、年八十。「大崎様御道具代御手控帳」に依るに、彼が公のために提供したるもの、松榮の屏風、古銅鉢、蓬雪の額、象眼床几を始め、裂類の数々、多葉粉入、緒じめ、根付、刀劍の鏝、柄木、其他文房類の珍品奇什殆ど枚擧に遑あらず。觀阿嘗て公が唐渡りの裂を珍蔵するを知り、公を驚かさんとて或る時茶事に招かれたる時、それと同じ裂を帯にして來れり。公おもへらく、かくの如き貴重の裂を帯にせるは觀阿の豪膽眞に驚くべきものありと。何ぞ知らん、彼は僅に見ゆる所だけ裂を帯に被らせたらんとは。後日公之を知りて呵々大笑せられたりとぞ。彼が奇行と彼が嗜好とは公の愛する所にして、また以て公の性格の反映と看るべし。

公の御用道具商たりし伏見屋甚右衛門に就きても、また一笑話を傳ふ。公退隱後、湯治のため歸國し東上の途、京都油小路三井八郎右衛門に過りて茶事を行ふことあり。出立に先立ち公は甚右衛門に三井家秘藏の北野肩衝の一覽を許されたることを告げしに、甚右衛門また之を懇望して已まざるを以て、公は共に率ゐて上洛せり。然るに三井家にては、公と根土宗靜とは許したれど、甚右衛門は道具屋なれば、とて拒絶したるより、公は深くこれを遺憾とし、甚右衛門と謀りて、當日時刻を計り、後より公を三井家に訪はしめたり。さて公は宗靜を伴ひて三井家に赴きしに、亭主恭しく北野肩衝を盆に載せて出す。公熱覽して宗靜に渡し、再び之を熱覽しつゝ、甚右衛門の來訪を待ちしが、あまりに時刻移りしを以て、やむなく返したるに、亭主は乃ち之を倉庫に納めて後、甚右衛門來訪の旨を公に告ぐ。蓋し甚右衛門既に來つて邸にありしかど、別室に導きて饗應し、遂にこの名器を見るの機會を與へざりしなり。抑もこの名器は三好宗三之を所持し、後堺の津田宗達より京の烏丸光廣に傳はり烏丸肩衝といひ、北野大茶會の時、利休が口を極めて讚美せしため、豊公行過ぎ、また立かへり見しとて、北野肩衝の名を得たり。後三木權太夫一萬兩にて譲り受け、遂に三井八郎右衛門の手に歸し、後若州侯酒井伯爵家に傳へられしが、大正十三年六月入札に附せられ、十五萬九千二百圓にてまた三井家に納る。抑もこの茶入は公の後には天保二年、姫路の家臣河合寸翁集之助、之を一覽せしことあり。天明年中より近頃まで、之を見しは、公と根土宗靜とこの集之助との三人に過ぎずといへり。

時代は知らざれど品川東海寺に於て、公の發起にて爲樂、翠竹、清々の三茶友と謀り、茶箱會を開催したることありき。當時公の認むる所の書翰、頗る趣味に富むを以て、その全文を次に掲ぐ。

一、於東海禪寺、十月一日より十日までの内天氣次第茶箱會相催候。御出のかたぐは、御手柄次第とくより御越、御茶席可被相定事。

一、座席の儀は、林間にて候條、縁取二枚にかぎり候事。

但し敷皮、或は佗にて圓座等、主の意に任す。

一、釜、くさり、自在、五徳、打かけ竹。

一、水桶一、くわし入。

一、辨當、このほか無用の諸具、禁之。

但し茶箱の儀は、各の數寄に任ずる事。

一、貴公たりといへども、從來幕外に可被殘御太刀は御もたせ、御差添ばかりの事。

一、御申談の連外、其意を得し輩は、數輩に及ぶことを許す。

一、詩歌連伴の風流、面々の嗜により、猶興を添ふべし。

一、當日御揃の時刻、巳刻に不可過事。

右の外、猶御尋ねも候はゞ、未央、爲樂、翠竹、清々、四庵主の内へ、可被仰聞、不圖御出席の面々

は、前日に是又四庵主内へ可被仰下候事。

八月 日

未央 庵

東海寺は、不味流の源たる怡溪和尚の住せる寺にして、その關係淺からざる所なり。年譜に據るに、文化五年五月二日公は東海寺高源院に於て、怡溪百年忌を舉行せられたれば、右の茶箱會も或ひはこの年のことなるべし。

八 御 好 み

公の好みと稱するものに就きても、その精細は知るに由なし。唯佐藤榮中といふもの公を崇拜するの餘り、これを研究す。その中數物の箇數を調ぶるに當りては、同好の士相集りて各自知れる限りを書き残したりといふ。今左に佐藤榮中の選出したるものに就きて、松平家家令安井泉の追加したるものを掲ぐべし。

一、一閑張棗

百箇

此内獨樂の文字あるもの十箇の由。又蓋表に左の詩、朱漆にて公筆。ふた裏に公筆「一々」とある

は、切屋八左衛門へ與へたり。今淺草山谷八百善こと、栗山善四郎の所有たり。詩に曰く、

青山門外白雲飛

綠水溪邊引客歸

袋。しづら漢東一、古金欄、小牡丹、金剛切一、

岡本有心庵の有心庵茶誌に曰く、

不昧公御好一閑張棗は、老公御屋舖御庭に獨樂庵を結構し給ふ時、京都の良工岸田一閑なるものに命じ、棗百を作らしめ、一ツは獨樂庵の二字ありて、月潭公に進ぜられ、その九ツは獨樂庵の二字ありて善茶の人に下され、其餘九十は「一々」の御花押ありて、御直侍の人に給はる、都て老公の御親筆なり。

一、筧棗

七箇

箱裏に萬葉假名にて七草の歌を認む

奴之志良奴筧波野良之不士波賀萬保古呂飛奴登毛誰加起天見武

(主知らぬ筧は告らじ藤袴綻びぬとも誰か來て見む)

金粉銘自筆箱裏「一々」箱自筆

一、大菊棗

三十箇(口繪参照)

黒塗、金粉菊花高時繪

一、雜器棗 又雜木棗と書す

三十箇(口繪参照)

一、桐茶桐 桐紋つなぎ(蓋合目)

三十箇(同上)

右雜器棗、桐茶桐の二品は公歿後出來上り、雜器棗の箱裏に杉樂院の歌自筆

朝な夕なしたへど今はなき君の形見と見るもあぢきな世や

一、桐茶箱 陽陰飄蕩つなぎ(蓋合目)

數知れず

一、糸目面取雪吹棗

三十箇(口繪参照)

蓋裏賀「一々」箱表糸面吹雪「一々」

一、竹吹雪棗(竹中次)

三十箇

一、尻張棗

數知れず

一、松風棗

數知れず

一、木地薄茶入棗

蓋裏金桐紋横銀小菊御紋つなぎ 箱書玉瑛

一、黒菊棗 「やみ菊」又「八重菊」とも云ふ 三十箇

黒塗棗の蓋に黒漆の菊紋を盛上げ、見様に因りて隠現す。昭和十六年大阪藤田家入札、此棗一雙にて三千九百十圓也

- 一、片輪車の香合 七 筒 或云十五筒 (口繪参照)
- 公の愛藏平政子所持と傳ふる片輪車の手箱の模様を模して、香合に造れり。
- 一、張甲牛香合 三十筒
- 蓋裏三十ノ内獨樂庵好 箱公筆
- 一、桐の實形香合 一雙入 三十筒か (口繪参照)
- ぬりの分漆壺齋 樂燒の分長次郎寫
- 一、菊桐の香合 長次郎寫 數知れず
- 一、桐香合 數知れず
- 黒塗金粉桐紋付 數知れず
- 一、椿の香合 同 上
- 一、夕顔の香合 同 上 (口繪参照)
- 一、三日月の香合 同 上
- 樂水の文字あり 三十筒か (口繪参照)
- 一、心經の香合

丸形蓋表四角筋青貝 金粉字「心經曰無眼耳鼻舌身意」蓋裏「一々」箱自筆

- 一、心經の香合 三十筒
- 角形、蓋の文「空即是色、色即是空」 數知れず
- 一、心經の香合
- 丸形小型 蓋甲「無」一字金粉
- 一、一閑張白粉解香合
- 一、根太香合 十五筒
- 一、利休形ぬり茶杓 三十筒或云十五筒
- 一、道安形桑茶杓 三十筒
- 一、萬代屋釜 (口繪参照)
- 一、尻張釜 獨樂庵寫 (同 上)
- 一、肩羽落釜 三十筒
- 一、面取釜 三 筒
- 一、少庵殿釜寫 三 筒
- 一、幽月軒銘阿彌陀堂釜 三 筒

- 一、園城寺釜
- 三 箇
- 一、園城寺花入寫
- 三 箇

銘「たそがれ」「入相」「晚鐘」武藏鑑寫掛物付

- 一、水こぼし モウル寫

- 一、黒塗茶巾盥形煙草盆

竹釣付 瓢箪 すかし

- 一、松木升形煙草盆

縁黒柿、左右瓢箪透し

- 一、桐曲げ煙草盆 桑釣付

- 一、桑七角煙草盆 半月透し

- 一、煙管

一本膨み、一本屈理筋、共に火皿大

- 一、瓦獅子の香爐

公の好める菓子種々ありき。松江にては三津屋作兵衛にて、同家の傳ふる所によれば、春は「茶種の里」、夏は「御好松葉」、秋は「山川」、冬は「鹿の子」、「羊羹」等なりきと云ふ。江戸にては本所二つ目

越後屋にて、公の指圖により「水羊羹」「栗みどり」等を製したりと云ふ。今公の茶會記に載せたる菓子

柏餅

珠光餅

栗餅 つけ焼

栗粉餅

栗牡丹餅

朝日餅

村雨餅

冷葛餅

ちぎり萩餅

みぞれ餅

山陰

山川

薄氷

薄霞

殘雪

高砂

若草

谷渡

朝汐

谷ノ花

玉椿

玉水 かすてら製

初雪

河茸

茶種の里

おぼろ饅頭

白餠饅頭

黄餠饅頭 小角

白餠饅頭

鹽瀬饅頭

羊羹

白羊羹

水羊羹

小倉野

松かね煎餅

唐松煎餅

いろは煎餅

黄葛巻煎餅

石竹

紅石竹

絞り石竹

石竹糖

石花糖 氷花

白松葉

大松葉

青松葉

青白松葉

蕎麥燒

小麥燒

栗みどり

薄霞

洲濱

菊形落雁

紅やうせい

紅筋金米糖

紅白ゆば

紅白小町

結有平

山吹重

松重

氷おろし

黄白玉水かん

染付八角

紅砂糖

紅こしあん

紅吹寄かるめら

右の中、製法の傳はれるもの極めて少し。現今世上に流布するものは、山川、若草、茶種の里、等なり。若草は全國名菓の選に入る。なほその歌銘の傳はれるものは、次の三種なり。

山川

散るは浮き散らぬは沈むもみち葉の影は高尾の山川の水

若草

曇るぞよ雨降らぬうちに摘んでおけ梅尾山の春の若草

〔註〕 賈茶翁高遊外著梅山種茶譜略といふ書に明恵上人の歌として「曇るなり雨ふらぬまに摘みておけ梅尾山の春の若草」とあれば、公は此歌を俗語に改めたるなるべし。

玉水

耳に見て目に聞くならば疑はじおのづからなる軒の玉水

〔註〕 この歌は大燈國師の歌なりといふ。

茶は京都の上林三入、高真院の時より納めたりしが、公の時に至りては殊に意を用ひて精製し、その成るや叡山の氷室に入れて冷蔵したる後、公に獻じたりといふ。寛政八年二月、公に請ひて「中之白」といふ茶銘を受けし時の公の眞筆、及びその由緒は、頗る興味あるものなり。

茶銘

中之白

新に製茶求名、昔と一との中とあるに依り、即中ノ白と云べし。

茶禪不昧公

二三二

寛政八辰春二月

一々齋

上林三入殿

こは京都の茶商上林家に傳る幅物にて、横物六寸八分、表具は星野宗以定卿、石州流の寸法を以て好みの表具師庄助仕立てたるものなり。而してその幅物の函蓋裏書は、次の如し。

雲州太守治郷侯、先達而少將御轉任爲恐悅、當正月は國元へ參上の節、極上の御茶差上、御茶銘奉、希候處、一ノ白は高眞院御銘、二ノ白、三ノ白は寶山殿御銘、今又無銘の御茶差上、御銘相願候段、思召に叶、御滿悅、早速御試被遊候上、御銘御筆の物被成下、御定式御用に、以來詰加へ候様被仰候、御判の文字は、御齋號一々と被遊候末代可致祕藏と、御茶道頭武藤祐兵衛を以て、被下置候。

御茶銘 未央堂一々齋 宗納

寛政八年辰三月

上林 忠榮

花筒に關しては、岡本有心庵にあてたる公の書狀あり、次の如し。

花筒之傳

利休易に本づきて、かねを定。

一、竹の廻りを取、一圓相也。夫を二ツに折、天地となる。又二ツに折、四象也。又二ツに折て、八卦生ず。ハツの相の一ツにハツに折て、八々六十四相也。

此末のかねをわかねに用ゆる、口傳に可問。猶口傳多し、かね合に傳有り。

十一月廿八日

未央庵一々齋

(爪形印)

有心庵主

好みの茶室にして現存するものは、出雲八束郡菅田村の

菅田庵と明々庵なり。菅田庵は公の指圖により、有澤式善のために作れる茶室なり。公の放鷹の際屢屢臨み、入浴または喫茶したる所にして全國の茶室中風呂場附のものとして頗る有名なり。一疊臺目、中板にて、洞床と稱する極めて佗びたる茶席とす。茅葺の破風には公の筆蹟菅田庵の三字を陶器に焼付たる扁額を掲ぐ。水屋を隔て、向月亭あり、四疊半に大目の付きたる一室にして、こは公の弟雪川の命名に係る。庭園宏大にして老松枝を翳し、飛石燈籠のたすまひ、露地の風情、眞に幽邃閑雅を極む。加ふるに出雲富士遠く東に聳え、津田の松原近く南に横たはり、大橋川の白帆徐に田疇の間を行く。誠に山陰の一仙臺たり。

明々庵はもと有澤式善のために、公の好みに由りて作られ、松江城市殿町なる有澤國老の邸内にありき。維新後茶事廢れてこの茶室も痛く荒廢せしが、松原新之助氏深く之を惜しみ、遂に購ひて東都郊外原宿の住宅内に移せり。大正四年十一月公從三位に追陞せられたるを以て、氏感する所あり、これを松平

家に獻す。抑も明々庵はその待合に飾雪隠の付きたるなど、他に多く見ざる處とす。こゝに公の筆に成れる宗易南坊連名の茶會大法七ヶ條の懸板を掲ぐ。「明々菴」三字の自筆は安永八年の銘あり。宗意好、庄兵衛作の釜にも、相圖の雲板にも、水屋の礎にも、皆自筆「明々庵」の三字を刻す。近年この明々庵は松平家より雲州松江市數寄者の懇望に由りて、前記有澤氏の山莊に寄與せられたり。(後章參照)

出雲簸川郡出東村の富豪勝部氏に存する茶室は、公が松江の豪商瀧川氏の邸に臨みし日、公の指令に因りて營みたるものなりと傳ふ。普通のものとの其の設計を異にし、水屋につゞける板敷甚だ廣く殆ど茶室の半を占む。庵名を不審庵といふ。柱は黒松皮付及び杉なり。天井は床の方につけて編み竹、他は屋根裏とす。楕圓の小額に公の自筆「普」の一字を刻す。自筆「庭前栢樹子」の五字縦一行幅及び文臺硯箱を藏す。蓋に「常磐なる松のみどりも春くれば、今一しほの色まさりける」てふ古歌を認む。蓋し公屢屢この地に放鷹せし時同家に臨みたるを以て、主人新に硯箱を作りて、公の染筆を請へるなり。八束郡尖道町の豪商木幡氏は舊家にして、天隆院會てこれに臨みしこと、年譜に見ゆ。こゝに存する茶室は、もと千利休の作れるものにして、八ツ窓の茶室と稱す。公いたくこれを悦びて一旦松江城下に移したるが、其後國老大橋氏に授け、維新の際大橋氏より木幡氏に譲られたるものとす。

松江市殿町普門院内にある觀月庵もまた公の屢々赴きし所にして、公の平素愛敬せし荒井一掌の設計に係り、門人普門院主惠海の建設せる三齋流の茶室とす。公は常に其の二疊の席に一間の庇を附けたる

ところ、または露地に入るあたりの風光を賞揚措かざりきといふ。普門院は累代藩主の祈願所として尊崇を受けたる所なり。公の在世中、院主惠海夙に江戸大崎の茶室を觀んと思ひしが、或る年俄に意を決して東上し、草鞋のまゝ大崎に赴き、頻に相圖を鳴らして入園を求む。公之を歡び迎へて、庭園を巡視せしめて後、手づから茶を點じ、なほ逗留すべきを勸めしに、惠海は年頃の念願果し侍りつれば、今更思ひ置くこと候はず、直ちに歸國の途に上り候はんといふ。公は因て沿道各所の本陣に立寄りしめ、路資を要せずして歸國するを得べき旅券を與へたりとぞ。惠海嘗て城山にて野立の茶を公に獻じ、神明は人に異なり御辛抱強きものに候とて、稻荷社修繕の事を諷せしが、公は國政仕法中の社寺修繕も停止中なるを以て、自ら資を投じて稻荷社を修理せり。惠海の至誠奇智、公の聰明敬虔、誠に君臣變美の佳話とす。

世に不昧流の茶室は、いかなるものなるかを問ふ人あり。然れども吾等の知れる範圍に於ては、公の本旨が諸流皆我が流なりといふ根底の上に立つが故に、茶室の如きも別に不昧好みの茶室といふべきものなく、すべて何流を問はず、茶道の本旨に適ひ、清楚質朴にして、佗びの體十分に備り、露地の風情その地勢に適應して雅趣を具ふるものは、すべて公の好みたる所なり。新に營む所の茶室の如きも無用のものを有用に使い、廢物を利用せるが如きもの、最も公の意に適ひたる如し。例へば松江の富商佐藤氏が、嘗て小林如泥に命じて、節多き柱を用ひて茶室(初め瀧川家にありしを佐藤家に譲りたりとぞ)を

作りたるを、公いたく賞揚したるが如し。もしそれ強ひて公の好みの茶室を具體的に示すものありとせば、大崎名園内の爲樂庵を始め、その他園内にありし茶屋なりとす。然れども如何なる形式が不昧流の園なり數寄屋なりなどいふべきにはあらざるが如し。

九茶會

公の在世中、茶會記及び懷石料理は、別に録して人に示さざりき。今世に残れる根土宗靜の「大圓庵會記」、編者不明の「大崎御會記」、同じく編者不明の「大圓庵様御懷石道具帖」などいふものは、當時茶席に列せしもの、後日の記憶に便せんため手記し置けるものなり。従つて公の國侯たりし時代の茶會記の材料は甚だ少く、退隱後大崎名園に於ける茶會記のみ網羅せられたり。公の懷石記は茶人の最も珍重するものなれば、これを全載せんと欲すれども、頗る紙頁を費す惧れあれば、今は唯その最も趣味ありと覺ゆる五六を摘記するに止む。

◎享和二戌七月二十一日、江府屋敷谷ノ茶屋悉皆出來に付、披の節御客飾付。

客 三助 本多隨翁 久世道空 未白 伊勢屋權平 伏見屋宗振 看雲軒

掛物 二幅對 梁楷筆猪頭觀子 表具印金 (大名物) 下中央卓 青貝

香爐 黃瀬戸向獅子 利休所持 香箱 青黃牛彫入 羽 鶴

棚上 ハシカ彫簞笥 下頓阿筆 後撰集 文鎖 置唐銅

無 心 齋 四疊半

掛物 梅舜學 表具古金欄 (大名物) 下文臺 月弓 宗甫所持 硯箱 東山時代鹿蒔繪 宗甫所持

棚 常信繪鑑 文鎖 南京 眞長板

風爐 奈良形 唐銅五郎三作 釜 小尻張、與次郎(名物並) 杓建 飛青磁

翻 伊部糸目 蓋置 青竹 水指 吳洲菱馬染付

香合 時代龜甲蒔繪長角 炭取 唐物菜籠 火箸 砂張

炮錄 南ばん瓶蓋 茶入 比丘貞 (中興名物) 俗 吉野漢東

茶碗 青井戸二ツ 老松 大坂 茶杓 象牙蟲喰 水次 唐銅藥罐

薄茶器 藤重中次 茶碗 小井戸三ツ 君不知 忘水 小服

洗月亭

掛物 伏見貞建親王筆瀧ノ歌 花入 唐物籠、花、女郎花、桔梗、なでしこ 茶入大海唐物(中興名物)

茶碗二 雲鶴、しがらき 茶杓 空中 露 南蠻

蓋置 唐銅根竹
香合 存星牡丹彫入

土鍋 赤樂
釜手取 下間庄兵衛作爐鐵クサリ
炭取 唐物菜籠 飯びつ形
水差 青磁 水屋煎兼る

惜春

銀藥罐 青竹自在

釜茶飯釜 透木 天貓作
茶杓 小堀十左衛門作

茶碗三ツ 祥瑞染付一 萬曆染付二

水差 繪高麗
茶入 こま
炭斗 梨子地蒔繪
蓋置 根竹

煎茶入 きんま

布志名焼面通

蝸 菴

掛物 色紙 狂歌信海

板風呂

釜阿彌陀堂 蝸毒常住と公筆の文字あり

香合 唐銅玉章

羽 鶴

水次 片口黒塗

炭取 公好形 出雲細工藤組

華入 あめ千巻

花 なでしこ 唐あぢさる

水指 備前 ○本ノマ、猿木

茶入 宗且在判 棗

茶碗二 出雲焼いらぼ寫 樂燒天狗寫

茶杓 半々庵

麵 面通

炮録 出雲焼

蓋置 青竹

利休堂 利休像前に竹三ツ具足

釜丸 庄兵衛作 利休堂常住と文字有

風呂 鏡

香合 樂吉左衛門 大龜

羽 鳥ふくろふ

水次 片口

炭取 組物

花入 竹の筒 宗且 花 黄小菊

水指 釣瓶

茶入 雪吹 宗哲

茶碗二 左入黒 出雲燒權兵衛

茶杓 本多拙翁殿作

麵 面通

蓋置 根竹

土鍋 出雲焼

達磨堂 別に唐銅三ツ具足

以上

看雲軒

吸物膳 黄漆 青漆

朱輪廣椀 鱗切經筒頭青山椒 銚子 銀ちろり

盃 觀世水 黒芳野繪朱葵

盃鉢 吳洲赤繪井

硯蓋色付 里いも青、唐がらし

魚鱗ふりやき 藤古利

洗月亭

黒もじ小楊枝

小皿 蓮打出小皿 たて 金海同 からし

麥麴 花鳥模唐折敷 鏡山祥瑞皿 祥瑞猪口

汁次 祥瑞十俱利

替鉢 南京染付井鉢

菓子鉢 南京大水鉢 青竹筋蓋

白黄玉水かん

鉢 南京馬上蓋 こま懸はみ大根 花かつを

蓋物 ギヤマン 紅砂糖 砂張ヒチリ蓮 鉢 南京大鉢。西瓜、瓜。
 吸物 鐵刀木梨子地くるみ 足膳うるみ蓍形碗 薄かき立 み噌 黃貫豆腐 じゆんさい
 青籠 金糸 洗盤 わさび 海月 醬油 桃蓋盆 釣付徳利 嘉靖小皿 銚子 富士形 菱唐草
 盃 金海 盃盆 孔雀尾蒔繪 梨子地小盆

惜 春

葵提重 朝日餅 水羊肝 小倉野 うるろ餅 菘染 蒲ぼこせん、皮茸せん、牛蒡せん、せん玉子、やき鉄せん
 十俱利 本直し

蝸 菴

菓子 青磁裏鉢 かすていら 早わらび

利休堂

菓子 紅美それ餅 黃葛巻せんべい 南京角鉢

看雲軒

汁 こま／＼しそ 青葱 根いも めうがの子 青柿 向 南京五角皿 白瓜せん たで穂 鯖 鹽たひ

平皿 生姜味噌 こんにやく 叩海老 岩茸 蓮飯 黒塗丸食次 黒塗杓子

引物 糸巻縁高 茄子輪切付あげ 吸物 こま手吸物碗 みる吸 防風 盃臺 黒塗 引盃朱

銚子 伊部焼

小猪口 南京紋り手織縁

看 龍圖から

鉢 奈良漬瓜

青磁并鉢

桃盆湯

香せん 梨子地竹椀様湯次 南京友蓋香せん入

菓子 青漆縁高 愚道志縁高 さく楊成もちしひ茸 惣菓子 時代菊蒔繪鉢青あるへい、紅吹よせ、かるめいら

吸物 青漆焼杉膳 青糸目上下朱碗 鯛中打 むき蓮根 清水米

盃 抽花盃

井 金らん手 あぢ麴漬 鯨肥後漬 木茸せん

盃臺 青磁天龍寺

砂張ヒ

曲盆 青磁木瓜小皿 南京秋野角小皿

井鉢 刷毛め 夕顔わた葛煮 摺けし

以上

◎文化三寅年五月十五日大崎屋舖席披會記

三疊大目 舟越好

客 山口長三郎 牛尾宗吾 山本養我

掛物 布袋 胡直夫畫 愚極賢兩筆(名物並)

風爐 與九郎

釜 油屋(大名物)

炭取 菓子入 菜籠

炮六 ノンコウ

香合 麒麟端ケ彫

花入 松木舟(大名物)

水指 伊部瓢箪筋

茶入 市場手銘忘水(中興名物)

茶碗 古堅手

茶杓 清見ヶ關

瓢 白木曲

蓋置 青竹

水次 白木 片口

三ツ羽

茶 不味公

四疊半

掛物 柘榴 牧溪筆(大名物)

風爐 しり張

茶碗二 君不知(上之部)古三島(名物並)

待合

多葉粉盆 秋田塗 瓢たん邊

外待合

煙艸盆 桑香狹透し

風爐 鐵鉢やつれ

桃盆

こぼし 小丸

香煎壺 南京

懷石

汁 ゆば

飯、椀 潮煮

二四二

下石菖鉢

釜 四方

蓋置 青竹

火入 祥瑞

火入 宜徳

小板 信樂

茶碗 嘉靖染付

炭取 手附菜籠

硯箱 桐詩繪丸 巻紙

水次 赤繪

三ツ羽

向 洗鉢水せん寺のり 岩穿葉わさび 煎酒

引物 浸物茄子まきげ 朝庭山椒醬油

薄茶入 几鳥

水次 唐銅

硯箱 青貝十角 鋪紙

硯箱 桐詩繪丸 巻紙

水次 赤繪

三ツ羽

向 洗鉢水せん寺のり 岩穿葉わさび 煎酒

引物 浸物茄子まきげ 朝庭山椒醬油

吸物 酢さし むき蓮根 大へぎ鯉節 取肴 からすみ ほいろ丸昆布

菓子 水羊羹 しひたけ

懷石道具

膳 一開張半月

煎酒 群瑞猪口

盃 朱、利休塗

吸物 道志蕨形

香煎 をりへ笹耳

香物 木瓜 當座漬

惣菓子 山陰 紅筋有平糖

向 長角青籠

盃 蠶手引椀

酒 鏡象眼蔓 角銚子

香物 唐津 小片口

口取入 朱アコタ縁

向 長角青籠

盃 蠶手引椀

引もの 伊賀クツ香物鉢

湯次 青漆 同湯の子ヒ

惣菓子入 嘉靖盆

以上

同五月十八日 芳村 物外 筑前屋作右衛門 道具屋勝兵衛

同二十二日 川村 及夢 本屋 惣吉 伏見屋甚右衛門

同二十五日 出羽 守 伏見屋宗振 伊勢屋權平

右道具懷石前之通

◎文化四卯年三月五日風爐

客 河内屋宗海 切屋入左衛門 伊勢屋權平

第三篇 茶 道

二四三

獨樂菴

掛物 一休一行 薰風自南來(上之部)

釜 天貓

炭斗 色竹

灰炮錄 南蠻瓶蓋

香合 一文字青貝鶴

羽

花入 道安作

水指 信樂撫角

茶入 宮城野(中興名物)

茶碗 青井戸

茶杓 石州

職 漆の先

水次 菱釣

蓋置 青竹

四疊半

掛物 山茶花 舞臺筆(上之部)

釜 雲龍

茶器 一双入ノ内古満

茶碗 古刷毛目

職 溜塗曲

待合

煙艸盆 黒塗羊遊齋

硯箱 青貝十角

懷石

向 鮎子附 いり酒酢 さき防風

汁 赤みそ 筭薄小口からし

飯、椀 春切鯛 木の子 むき蕪根

引物 鹽燒餅

吸物 じゆんさい せうが汁

取肴 附焼 木の葉かれひ ゆば

香物 紀伊國漬

口取 朝日餅 かんびやう

惣菓子 山陰 紅白ゆば

以上

三月六日 牛尾 宗 若

山下 養 我

同 廿三日 松平 姫 山

本多 駿 河 守

中村 喜 兵 衛

同 廿六日 本多 隨 翁

本多 甲 馬

松本 善 悅

右道具懷石前之通

◎文化八末年正月十九日 (公還曆賀の茶會)

客 本多駿河守 柳澤 轉 河内屋喜兵衛

三疊大目(舟越)

掛物 無準板渡(大名物)

釜 天明穀(名物並)

炭斗 瓢

香合 堆朱塞拾(上之部)

炮錄 長次郎秋(上之部)

花入 碓青磁筭(上之部)

水指 上纏すだれ

茶入 圓乘坊 袋鶏頭(中興名物)

茶碗 割高壺(大名物)

茶杓 紹翁節下り

蓋置 青竹

職 白木曲

四疊半

掛物 柘榴 牧溪筆(大名物)

下黒獅子盆 青貝曜入

釜 雲龍鎖り

茶入 宗七平齋

茶碗 人形手 とゝ屋

待合

宣徳手焙

桑龍光院透し多葉粉盆

時代菊蒔繪硯箱

外待合

煙艸盆 一開張宗且好丸

火入 白高麗

茶盆 一開張六角

懷石

汁 のり めうど

飯

向 平作り 鮎子附

いり酒

引物 大板蒲鉾 しほ山椒

香物 守口漬 かぶら

平皿 鶯色附枝 うど 生椎茸

吸物 へぎあわび みるくひ房

取肴 からすみ 昆布

肴 うに

菓子 薄霞 養菜あらめ

惣菓子 白みとり 曲あるへい青筋

以上

二月十日

山口長三郎

萬屋久兵衛

上總屋 勝野右衛門

同 十四日

出羽守 同 夫人

伏見屋宗振

河内屋宗海

同 十九日

大和屋宗閑

伊勢屋藤兵衛

同 廿二日

芳村物外

松村玉藏

大和屋源兵衛

同 廿七日

久世道空

伊佐榮琢

伊勢屋權平

閏二月二日

仙波太郎兵衛

木屋惣吉

平井宗逸

同 七日

松井庄三郎

伏見屋甚右衛門

鹿島貞吉

同 九日

幸地逸齋

綿村屋喜三右衛門

吉文字屋久米藏

同 十二日

大樞彦左衛門

長曾根又玄

木屋藤吉

同 廿二日

杉村元頌

五十嵐次兵衛

川邊閑雪

同 廿五日

樽與左衛門

三ツ星庄三郎

川邊閑雪

三月五日

永井大和守

竹本屋五兵衛

柴田傳右衛門

同 七日

三井元之助

三井三郎助

走井利兵衛

同 十一日

松平佐渡守

志摩守 松平豐前守

根土宗靜

跡見

布施源兵衛

佐佐

會田金吾

◎文化九申年三月二十八日

客 誠拙和尚 東陽和尚 天眞寺

獨樂庵

第三篇 茶 道

掛物 澤庵江月一行物(中興名物) 釜 天貓寶粧(名物並) 風爐 紅鉢 小板 宗甫所持筋
 炭斗 青貝八角 香合 時代長角花の丸(上之部) 羽、炮録 瀬戸ヒ
 花入 瓢箪かご 水指 紹鴨しがらき 茶入 生野袋木下切(中興名物)
 茶碗 鬼龍川 茶杓 佐久間 さの字 籙 曲
 ふた置 青竹 水次 菱鈞
 四疊半
 掛物 松花堂添文 右兩筆に添有 釜 四方九兵衛 風爐 面取 小板 羊遊齋筋
 薄茶器 宗長 小甕 茶碗 君不知井戸(上之部)
 待合
 煙脚盆 菊浮上ヶ 火入 アコタ 菊壽繪 硯箱 時代蔭繪
 外待合
 多葉粉盆 桑半月透 火入 沉紋染付
 懐石
 向 面通梳 汁 練みそ ちさ 飯
 梳 引物 みしま片口 取肴 櫻の實 鱈筋

香物 伊賀鉢 守口漬

菓子 水ようかん

惣菓子 紅白松葉

以上

同月廿九日より
 向 面通梳 筍 平鹽煮込 きのめ 汁 練みそ 掻立 ちさ 飯
 梳 米つみ入じゆんさい しそ 引物 みしま片口あぢ鹿焼 たで酢 取肴 櫻の實 鱈筋

其外前之通

三月廿九日 芳村物外 切屋八左衛門 根土宗靜
 四月三日 大橋彦左衛門 山口長三郎 本屋宗吉
 同 九日 松平堯山 伏見屋宗振 本屋藤吉
 同 廿三日 本多駿河守 上總屋勝野右衛門 萬屋久兵衛 伊勢屋權平
 五月五日 出羽守 松村玉殿 墨屋助三郎 伏見屋 甚兵衛
 同 九日 松井庄三郎 千柄清左衛門 疋田一二

◎文化九年十月八日 口切 正午

客 大和屋宗閑 千柄清左衛門 墨屋助三郎

三疊大目(舟越)

懸物 利休文 武藏あぶみ 釜 丸 與二郎 炭斗 瓢 火箸古桑柄、奈良鉄、三ツ羽鶴
 炮録 瀬戸 懸松花堂好 水次 木地 片口 花入 園城寺(大名物)花はんの木佗助椿
 水指 不識 茶入 高台寺蓋 袋 大津裂 茶碗 西條柿(中興名物)
 茶杓 紹鷗 簡石州 躰 木地曲 蓋置 青竹

四疊半

懸物 東坡竹(大名物) 釜 荷葉 茶入 大島大海(中興名物)袋 富田金襴

外

煙草盆 春慶 丸大縁 火入 唐銅 香箸蕨頭

内

煙草盆 二間張 瓢透 火入 細すだれ 香箸蓮頭 硯箱 青貝十角

懐石

向 胡麻 袖みそ こまゝ せうが 汁 雜魚 いてふ大根 椀 焼とうふ 蕪いりけし

飯 膳小山折敷 椀黒道志 引物 大阪蒲鉾 氷しほ 奈良漬瓜 吸物 鹽雁 蕨のたう

取肴 鹽引鮭 ほいろ昆布 菓子 白饅頭 水栗 惣菓子 松かね煎餅 菜種の里

十月十日 月 潭 公 根 土 宗 靜 谷 松屋貞八

十月十八日 癸 山 本屋惣吉 伏見屋宗振
 十月二十日 大橋彦左衛門 山口長三郎 芳村觀阿
 十月廿五日 本多 椽 宮本正兵衛 伏見屋甚兵衛
 十月廿八日 大阪屋庄三郎 伏見屋甚右衛門 疋田一二
 十一月二日 仙波太郎兵衛 川村宗順 本屋藤吉

◎文化十四年十月七日口切

客 本多駿河守 千柄清左衛門 芳村物外

懸物 痴絶(上之部) 釜 野溝 五徳圓蓮形 炭斗 ふくべ

炮録 瀬戸 七好形 三ツ羽 大鳥 鉢 さしげ

火箸 石州形古 香合 備前 水指 白木 片口

花入 瓢箪籠 茶入 利休在判蓋 袋木綿廣東 茶碗 加賀光悅(中興名物)

茶杓 宗且二本入(上之部) 躰 細すだれ(上之部) 蓋置 青竹

半田 柳川 長火箸 櫻皮卷

四疊半

掛物 時雨 小色紙(名物並) 釜 三支院 五徳利休長爪 茶入 暖江(中興名物)

待合

多葉粉盆 松花堂好

火入 青磁

手爐 アンコウ

香ばし 砂張

硯箱 時代菊蒔繪(上之部)

外待合

煙草盆 杉丸太縁

火入 宣徳

香箸

硯宮 桐蒔繪丸

袴 脱

懐石

向 柚子みそ 竹輪

汁 いてふ大根 菅唐がらし さきごまめ

飯

坪皿 昆布 いりげし 今出川豆腐

引物 太牛蒡 和ちか赤貝

吸物 雁 ふきのたう

取肴 鹽引鮭 湯葉

香物 紀伊國瓜

菓子 白饅頭 結干瓢 水果

總菓子 松かね 好ノ青松葉 玉水 膳 秋田山折敷

椀 面通道志

飯次 遠州好黒

菓子入 青漆縁高

向 青竹輪

總菓子入 根來朱 三ツ足

引物入 唐津 大片口

吸物椀 道志蔀

盃 利休形中

盃蓋 青磁

湯吹 遠州好黒

湯盆 黒長

香物入 染付アコタ

香煎入 織部篋耳

通ひ盆 黒

銚子 象眼つる

以上

瀧木坊参候節料理

向 袖みそ

汁 いてふ大根 菅唐がらし

飯

坪皿 今出川豆腐 昆布 いりげし

引物 太資牛蒡 頭のいも

吸物 生のりみちんせうが

取肴 湯葉 淨福寺納豆

香物 奈良漬瓜

十月十二日

山口 宗一 根土宗 野村宗 阿

同 十八日

平井宗 逸本屋了 我安藤小左衛門

同 二十三日

瀧本坊 疋田一二 伏見屋甚兵衛

同 二十八日

後藤藤 殿助 榎本筑 後本屋總 吉

公の筆にて残れる「客作法の事」は、客たるものゝ心得を示したるものなり。今その全文を掲げて懐石記の後に附す。

客作法之事

一案内あらば時刻をうつすべからず。

一 座入作法の如くしてさわがしからぬやうに、就中にじり締まり心を付べき事

一 座付不申已前ノ高咄無用之事

一 炭あらば火うつりに心を付中立の時猶更心を可用事

一 鉦聲到らば速に座に可入花の露不乾を專一とす

一 火相のあしきは主の罪にあらす客の罪たるべし

一 客は主の仕能やうに主は客の能やうに可有事

一 何にても主の置合不違やうに腰掛の一具手水柄杓まで心を付べき事

到喫茶去 不到喫茶去 杜鵑一聲山月高

また公の居間に掲げたりといふ懐石の次第書は、公の自筆にて、當時侍醫たりし堀弘伯の寫して家に傳へたるものとす。これまた茶界に遊ぶ人の葉ともなるべければ、茲に掲ぐ。

會席の法

本膳出し 勝手口締ル

椀物出し 是ヨリ口明置

食鉢出し 自身給仕ノ時盆ヲ鉢ノ上ニアゲ中ニ杓子置客前ニテ杓子鉢ニ入レ汁替ル

食鉢明キ候ハ、此時引

酒出ス

引物出ス 二菜ノトキ此引物斗

食鉢出シ 椀物ニテモ前ノ椀物無シ

汁替ル 盃臺下リ候ハ、引

食鉢引 此時飯ノ挨拶シテ引勝手口締ル

吸物出シ 肴カ取肴斗ノ時此時出ス

椀物引勝手口明ケ置

酒替出ス

肴出ス

取肴出シ 此時酒ヲ進メ挨拶ニ任セ酒引

香物出ス

湯出ス 此盆ニテ廻リノ椀等引勝手口締ル

湯引 香物鉢モ引

本膳引

菓子出シ

勝手口締ル

以上

治郷公御筆御居間御掛板也

文化三丙寅年月朔臨寫す

堀 弘 伯

一〇 著 述

苟くも茶道に遊び古器を愛玩するものにして古今名物類聚の大著あるを知らざるはなかるべし。この書は實に好古家、陶磁器工藝家にとりての好資料にして、著者陶齋尙古老人の何人たるかは、久しく閑却せられたりしが、近年漸くその不昧たることを確知するに至れり。其の據るところは佐藤一齋の「言志録」の奥付なる江戸書林須原屋出版書目録の中に、松平不昧公著と明記せること、信濃の人東條耕子著、門人佐藤養君校の「諸藩藏版書目筆記」と題する書中、雲藩明教館の條下に

古今名物類聚 前卷五卷 後卷七卷 續集二卷 拾遺四卷 合十八本 陶齋尙古老人撰

尙古老人は藩主不昧公の別號なり。侯好古の癖ありて、殊に茶禮を精究したまふは、世の知る處なり。今時また南北史の彫刻ありと聞く、盛學といふべし。

とあること、即ちこれなり、書中の筆蹟、品目の名は公の筆らしく寸法附屬の記事は彰樂院の歌師たりしといふ橋千蔭の筆蹟らしく思はる。諸藩藏版書目筆記の刊行年月は知るに由なけれど、書中南北史云々と書けるを以て見れば、公の歿後に成れるを知るべし。因にいふ、南北史は雲藩儒臣四代桃世文、嘉永の頃、之が出版に精勵する處ありて賞賜を受く。同五代桃節山の「養言」に「既に近來南北史と申すもの出來候處、御役所にて役徳無之候間、とかく其役を早く離れ度存じ、心懸薄く御座候故、自然版を摺り候事粗略に相成り云々」とあるものなり。さて、何故公がかゝる名著に對して變名を用ひしかは、知るに由なけれど、恐らくは當時幕府の儉約政策に憚りたるにあらざるか。實にその出版は、白河樂翁の全盛時代にて、質素儉約の勵行せられたる寛政の時に屬す。その凡例に曰く、

一、凡そ名物と稱するは、慈照相公、茶道甌器に好かせたまひ、東山の別業に茶會をまうけ、古今の名畫、妙墨、珍器、寶壺の類を聚めたまひ、なほ當時の數寄者、能阿彌、相阿彌に仰せありて、此處かしこに求めさせられ、各その器の名と價とを定めしめ給ふ。次で信長、秀吉の二公も、亦此道に好かせ給ひ、利休宗及等に仰せて、名を命じ價をも定めしめらる。後世是等の器を稱して、名物といふ。其後、小堀遠州公、古器を愛したまひ、藤四郎以下後藏、國燒等の内にも、古瀬戸、唐物にもまされ

る出来あれども、世に用ひられざるを惜しみたまひ、それが中にも、すぐれたるを選び、それより更に名を銘ぜられたるより、世にもてはやす事とはなれり。今是を中興名物と稱す。それよりして、後古代の名物をば大名物と唱ふるなり。

一、大名物は、多く公の御物となり、又はやんごとなき方の納殿にとめられたれば、容易く世の人の見ることを得べき者にあらず。さるに因りて、暫くおきぬ。然れども、初め其器の諸家にありたる時の傳記、公に奉りたる事跡、竝に圖記等は、求め得るにまかせて次編に出すべし。大名物を後にして中興名物をさきとするは、今世に用ふる處を専らとすればなり。

一、小壺を焼くことは、元祖藤四郎を以て鼻祖とす。藤四郎、本名、加藤四郎左衛門といふ。藤四郎は、上下をばぶきて呼びたるなるべし。後堀河帝貞應二年、永平寺の開山、道元禪師に隨て入唐し、唐土に在ること五年、陶器の法を傳へ得て、安貞元年八月歸朝す。唐土の土と薬とを携へ歸りて、初めて尾州瓶子窯にて焼きたるを、唐物と稱す。倭土和薬にて焼きたるを、古瀬戸といふ。古瀬戸は惣名なり。大形に出来たるを大瀬戸といふなり。此手、小瀬戸に異なり。小瀬戸といふは、小形に出来たるを云ふ。此手、大瀬戸に異なり。入唐以前焼きたるを、口兀・厚手・掘出し手といふ。大名物は古瀬戸、唐物なり。誠に唐土より渡りたるものをば漢といふ。是は重寶せぬものなり。唐物と混すべからず。掘出し手といふは、出来悪しとて、一窯土中に埋めたりしを、後に掘出したりとなり。一説

には、遠州公時代に掘り出したるともいふ。惣て入唐以前の作は出来田夫にて、下作に見ゆるなり。古瀬戸、煎餅手といふあり。之はいづれの窯よりも出づ。窯の内にて、火氣強くあたり、上薬かせ、地土ふくれ、出来たるものなり。後唐の土、少なくなりたるに因りて、和の土を合せて焼きたるを、春慶といふ。春慶は、藤四郎が法名なり。二代目の藤四郎作を、眞中古物といふ。藤四郎作と唱ふるは、二代目をさすなり。元祖を古瀬戸と稱し、二代目を藤四郎と稱するは、同名二人つゞきたる故、混ぜざる爲に唱へ分けたるなり。藤四郎春慶も二代目なり。三代目藤次郎、是を中古物といふ。金華山窯の作者なり。四代目藤三郎、是をも中古物といふ。破風窯の作者なり。黄薬といふも、破風窯より出たるものなり。正信春慶といふものあり。正信は、何人なる事を詳にせず。又後時代春慶と稱するは、堺春慶、吉野春慶なり。後窯と稱するは坊主手、宗伯、正意、山道、茶臼屋、源十郎、姉、利休、鳴見、織部、拾貫、ハツ橋、伊勢手、萬右衛門等なり。又遠州公時代には新兵衛、江存、茂右衛門、吉兵衛等あり。其外國焼と唱ふるものは、薩摩、高取、丹波、膳所、唐津、備前、伊賀、信樂、御室なり。祖母懷は、美濃の國焼なり。大窯物といふは、瀬戸なれども、至て後のものにて、漸く百年餘になるものなり。右後窯以下、國焼にも、遠州名物數多し。其手筋の鑑定は、各其處々に大略を擧ぐ。

一、凡そ此書に圖記する處、親しく見たるものは、銘の上に○をしるす。其他は諸家の藏書圖記を求

めて、校合し、その正しきを選び載す。又古より諸書に圖配なきもの、圖あれども正しからず、疑はしきものは、唯その名と寸分をしるして、其位を空しうす。其後親しく見、又は圖配の正しきを得ば、見るに随ひ、得るに随て補ふべし。

一、圖するところの器、圓かなるを平らかにうつす事故、分寸を違へずしては、却て其形異なる様に見ゆる故、見るところの形にまかせて、分寸にかゝはらず、最もその状を摸するを要とす。見る人、圖上の分寸と、畫する所の寸法と、差ひあるを咎むること勿れ。

一、挽家竝に箱書付、添翰、添懸物等も、見るに随て騰寫する所なり。是等も正しからぬをば、眞字てふ假名にて、其字様をしるすのみ、挽家、箱等も、異様ならざるは、唯書付のみをうつす。

一、袋は切の名のみを書す。地組紋柄は、次出の「きれ」の書にてもとむべし。

一、此書の次編は、大名物茶碗、香合、織物、名物雜記、以上四編なり。校合の全きにしたがひて梓行すべし。

一、大名物、中古名物の中にも、回録等によりて、名のみ残りたるものあり、幸にして、圖配の形の残りたるもあり。今此の編をあらはす大意は、世に存する所の名器、もし不思議の災にかゝりて、其物は烏有となるとも、千歳の後に、名と物とのかたしるを殘さんがためなり。然れども、大名物はさらなり、何れも諸家の秘藏する所なれば、悉く見るに由なし。若し見ざる所の器の主、其の器の名を

不朽に傳へ、且つは天下と樂を同じうするの志を起したまひて、其の藏する處を惜まず、それが圖をうつし、其大小、寸分、竝に其修覆等をしるして、申椒堂がもとに送りたまはゞ、我輩の幸のみならず、其器の爲ならん。且つ名物は天下古今の名物にて、一人一家一世の名物ならねば、四方の數寄人等、力をともにし給はんことを、希ふことになむ。

于時 天明丁未之孟春

これ公の自作に係る序文とす。而して本書中、各編の見出及び説明、或ひは引歌など、公の眞蹟所々に散見し、公の著述たるを證す。今松平家には其後公の自ら訂正増補したる手記を有する原版を藏す。近年東都松山堂書房、好古家のために一百部を限り之を複寫して上梓し、以て好事家の渴望を醫せり。

中興茶入之部

一卷 唐物

二卷 古瀬戸 春慶

三卷 藤四郎 藤四郎春慶

四卷 金華山

五卷 破風

大名物之部

第三篇 茶 道

茶 不味公

二六二

六卷 唐物

七卷 古瀬戸

(以上七卷)

後窯國焼之部

一卷 後窯 國焼

天目茶碗之部

二卷 天目名物 茶碗

樂燒茶碗之部

三卷 樂燒茶碗

雜記之部

四卷 茶杓 華入 茶托 壺

五卷 水指 釜 硯

(以上五卷)

拾遺之部

一卷 藤四郎 金華山 破風

二卷 唐物 古瀬戸 春慶

三卷 掛物 歌の物 小倉色紙 墨跡

四卷 香爐 臺 盆 香合

附八幡七種の名物

(以上四卷)

名物切之部

一卷 綴子 金襴

二卷 間道 雜載

(以上二卷) 合計十八卷也

この書の出版年月は、三都書屋行事の舊記なる「割印帖」(全十一册、東京淺倉屋書店所蔵)に據りて明かなり。

一、寛政四年(元年)仲冬 古今名物類聚 陶齋尙古老人著 雜記の部 全五册 板元賣出 須原屋市兵衛

墨付百九十一丁

一、寛政三年亥秋(十二月二十五日割印) 古今名物類聚 尙古老人 全部七册、茶入部五册、切之部二册

墨付二百十一丁

板元賣出 須原屋市兵衛

第三篇 茶 道

二六三

一、寛政六年九月二十九日 不時刷印 (冊數脱) 三冊ナルベシ

一、寛政九年巳夏 名物類聚 陶書尙古老人 拾遺の部 全三冊 板元賣出 須原屋市兵衛

墨付百九十五丁

是によりて見れば、寛政元年に第一回の出版あり、同三年に第二回の出版あり、其後寛政六年と九年との二回、即ち前後四回に分ちて、九年間に全部完結を告げたるを知るべし。昭和十四年古典全集本洋装二冊として刊行せらる。

なほ公の遺著として未だ世に知られざるものに「瀬戸陶器遺蹟」三卷あり、これ文化八年、龜田某(龜田宗振か)のために著はしたるものにして、時代、窯別、鑑定に關するものにして、松平家藏に公の自書卷物三卷あり。嘗て松平家編輯部編輯松平不昧傳に於て初めて世に公開せられしが、近年大阪創元社發行茶道全集本の器物篇四に余が校合せるものを掲げたれば、今その原文を掲げず。

一一 公遺愛の名器

公は其著「古今名物類聚」の自序に説けるが如く、名器は天下の重寶にして一人一家の寶とすべきも

のにあらずとの所信に基き、平素つとめて古器珍器を蒐集したり。これ今日の用語を以ていへば、美術の保護者を以て任じたるものならん。或る逸話に、國老朝日丹波が述懐談として傳ふるものあり。曰く公嘗て金庫を見んと欲す。丹波乃ち公のために之を示したるに、公は黃白の正貨積んで山の如くなるを見、爾來高價なる諸道具を續々購求せらるゝに至りたれば、丹波は後これを悔いて己が一生の失策なりと云へりと。公は眞に茶器を愛し、茶道に關する書畫骨董を愛し、之がために他の冗費を節し、一意専心鑑識を極め、比較的低廉の價を以て最も尊き國寶たるべきものを蒐集せんことに力を致せるなり。明治維新の前後藩が金庫に蓄へしところの正貨は殆どその全部を失ひたれども、幸にして公遺愛の家什は松平家に存し近年大半數寄者の間に分譲せられ、不昧公道具といへば、超國寶的の日本趣味的財産として、永久にその光りを放てり。今左に公自筆の雲州道具帳なるものを示さん。

(5) 道 具 帳

(一) 寶 物 之 部

一、圓悟禪師墨跡

日東岩禪師跋

從宋朝入來、木筒其外訓點消息數通。

世俗流圓悟と云ふ。

一、油屋肩衝 漢

蓋袋

若狹盆

利休文

右兩品者、天下寶物也。天下名物雖多、此二種無比。子々孫々格別大切可致者也。
文化八年未九月

出羽守殿

不

昧

(二)寶物之部

一、康堂禪師墨跡

調點卷物

古表相

所謂破虛堂是也。

一、鎗箱 小瀬戸

蓋袋

一松木盆

右兩品者、天下名物也。鎗箱茶入者、和物之第一にて、上なき品也。依て前之二品に次て、格別大切に可致者也。
文化八年未九月

不

昧

出羽守殿

(三)寶物之部

一、殘月 漢

蓋袋

一、種村肩衝 漢

蓋袋

一、日野肩衝 漢

蓋袋

一、定家卿小倉色紙

世中與

一、大惠禪師墨跡

一、山市晴槽 玉欄筆

一、遠浦歸帆 牧溪筆

一、虛堂禪師墨跡

世に板渡と云ふ。

右九品者、天下名物也。永々大切可致者也。

文化八年辛未九月

不味

出羽守殿

大名物之部

- 一、*六條肩衝 小瀬戸
- 一、*山の井 大瀬戸
- 一、*神谷肩衝 大瀬戸
- 一、*伊木肩衝 漢
- 一、*北野 長二郎
- 一、*細川井戸
- 一、*油滴
- 一、*粉吹
- 一、*尼ヶ崎 臺
- 一、*油屋 釜 同
- 一、*燕 畫 牧溪筆
- 一、*瀧 畫 玉圃筆
- 一、*慈母 鳥 牧溪筆
- 一、*門無關布袋無準贊
- 一、*定家 卿筆 慶賀文
- 一、*園城寺花入 利休作
- 一、*蟹蓋 置 唐銅
- 一、*梅繪 舜舉筆
- 一、*青王香爐 本手

江岑文

- 一、*本多井戸 喜左衛門云
- 一、*玳瑁 盃
- 一、*加賀井戸
- 一、*割香 臺
- 一、*園城寺 釜 蘆屋
- 一、*蜆子 猪頭 梁楷筆
- 一、*章駄天猿 猴 三幅對 牧溪筆
- 一、*竹繪 東坡筆
- 一、*柘榴 繪 牧溪筆
- 一、*佐理 卿筆
- 一、*寺落 葉 西行法師筆
- 一、*松本 船 砂張
- 一、*珠數布袋 青貝
- 一、*瓦獅子香爐

一、堆朱四睡揚茂作

右三十八品者、天下名物也。永々大切可致者也。

文化八辛未九月

出羽守殿

中興名物之部

- 一、富士山 唐物
- 一、宮城野 野田
- 一、もしほ 小瀬戸
- 一、吸江 面取
- 一、染色 面取
- 一、振鼓 萬右衛門
- 一、撰屑 九
- 一、蓬生 九
- 一、木本 なまこ
- 一、比丘真 大覺寺
- 一、増鏡 翁
- 一、佗助 新兵衛
- 一、澤標 織部
- 一、盤余野
- 一、村雨 玉栢
- 一、生野 丹波
- 一、辯舌 新兵衛
- 一、忘水 みな河
- 一、思河 からつ
- 一、吹上 唐物
- 一、忘水 市場
- 一、大鳥 大瀬戸
- 一、春雨 廣澤

江月和尙色紙

昧

- 一、瀧浪
- 一、手枕 高取
- 一、増鏡 玉栢
- 一、口瓢箪 春慶
- 一、鈴鹿山 大瓶
- 一、節季 小せと
- 一、藤浪
- 一、吳竹 廣澤
- 一、*江戸とや
- 一、*長崎 堅手
- 一、*一介 ノンコウ
- 一、*鳳林 ノンコウ
- 一、*青磁牛香合
- 一、*庭の雪 定家刺筆
- 一、*玉礪禪師墨跡
- 一、天筒山 口廣
- 一、藤重 眞如堂
- 一、木枯 飛鳥川
- 一、谷川 利休
- 一、鷹羽
- 一、*大江 隨所
- 一、神樂岡 眞如堂
- 一、*伯庵
- 一、*千種伊羅保
- 一、小鹽 井戸
- 一、*加賀光悅
- 一、*輪寶香合
- 一、瀬戸獅子香爐
- 一、*象耳花入 唐銅
- 一、*澤庵江月兩筆
- 一、垣根 磁紙
- 一、九
- 一、貯月 春慶
- 一、甫十 さつま
- 一、初祖 正意
- 一、大津
- 一、潮路庵 磁紙
- 一、*面影 染付
- 一、*橘 吳洲
- 一、*無一物 長二郎
- 一、*西條柿 長二郎
- 一、*長二郎菊桐香合
- 一、*東陽坊釜 興次郎作
- 一、*管耳花入 唐銅

右六十七品者中興名物也。可致秘藏者也。
文化八辛未九月

不 味

出羽守殿

(一) 名物並之部

- | | | |
|------------|-------------|-----------|
| 一、女郎花 大瀬戸 | 一、清 水 小川 | 一、戸難瀬 米市 |
| 一、*さび助 備前 | 一、小茄子 天目手 | 一、飯 胴 春慶 |
| 一、走 井 備前 | 一、*水の子 しがらき | 一、沼 田 黄天目 |
| 一、*彫三島 | 一、*大徳寺五器 | 一、粉 吹 酢次 |
| 一、*山 路 はけめ | 一、*宋 胡 録 吳洲 | 一、*青磁牡丹 |
| 一、大 龜 交趾 | 一、鷹 吳洲 | 一、牛染付 吳洲 |
| 一、*竹の丸蒔繪 | 一、*青磁桃 | 一、對島伊羅保 |
| 一、刷毛目茶碗 | 一、*千とせ 熊川 | 一、*古志野 |
| 一、*三よし野 井戸 | 一、*古三島 | 一、*蕎麥糟 |
| 一、*備前單口 | 一、坂本井戸 | 一、墨獅子香爐 |

- | | | |
|--------------|-----------------|-----------------|
| 一、二階香爐 青磁 | 一、*砂張水指 | 一、*細すだれ 青磁 |
| 一、*しがらき三夕 青磁 | 一、利休小尻張釜 與二郎作 | 一、*蘆 屋 眞形 |
| 一、阿彌陀堂 與二郎作 | 一、*丸 釜 與二郎作 | 一、*寶 紙 天明 |
| 一、霞丸釜 天明 | 一、*萬代屋 與二郎作 | 一、*眞龍岩禪師墨跡 |
| 一、*無學禪師墨跡 | 一、*布 袋 牧溪畫 砥平石贊 | 一、*千代能文 |
| 一、*鴻海粟墨跡 | 一、*俊明極禪師墨跡 | 一、南楚禪師墨跡 |
| 一、定家卿二枚續文 | 一、*小色紙 畫探幽 贊宗甫子 | 一、*布 袋 胡直夫畫 愚極贊 |
| 一、*山門記 春屋和尚筆 | 一、石室禪師墨跡 | 一、*犬之畫 毛益筆 |
| 一、鷺 畫 徐觀筆 | 一、蓮 鷺 牧溪筆 | 一、*雜貨畫 任康民筆 |
| 一、*醉 翁 梁楷筆 | 一、天台山 宗且作花入 | 一、*砂張棒先驅 |
| 一、片輪車手箱 | 一、*雲峯禪師墨跡 | 一、*青磁竹形ふた置 |

不 味

右六十一品者、中興名物同様之品故、名物並と名付候、秘藏可致者也。
文化八辛未九月

出羽守殿

第三篇 茶 道

道具帳は名物並の次に上之部の道具三百三十九點を掲ぐ。今煩しければ之を省く。なほ公が嗣子月潭公に與へし遺言は、次の如し。

一、二、寶物は茶會に用申間敷事。

三、寶物は格別之茶會も候はゞ、用可申、常之儀には遣申間敷事。

大名物以下、茶會に用不苦候事。

一、道具共、蟲干手入之儀、我等致來候通、永守可申候。尤大崎藏に入置可申事。

二、道具不殘我等一生は預置申候。我等方にて茶事に遣候部は朱點いたし置候、其外之品々は、心次第遣ひ可被申候事。

一、圓悟、油屋は、往來に國許へ駕籠に入候て、持參候へども、道中無心束候間、以來は大崎藏に入置可被申候事。

一、茶事被致候道具計、上屋敷へ取寄濟み候はゞ、是迄之通入かへ可申、出火之節道具多候へば、鹿末に成候者に御座候事。

不昧公道具帳の分類は、(一)寶物(二)大名物(三)中興名物(四)名物並(五)上之部の五種なり。寶物は大名物中殊に大切なるものを選出し、名物並は中興名物に次ぐものとなせるなり。大正名器鑑にはこの名物並の茶入茶碗を全部名物として取上げたり。また上之部の中にて、國寶

となれるもの、蝶時代蒔繪(足利時代)、平治物語六波羅行幸繪卷(三卷の中下巻)などあれば、公の時代に上之部に編入されたるものにて、今は名物とすべきものもあるべし。乃ち大正名器鑑には上之部の中の茶碗數點を取上げたり。大阪創元社刊茶道全集本の器物篇(一)の卷末に、森川勘一郎氏本「雲州松平家御藏帳」として掲げられたものは、余が等庵翁の許にて、約十年間大正名器鑑を編輯せる折、主として伏見屋甚兵衛の覺書と覺しきものに據り、其他隨見隨記、諸茶書より抜擢して、竊に編成したる余が秘本なり。或る時茶友某に貸與せるところ、速に寫本して數冊を造り、雲州藏帳として數寄者の間に販賣せる由を聞きしが、森川氏藏も即ちその寫本なるべし。茶友某晚年落魄、幸ひに余が秘本數冊を寫し、一時にても糊口を凌げるは、予にとりては悲痛なる喜びなり。ともかく既に活字本として天下に公開せられたる以上、不昧公道具帳上之部の品目などは、それに譲りてこゝには省くこととせり。

主要なる名物道具

公の道具帳は、茶入に於て大名物即ち唐物、古瀬戸、中興名物即ち眞中古、金華山、破風窯、もしくは國燒に至るまで、約百點の名物茶入を集め、宛然茶入博物館の觀あり。また名物茶碗墨蹟等に就きても、公の道具は名物中の名物なるべきもの尠からず。一々その記録由來を敘述するは、紙數の許さざる

ところなれば、其中最も主要なるものみに就きて、その由来を略述すること左の如し。

一、圓悟禪師墨蹟

桐くりぬき筒添 寶物 大名物

上下茶箱 中風帶 紫地紗金 一文字菊黃地紗金 軸象牙

圓悟は宋人臨濟の正宗を唱へたる高僧にして、實に禪宗の聖典とも稱すべき碧巖録の著者なり。崇徳七年七月七十七歳を以て寂す。この墨蹟は桐のくりぬき筒に入れたるまゝ、薩摩坊の津に流れ着するに

より、俗に流れ圓悟と稱す。即ち虎丘隆に與へし印可狀なり。その文次の如し。
有祖已來。唯務單傳直指。不喜帶水拖泥。打露布。列窠窟。鈍置人。蓋釋迦老子三百餘會。對機設教。立世垂範。大段周遮。是故。最後徑截省要。接最上機。雖自迦葉二十八世。少示機關。多顯理致。至於付受之際。靡不直面提持。如倒刹竿。盤水投針。示圓光相。執赤幡。把明鑑。說如鐵樞子。傳法偈。達磨破六宗。與外道立義。天下太平。審轉。我天爾狗。皆神機迅捷。非擬議思惟所測。汨到梁游魏。尤復顯言教外別行。單傳心印。六代傳衣。所指顯著。遠曹溪大鑿。詳示說通宗通。歷涉既久。具正眼。大解脫宗師。變革通塗。俾不滯名相。不墮理性言說。放出活卓々地。脫洒自由妙機。遂見行棒行喝。以言遣言。以機奪機。以毒攻毒。以用破用。所以流傳七百年來。枝分派別。各擅家風。浩々轟々。莫知紀極。然鞠其歸着。無出直指人心。心地既明。無絲毫隔礙。脫去勝負。彼我非知見解會。透到大休大歇安穩之場。豈有二致哉。所謂

百川異流。同歸于海。要須是个向上根器。具高識遠見。有紹隆佛祖志氣。然後能深入關奧。徹底信得及。直下把得住。始可印證。堪爲種草。捨此切宜寶秘慎詞。勿作容易放行一也。

別に「日東岩禪師跋墨跡」あり。また此の墨蹟の讓狀には、春屋、玉甫、萬江、月岑、玉室の五和尚の筆あり。護聖師僧禪師及び金峽行珍禪師二老の跋墨蹟、圓鑑國師の筆「奥書」圓悟禪師墨蹟點書「三卷、即ち古嶽和尚筆卷物(外題同筆奥書澤庵和尚筆)大聖國師筆卷物(外題董甫和尚筆奥書玉舟和尚筆)雲英和尚筆卷物(外題奥書共天福和尚筆)及び伊達政宗卿消息一幅及び祥雲寺讓狀を添ふ。この圓悟墨蹟の由来に關しては「祥雲寺略記」に明かなり。今左にその全文を掲ぐ。

「祥雲寺什物佛果圓悟師ノ墨跡ハ、虎丘隆和尚ノ印可狀也。昔薩摩國坊ノ津ノ人、海上ヨリ筒一ツ流レ來ルヲ拾ヒ上ゲテ、中ヲ披テ見レバ、此墨蹟也。宋朝ノ知識十三人ノ跋モ添テアリ、定テ是ハ震旦國ヨリ船ニ積テ出シニ、海上ニテ船破損シ、唯今流レ寄ルト見ヘタリ。日本ニ虎丘派ノ禪法流布セリ、誠ニ虎丘派ノ至寶ナリトテ秘藏ス。其後傳來シテ堯甫藏主ト云僧所持ス。此僧薩摩ヨリ京都ニ至リ、大徳寺ノ大聖國師古岳和尚ニ參禪ス。數年參禪ノ後薩摩へ歸ル時、報恩謝徳ノタメニ此墨蹟ヲ國師ニ獻ズ。國師ハ虎丘十五世ノ孫也。國師喜悅不淺シテ、七言八句ノ頌並ニ序ヲ書テ、其志ヲ謝ス。此頌生茗稿ニモ載セタリ。其後此墨蹟ヲ大仙院ニ納テ、古岳和尚、大林和尚、笑嶺和尚三代傳ル。笑嶺和尚ノ時、天正年中ニ檀那ニ墾ノ住谷呼雲齋宗臨ト云者アリ、此墨蹟大望ノ故、禮金數片獻ジテ墨

跡申請ル。同禮那ニ千抛茶齋宗易肝煎也。始表具龜相ナルニヨツテ、利休宗易表具ヲ改ラル。呼雲齋嫡子ヲ谷放牛齋宗卓ト云、伊達中納言政宗卿ヨリ毎年合力千石賜ル。政宗卿此墨跡大望ニヨツテ、慶長年中ニ墨跡ヲ二紙ニ切テ、始ヲ宗卓所持シ、末ヲ政宗卿ニ献ズ。二幅ニ切ル時、圓鑑國師、春屋和尚、古田織部助重能ト相談ニテ切也。此時又表具ヲ織部助改ラル。放牛齋嫡子ヲ谷海岸居士宗印ト云。始ノ表具龜相ナリトテ、小堀遠江守政一コノミニテ又表具ヲ改ム。海岸居士、祥雲寺ヲ建立シテ後、祥雲寺開山ハ虎丘十九世ノ孫ナレバトテ、此墨跡ヲ當寺ニ納ム。震旦國ノ知識ノ跋十三幅ノ内二幅ハ、今ニ大仙院ニアリ、一幅ハ織田源五郎長益法名有樂大仙院ヨリ求テ、今有樂五世ノ孫織田内匠頭長根所持ス。此三幅ノ語ハ寫シテ當寺ニアリ、殘ル十幅在所ヲ不知。

點字古岳和尚筆一卷 奥書澤庵和尚筆

點字同和尚筆一卷 外題薰甫和尚與書玉舟和尚筆

點字雲英和尚筆一卷外題並奥書天祐和尚筆

此二卷ニハ始末共ニアリ

外題澤庵和尚筆 跋春屋和尚筆

二幅ニ切ル時、春屋和尚ヨリ古田織部助へ相談狀有。海上ヨリ上ル筒アリ。

右之中、古岳和尚は大永六年堺南宗寺の前身南宗庵を開きて永く堺に住せり。大林和尚は古岳の弟子

にして、南宗庵を改めて寺とし、その開山となる。笑嶺和尚は南宗寺第二代なり。而して祥雲寺の開山は澤庵和尚なり。谷呼雲齋(俗名善三郎慶長六年歿年七十)は大徳寺仙岳和尚の兄、谷放牛齋(俗名長左衛門元和元年歿年五八)は大徳寺雲英和尚の兄にして、いづれも大徳寺と關係あり。而してこの表装は前記の如く三度改められしが、今の表装は即ち遠州好にして、前記表題の下に掲げたるが如し。

この墨蹟は堺に在る時、南宗寺と祥雲寺と年番にて保管し、その授受の際は頗る嚴重にて、兩寺僧立合の上、鍵を預るものを定めたりといふ。文化元年、公の所望により祥雲寺より之を譲渡す。公ために即金千兩を贈り、更に毎年扶持米米三拾俵を永世給與するを約せり。乃ちこの扶持米は、明治維新廢藩まで前後約七十餘年間履行せられたり。昭和十三年五月松平直亮伯より東京帝室博物館に献納せられ、今御物となる。尚ほ右の圓悟の墨蹟の後半、即ち伊達家に譲られたるものは、これに續き、終に「宣和六年十二月中游 佛果老僧克勤書」の署名あるものなるが、今その行方知れず。恐らく仙臺家の道具が一時大阪に預けられし時に紛失せるものならん。幸に不昧公所持の圓悟墨蹟の添物に全文を載せ、更に鄭寧なる聖護禪師の點寫あれば、就てその全貌を知るべし。公は參觀交代の折、この墨蹟と油屋肩衝とを一の笈(他の笈には虚堂墨蹟と鎗の鞘茶入)に入れて道中し、途中陣屋に着かるゝ時、まづこの笈が床上に安置せらるゝまでは安座せられざりきといふ。

一、油屋肩衝 漢作 寶物 大名物

添へ掛物 利休の文 添へ盆 若狭盆

袋六ツ。本能寺純子(珠光好) 雲紋古金襴 花鬼古金襴 宗薫純子 下妻純子 太子廣東

慶長中堺町人油屋常祐(利休の弟子の妙國寺開山日耽上人の兄)所持、豊公に献じ、ために北野茄子並びに銀錢三百貫を賜ふ。秀吉之を福島正則に授け、後徳川秀忠に献じたるを土井利勝拜領し、代々之を傳へしが、元祿の頃河村瑞軒之を買求め、後江戸深川の富商冬木こと上田宗古の有に歸せしを、天明三年公之を求む。代一千五百兩なり。抑もこの茶入は漢作中優秀のものにて、來歴もまた正しければ、位金一萬金なるを、天明飢饉の際冬木家不如意のため、かくの如く安價にて購ふを得たるなり。公は爾來幾多の名物茶器を買ひ求められたるも、之に過ぐるものなければ、公は第一寶物として圓悟墨蹟に配し、參觀の途にも笈櫃に入れ、家臣をして負荷せしめ、殆ど座右を離さざりきと云ふ。

一、虚堂禪師墨跡

寶物 大名物

點字一卷 江月和尚

京都町人大文字屋の珍藏せるところ、信長の懇望に會ふと雖も之を拒みて子孫に傳へたり。後兄弟事を以て相争ひ、この名幅の一部を破りたれば、俗にこれを「破れ虚堂」といひ、名聲益々揚れり。文化の頃、公、大文字屋宇作より代金一千五百兩にて購求せり。昭和十三年五月、松平直亮伯より東京帝室博物館に寄贈せられ、今御物となる。

一、鎗の鞘

古瀬戸 寶物大名物

添盆 松木盆 利休所持 底に古田織部の打込みたる釘痕あり 袋六ツ

油屋肩衝が唐物の大關なるに對して、この茶入は初代藤四郎作和物の大關なりとす。形鎗の鞘に似て狭長なれば、豊公これを鎗の鞘と命名して秘藏せしが、石川備前守伏見奉行の功を嘉して之を與へたり。石川家代々所持し、後京都井筒屋こと河井十左衛門に傳はる。小堀遠州も伏見奉行の時、京都に上るの樂しみは、この茶入を見るにありと云へり。後井筒屋不如意となり、三井八郎右衛門に譲渡せしが、寛政の頃千六百五十六兩餘にて公の購求するところとなる。位金二千五百兩なり。公の蒐集せる名物茶器及び茶掛幅其他の名品奇什は數百點にのぼり、茶器收藏として天下第一の稱ある程なれば、今一々その品目を掲げて之を説明するは容易の業にあらず、唯その中傳來の趣味あるもの數點に就きて次に列記すべし。

一、残月

唐物 大名物

添盆 黒四方盆 羽田五郎作 袋四ツ

茶入の肩に黄釉にて残月の佛あれば、因て銘とす。東山義政所持にして前田利家に傳はり、利家之を家康に献じ、榊原康政之を拜領す。その子忠政の時國用窮乏して之を鬻がんとせし時、丹後宮津の城主京極高廣入道號安知、金一萬兩にて所望せしに忠政これを悉く銅錢にて得たと云へるにより、安知、

既に世の物笑となれる以上はとて、白晝車數十輛に一萬金の銅錢を積みて送り届けたること、諸書に見えて有名なる話なり。其後松平越中守に傳はり、御用金立替のため大阪町人泉屋六郎右衛門の有となり寛政の頃金二千兩にて公の購求する所となる。

一、遠浦歸帆

牧溪筆 大名物

牧溪八幅八景の畫は東山義政所持なり。玉圃牧溪兩筆の八幅も亦天下の珍寶なるが、牧溪の八幅とは自ら別なり。この遠浦歸帆の軸は牧溪八幅の其一なり。もと徳川家康公所持にして、寛永の頃戸田氏に賜はり、其後田沼主殿頭に傳はる。享和の頃田沼家横暴のため極めて不評判にて職を免ぜられしかば、諸侯一人もこの邸に赴くものなかりしに、公は敢て駕を枉げてこれを訪ひしかば、諸侯も之に倣ひて訪問するもの出で來れるに因り、田沼家大いにこれを徳とし、贈るにこの幅を以てせり、公は敢てかゝる名幅を無償にて受くるの謂なしとて、金五百兩を贈りて謝禮とせりと云傳ふ。昭和八年一月、國寶に指定せらる。

一、山市晴嵐

玉圃筆 大名物

東山義政所持にして、牧溪玉圃兩筆八景八幅の其一なり。豊公に傳はり、後金森出雲守に譲與せられ代々金森家の珍藏たりしが、寛政の頃金五百兩にて金森家より公の購求するところとなる。

一、小倉色紙

よの中の歌 大名物

小倉色紙は、定家卿小倉の山莊にて百人一首を選べる時、自ら筆を染めたるを、宗祇老人世に傳ふ、天下二十七枚の珍寶たり。其後某大名京都の名妓吉野大夫に與ふ。吉野廣東とて茶入の袋にも使用せらるゝは、この名妓の打掛なりきと云ふ。吉野は本阿彌光悦の媒介にて、灰屋三郎右衛門紹益の妻となり間もなく失せしかば、紹益愈々これを珍藏して子孫に傳へたり。寛政の頃古筆了意の仲介にて、灰屋家より金千兩にて公の所有に歸す。かるが故にこの色紙は小倉色紙中特に有名なるものとす。

一、本能寺文琳

漢作大名物 一名朝倉文琳 また三日月文琳

漆盆 張盛の五葉盆 蓋六枚 替袋七ツ

朝倉義景所持にして織田信長の有となり、信長之を本能寺に献す。本能寺の變、火に遭ひたりと覺しく、軸傷見ゆれど、小堀遠州の取立にて漆にて完全に補修し、殆ど原色を損せず、蓋六枚、替袋七ツ、張盛盆など、附屬物完備して稀代の珍寶たり。後中井大和守より小堀仁右衛門に傳はり、京都道具商山越利兵衛の仲介にて金五百五十兩にて公の購求するところとなる。

一、山の井肩衝

古瀬戸 大名物 一名稻津肩衝 松井肩衝 また人生

細川三齋、或る時金森出雲守が所謂飛騨國にて小壺狩して名茶人を見出し、之を出雲肩衝と稱して珍藏せるを聞き、自領豊後國中にて小壺狩を行へる時、三齋の家臣松井佐渡守康之曰く、拙者家來稻津忠兵衛嘗て越前にてこがしを容れたる小壺を發見し、代金七十文にて購ひ來れる物あれど、御笑を恐れて差

出さずと。三齋強ひて之を示せといひ、之を見て痛く賞美せしが、松井佐渡守之を疑へるに因り、古田織部に鑑定を請ひけるに、名物茶入たるべく疑なしと言へり。松井乃ち之を三齋侯に獻せんとせしが、なほ汝の家寶たるべしとて受けず、慶長十六年松井己の死期近きを知り、敢て之を獻す。翌年正月松井六十三歳にて歿し、稻津之がために殉死す。この茶入も七十文にて購ひたれば、人生七十古來稀の義に由り、人生と命す。また山の井といふは「淺くともよしやまた汲む人もあらず我に事足る山の井の水」といふ古歌に由りて名とす。古田織部、前田加賀侯各之を所望したれど、三齋惜しんで譲らざりき。後分藩宇土侯に傳はり、安政七年江戸道具商河内屋宗海取次ぎ、切類と合せて金三百五十兩にて公の有に歸す。當時位金五百五十兩なり。

一、鹽蓋置

大名物

東山義政所持にして紹鷗に傳はり、更に利休に傳はり、小堀家土屋家を経て、松花堂の愛藏となり、後公の茶門人酒井雅樂頭の有に歸し、それより公の手に歸す。もと銅唐物の文房具として生れたるものなるが、形状恰好頗る出来よろしく、紹鷗利休の如き大茶人が蓋置として愛玩せるも、決して偶然にあらざるを知る。

一、富士山肩衝

唐物 中興名物

肩衝茶入として形状や、不備なれど、胴の釉のなだれ兩方より落ちあひて、偶然にも富士山の形をな

せるが、この茶入の名物たる所以なるべし。挽家に江月和尚の詩を彫り、袋に名物裂の四つを添ふ。傳來は小堀家、阿部豊後守、冬木なり。安永五年伏見屋の仲介にて代金二十枚にて、公の有となる。

一、比丘貞

大覺寺手 中興名物

小堀遠州取立ての名物茶入として頗る數寄を凝らせり。形狂言の比丘貞の面に似たれば名づく。挽家の粉書も遠州筆にて「ヒクサタ」と片假名を用ひ、袋には名妓吉野太夫の打懸なりしといふ吉野廣東を配し、外箱は燃ゆるが如き朱色の掻合塗にして、遠州の金粉字形書付あるなど、頗る趣向を凝したるを見る。傳來は小堀遠州、酒井左衛門より、加賀岡野屋伊兵衛。安永の頃、銀五百枚にて公の手に歸す。

一、伯庵

中興名物

公の購求せるものに、伯庵茶碗二あり。一は奥田主馬所持にて、安永三年（公二十四歳の時）五百兩にて求む。伏見屋覺書に、不昧公高價品御買上げの初めなりと書けるもの、是なり。一は冬木道具にて、寛政年間本屋惣吉取次ぎ、金千兩にて求めたるものなり。この千兩の伯庵は、伯庵茶碗中最も優秀にして、約束の磨礬釉内外兩面に濃く流れかかり、高臺片薄胴火割れなどを始め、伯庵十誓の約束を具備す。

一、加賀光悅

赤樂 中興名物

光悅七種の中最も景色に富み、雄渾の姿を備へたる茶碗なり。箱蓋裏に「赤茶碗 加賀光悅 於加州仙叟所持 宗乾（花押）仙々齋傳來ス」とあり。もと加賀にて千仙叟所持せしが、後江戸銀座中村内藏

之助に傳はり、正徳四年内藏之助關所仰付けられて諸道具賣拂の際、深川の富豪冬木喜平次の有となり寛政の頃江戸道具商伏見屋甚右衛門及び本屋惣吉兩人取次ぎ、雪舟の三幅對、信樂三夕の水指と共に、金七百兩（或云六百兩）にて不昧公の購求するところとなる。この茶碗は光悦の特色なる縦匳頗る雄大にして、その全體の姿と口縁の曲線と胴の直線との恰好は、各嚴肅の調和を保ち、その高臺に於て光悦獨特の強さと膨みとを有し、高臺側の平面を廣く取りたるところ、名狀すべからざる一種の權威を感じしむ。因にいふ。紀州侯に同名の加賀光悦あり、之は本朝陶器攷證に述べたるが如く、この茶碗の寫しなるべし。この寫しにても去る昭和二年四月の入札に一萬圓に落札せるを見れば、その本歌たるこの加賀光悦の高價なるは推知するに難からず。今越後中野家に傳はる。

一、鳳林

赤ノンカウ七種 中興名物

三代樂吉左衛門道入、即ちノンカウ作中七種の隨一にして、京都鹿苑院鳳林和尚の所持なりしが、其後大阪鴻池家に傳はり、それより同地岩井屋に傳はる。名物目利聞書に「赤樂にて青の替り秀公の内印あり、爐風呂ともに兼ねたる茶碗なり。昔浪華岩井某所持せし由、この茶碗を戀ひ佗びて病となりし人ありて、親友之を憐み、賣買の意を退て、一服茶を參哉と申ければ、病本快して茶に至る日、水屋の店に黄金二百枚をおきて持かへりしなり」とあり。當時の茶人氣質を窺知すべき外に、この茶碗がいかに人をして愛好の戀情禁する能はざらしめし程に、その作といひその釉といひ、頗る上出來なるかを證す

るに足る。文化の頃五百三十兩（或云五百兩）にて不昧公の購求するところとなる。

一、片輪車手箱

源頼朝夫人平政子所持 名物並 國寶

王朝末及び鎌倉初期の漆工として歴史的に貴重なるのみならず、片輪車の模様配置、青貝嵌入の精巧、實に人目を驚かすものあり。公の道具帖には名物並之部に編入せられたれど、今より見れば大名物の部にも入るべきものなり。伏見屋覺書に據れば、寛政の頃大阪より今宮宗了和尚仲介にて、佐理卿の文（大名物）と共に、金七百兩にて不昧公の手に入れることを知る。昭和六年二月國寶に指示せらる。

一、園城寺花入

利休作 利休文添 大名物

竹筒の正面に、縦に割れ一本出來、却て風雅の趣を添へたれば、利休の子少庵、園城寺の名鐘俗に辨慶の引摺鐘と稱するものに割れあれば、それに因みてかくは銘せりとぞ。抑もこの由來を尋ぬるに、天正十八年秀吉小田原を包圍せし時、敵北條氏の怒を激せしめんため、白米三俵を送りしが、北條氏政その返禮として葦山の竹三本送り來れり。秀吉因て利休に命じて花入三筒を造らしむ。即ち寸切、銘尺八。一重、銘園城寺。二重、銘夜長これなり。これ抑も竹花入の濫觴なりとす。其中園城寺最も秀逸なり。この花入塀の富豪住吉屋に傳はりしが、後これを少庵に與へ、少庵之を千五百兩にて榎十左衛門に譲り後金屋宗貞の手に歸せしを、京の家原自仙千兩にて譲受けたり。或時尾州の野村宗二、自仙に一覽を請ひしに自仙曰く、明年口切頃に上京せよ、其時之を示すべしと約す。宗二約の如く來りしが、自仙新に

園を建て、園城寺の竹花入に憚りて周囲の竹を皆伐り去りたりとて、當時京中茶人の佳話となれり。其後自仙の家政不如意となりしかば、豫て江戸の冬木氏が懇望せるに因り、この花入を手代に持たせ、八百兩に求めんことを乞ふ。冬木之を快しとせず、その手代を歸京せしめ、改めて使に金千兩を携へて上京せしめ、恭しく園城寺を譲り受けて歸らしめたり。これ名器の位を落さじの意なり。其後冬木家零落せしため、本屋了我の仲介に依り、遂に公の所有に歸す。買上代金八百兩なり。公或る年の冬十一月、この花入に白椿寒菊を挿し、掛物にこの添物利休の文武藏鏡文を掲げ、茶事を催せること、松江不入の控帳に見ゆ。古今茶話に、この花入にて茶湯ありし時、割目より水滴の漏るを見て、座に在りし芳村觀阿、入子筒をなすべき由を申す。公「否、今は古より水多く漏るか知らねど、此花入の水漏らぬはいかにならん」と曰ひけるに、其意を悟るものなかりしことを載す。この一場の逸話によりて、竹花入の水漏るは、露の零つる風情を意味するなりとて、殊更に竹花入の割れたるを用ふるを以て不味流と誤解するものを生じたりと云ふ。なほこの花入に添へる利休の文に就きては、後に述ぶべし。昭和十三年五月東京帝室博物館落成の際、松平直亮伯より同館に献納せられ、今御物たり。この園城寺花入には必ず利休の武藏鏡の文を添ふべし。然るに帝室博物館にては、花入と添掛物と別々に保管せられざるは、惜しむべし。

一、六波羅行幸繪巻物

上之部 國寶

畫は土佐光信といひ、或ひは住吉慶恩といふ、文は世尊寺行俊筆なり。即ち平治物語繪巻三巻の一にして、その上巻は東京岩崎男爵家に傳はり、中巻は米國ボストン博物館に入り、その下巻は即ちこの六波羅行幸繪巻物なり。木下大和守所持たりしを、大阪の道具商谷松屋權兵衛の仲介にて不味公の手に入れるなり。當時位金二百兩と稱す。公の道具帳には上之部に編入せられたれど、今より見れば無論大名物に入るべき貴重美術品なり。昭和五年國寶に指定せらる。同年松平直亮伯より東京帝室博物館に寄贈せられ今御物たり。因みに云ふ、不味公道具中、松平直亮伯より東京帝室博物館に献納せられたるもの、次の如し。

圓悟墨蹟 虚堂墨蹟 大惠墨蹟(春)

虚堂書簡 大惠墨蹟(秋) 江月極漆 無準墨蹟

以上寶物之部

青玉本手 口寄香爐 園城寺花入(利休武藏鏡文漆掛物)

以上 大名物之部

園城寺釜(不味藏帳ニ掲載ナキモノ)

以上 中興名物之部

馮海粟墨蹟 砂張棒ノ先

第三篇 茶 道

以上 名物並之部

南堂禪師墨蹟 六波羅行幸繪巻物 紹鷗作茶杓

以上 上之部

なほ不味公道具の中、近年國寶に指定せられたもの、次の如し。

遠浦歸帆牧溪 玳瑁盞 油滴天目 片輪車手箱 蝶時代詩繪

六波羅行幸繪巻物 佐理卿消息

公の蒐集せる茶器名物及び諸道具は、前掲の道具帳に列記せる如く五百餘點に達し、大正名器議に収録せられたる茶人茶碗のみにても約百點に上れり。之を大觀するに、公の道具蒐集は天明年間が始まり寛政の頃最も多く、文化に至りて減少せり。要するに公の治世中、治水殖産貿易等に由りて得たる利潤を擧げて之に投資し、文化三年退隱するに及んでは、公私の財産を明かにし、徒らに名器の買収に腐心せられざりき。而して一面當時の世相を見るに、寛政の頃深川の富豪冬木家の道具竊に世に出づるを窺ひて之を集め、土屋相模守、木下大和守の道具もまたこの頃多く公の手に入れるなり。元來冬木家は深川の材木成金にして、冬木町全部を邸とし、今深川の辨天池に辨天島あるは、その昔冬木家庭園の一部なりしといふに徴しても、その富豪の程は知らるべし。さてその冬木家も寛政の前後より次第に不如意となり、名物道具を賣るに、番頭および家人に知れざるやう出入の貸本屋に托し、貸本の荷の中に隠し

て持出さしめしが、不味公はこれを悉く高價に求めらるゝに由り、その貸本屋はをり／＼冬木家と赤坂の不味公の御屋敷とに往返して、公に名物茶器を運びたり。これに由りて貸本屋も公より常に御禮金を戴き、次第に富を造り、その授かりし黄白をば、俵に入れ車につるして土倉に納めたりといふ。なほこの上に公に就て茶器鑑定を學び、遂に貸本屋を廢業して、をり／＼掘出物を見付けて公に納め、愈々家富み榮えたりとぞ。(山澄力蔵氏談) 公の道具帳に本屋惣吉、本屋了我などの名見ゆるは、即ちその貸本屋なり。この外に道具鑑定家としては、京都の竹忠(竹屋忠兵衛本姓藤野號宗都)あり、大阪の谷權(谷松屋權兵衛本姓戸田)京都の谷貞(谷村屋貞八本姓戸田號宗嗣)あり。京都の加作(加賀屋作左衛門)京都の切八(切屋八左衛門)江戸の墨助(墨屋助三郎茂齋)江戸の河宗(河内屋宗憲)を始め、江戸の伏甚(伎見屋甚右衛門その子甚兵衛)の如き茶器商の驍將勇卒を顧問として、天下の名器を蒐集せられたることなれば、同じく名物といふ中にも名物中の名物を能く己が手に收むるを得たるなり。いはゆる時と人との利を得て、かくも茶器名物の收藏家として天下第一人者とはなれるなり。伏見屋甚兵衛の手控なる雲州侯御所持名器御買上げ控と稱するもの、端書に曰く「不味君御隱居御名、明和頃より御茶御始め被遊候より被爲召候品々、世上に御茶にて名物御あつめ被爲遊候、難有御隱居様、乍恐此の御方様につゞく者は一人もなし、大切に恩を思ふべし。大圓庵不味大禪師、毎月二十四日拜し可申候」と。誠に毎月二十四日の命日に公に拜すべきものは、曾に伏見屋一人のみにはあらざるなり。

公が古器を愛護せるは、偏に天下の美術を保護するの誠意に出で、獨り茶器のみ愛藏したるにあらず、甲冑の如きも亦これが修理をなし、以て永く後世に傳へんとせり。出雲神門郡日御崎神社に、源頼朝の獻せる鎧を藏す。公之を一覽して然る後江戸に携へ來り、將軍の闕覽に供す。この鎧、星霜を閱するこゝと久しくして、旂檀の組紐素れたり。公乃ち之を修繕して、再び神庫に納めしむ。時に文化十二年なり。公則ち自筆を以てその由來を記し、之を四箇の銅板に透彫りとなして、鎧の裏に附せしむ。銅板の文、次の如し。

素其 御邦 崎内 日
鎌鳴 倉尊 盡神 祠

乃檀 開祖 存獻
乙永補亡載開 此祖
丑言 此祖 存獻
左藏缺後存獻

文 化 十 二 年 修 補

鐵 六 百 餘
組 細 素 旂
世 恐 變 失 古
率 神 舊 製
少 將 源 治 郷

當時その措字の奇異なること、野馬臺の詩に似たりとし、世人之を傳寫して難讀の文とす。文政四年八月二日入あり、高橋清義に之を讀まんことを求む。清義乃ち措字を正し、更にその師千家俊信に糺して讀み得たりといふ訓方に由りて之を寫せば即ち次の如し。

邦内日御崎祠。其神素盡鳴尊。鎌倉開祖。獻此鐵。存檀上。六百餘載。組細旂素。後世恐變失古製。率舊製。乃補缺。永言藏之神庫。文化十二年修補

文化乙丑左少將 源治郷

思ふに「獻此鐵」以下の措字、或は「存六百餘載、旂檀之組細素」と訓すべきにあらざるか。なほ識者の教を俟つ。鎧は卯花織又は白絲織ともいふ。甲冑いづれも白絲を以て之を織す。胸部に不動明王及び異様な模様が有り。明珍宗介の作とす。建久十年遷宮の際神馬と共に源頼朝の寄進せるものなり。明治三十七年二月十八日、國寶に指定せられ、現に國幣中社日御崎神社の神庫に收藏す。

公が古器の鑑識に長ぜしは素より喋々を要せず。一日江戸の骨董店より古兜を得たり。形王冠の如く正面に天照大神宮、左右兩側に八幡大菩薩、春日大明神、及び背面に祇園午頭天皇の文字あり、悉く黄金を以て之を飾る。實に増田宗次の作にして、源義家の着用せしもの、毎戦必ず勝ち、撃つ所必ず破ること、猛獅の百獸を撃くが如し。故に獅子王靈甲といふ。當時明珍の極書、次の如し。

尊靈甲

神功皇后臣武内宿禰宗德三十代末

紀宗次 號增田大衛住京堀川

正作天喜之比

右兜蓋一頂、大圓嶺蜀山三十二間筋。護拜觀前板裏、有三社神號獅子王、後板裏彫源義家公官職之銘。是以研究家傳秘記、悉符驗矣。熟鑑察精鍊鐵鋼、黯然有威稜、形勢儼然如盤石、眞希代之神寶、可謂天下之至寶也。因敬附證狀、定價如左。

茶 不味公

二九四

代黄千五百枚

於武江御城下二極之

武内宿禰五十六世嫡裔日本唯一甲冑良工

増田明珍長門守

紀宗政（朱印、書印）

惟時
寶政三辛亥歲八月吉辰

公は乃ち之を修理して家寶とす。今東京帝室博物館に依託す。觀者皆公の鑑識に由りて、能くこの稀代の重寶を發見せるを讚美すると同時に、公の指揮に成れる修理のいかに完備せるかを感嘆せざるものなし。

奈良に松屋源三郎といふ茶人ありき。永祿、元龜、天正の頃より茶事を催せること松屋日記（一名源三郎日記）に見ゆ。代々源三郎と稱し家に松屋肩衝と存星長盆と徐熙の白鷺綠藻の圖幅とを藏す。世に之を松屋の三名物といふ。松永彈正久秀、南都燒伐の際、その前夜竊に使を遣りこの三名物を携へて逃るべきを告げたり。松屋は北野大茶湯の際にもこれを出品して豊公の感賞を得たり。細川三齋の如きは、特に長椅を着用してこの茶人を拜覽せりと云ふ。往年諸侯の一覽を乞ふもの甚だ多ければ、見料を取りて縦覽せしめたり。或る年公參觀の途伏見の旅館より人を遣して一覽を求む。松屋乃ち之を携へて公の覽に

供せしが、公感賞措かず、切に讓受けんことを請ふ。松屋肯んぜず、侍臣公の懇望の切なるを告げて、側の襖を開きしに、千兩箱三箇を積み重ねたり。松屋尙ほ諾せずして曰く、以て公の珍と換ふることを得ば即ち可なり。敢て黄白を以て授受すべきものにあらすと、事乃ち止む。公翌日一書を裁して源三郎に與ふ。その文に曰く。

昨日は兩種久々にて致し一覽、大慶不_レ過_レ之候。別而肩衝の如き、我等可_レ賞品とは不_レ被_レ存候。不備。

十月十四日

出 羽（花押）

土門源三郎殿

公のこの感狀に對して、松屋源三郎更に副書せり。その文に曰く、
家器の内肩衝茶入不味公別而依御賞味被下候御文なり

松 源三郎（花押）

明治の初、松屋家々産傾き、松屋肩衝は島津公家に入り、この源三郎の副書は、奈良の中村雅真氏の手に入る。而して昭和三年五月島津公家道具入札の際、この茶入は十二萬九千圓にて落札し、今根津美術館藏たり。因にいふ、存星の長盆は若州酒井侯に入り、徐熙の鷺幅はその所在を審にせず。或は云ふ、この幅も松屋肩衝と共に島津家に入りしが、明治十年の戦亂に焼失せりと。
因州侯池田家に眞如堂手籠田と稱する茶入あり。その添書は公の筆にて、

第三篇 茶 道

二九五

御手紙拜見仕候。不正之天氣、彌御清福奉珍重候。しかれば御道具の儀申上候所、早々爲持御見せ被下、忝仕合奉存候。御茶入一覽仕候所、存候よりは見事に候、眞如堂の手にて名物に御座候。

此同手の品

眞如堂

土屋家

響の灘

不知所

鏡川

不知所

盤余野

堀田家

右の外無之候、御秘藏可被成候、御家の内にて御掘出し、御浦山敷御事に御座候、無御油斷御藏内御吟味可被成候。書餘尊顔可申述候。以上

卯月末九

出 羽

相州公

御事

右の書狀に因りて、公が因州侯のために茶器の鑑定をなせるを知るべし。また大河内子爵家に松山肩まつやまかた衝と稱する大名物茶入あり、その添書にも松平不昧公一覽云々の記録あり。徳川家達公家の茶器の添書にも、袋の修理等に就き公の意見を徴したる記事あり。これらに由つて察するに、將軍家を始め諸侯の

中にも、茶器の鑑定、附屬品の修理等に關して、公の助力を請へるもの頗る多かりしを知るに足る。これ公がその著古今名物類聚の序に述べたる如く、名物は天下の名物にて一人一家の物にあらずとさせる所謂美術尊重に依るものならんか。

第四篇 學藝・家庭・逸事

一 禪 學

茶道は禪門に根蒂を有し、茶人は禪僧に悟道を叩く。珠光の一体に於ける、利休の古溪に於ける、片桐石州の玉室に於ける、小堀遠州の春屋に於ける、皆然り。然れども茶人多く茶事を先にして禪道を後にし、その能く悟入達道の域に進めるもの極めて鮮し。然るに公が禪學に志したるは殆ど茶事を始めた時と同じく、國侯たりし初より拮据十年、未だ嘗て一日も禪林の法味を嘗めざるはなく、その大悟徹底するに當りて、之を國政の上に應用したるもの、如し。

江戸麻布佛陀山天真寺に、藩祖高眞院の夫人慶泰院の墓及び第三代隆元院の夫人泰雅院の墓あり。兩夫人共に久松家の出たるを以てこの寺に葬れるなり。是を以て公は屢々この寺に詣で寺主大巖和尚と意

氣相投じ、遂に之に師事して禪道を修むるに至れるなり。公の名不昧は實に和尚の命名せるものとす。

大暑御堅勝奉賀候。昨日は先日御頼申候、號御選擇仕合奉存候、不昧に可仕候。何より出候文字に御坐候や奉伺候。

一、八日彌々參上仕候。

一、工夫少々存付申入候。八日にと存じ候へども其間待かね申候。法身無三種病二種光と存候。本心無病光もなく存候。本心病有之ては本心とは申間布候、光と申も無之と存候。此段可申入並びに御禮如此に候。御返翰奉待候、頓首。

六月二日

宗 納

大巖和尚 玉坐下

この書素よりその年代を詳にせずと雖も、不昧の號を定めし折のものなれば、禪道修行の初期に屬するや疑なし。公の作なる偈頌に曰く。

百丈野狐

不落不昧論野狐 衲僧多少有差殊

請看百丈山頭曉 風拂浮雲殘月孤

とあり。公が大圓庵と稱したるは、圓相の義に由ること素より辯を俟たず。天真寺に藏する公の親筆

圓相の畫讀を見るに、圓相中、不昧の二字を書し、その上に讀して曰く。

寡人自弱冠而好一味清淨、法喜禪悅之茶矣。偶與大巖禪師、擁爐談論禪門宗要。師即舉興化打維那話。不_レ論其旨。深夜坐於茶室中。憑榻長吟。多拜誦經。不禪。枯坐默照。不禪。放蕩不羈。不禪。見聞覺知。不禪。求諸方冊子上。記得者無一言可以酬對。寒一上。熱一上。如行霧露中。略無所發明。於此悻々憤々。而朝參暮詣。都無虛日者數年于茲也。一日飯後讀達磨見梁武帝。忽然會得。磨云。不識。白汙流背。打維那意旨。從前礙膺物。頓瓦解冰消。而神心始輕安。則見柏樹子、麻三斤、乾屎橛、燒庵、勘破、背觸等、教則話頭。一一靈明。一天真。識破茶味禪味無二也。修茶道無禪者。則譬如大暗中有目無所親者。速請禪師。而陳所得矣。師云。今天下不到得其田地。而安排佛法祖道。猶盲人不見日月也。豈日月之咎哉。應子細善護持而已。嗚呼禪師大悲之恩。逾父母云。

大圓鏡中

獨樂自在

背後面前

靈光不昧

前出雲國主羽林次將源朝臣松平治郷

老隱大圓庵主宗納書一々（瓢印）（角印）

以上天真寺に藏する圓相讀の大幅、本書口繪に掲げたるものなり。而してこの箱蓋裏の書付は東陽和

尙にして其文次の如し。

文化十四丁丑冬吉月良辰

松平老隱不昧公全書壽像自讀加裝禱。安置天真靈窟。永與大巖待彌勒下生者也。

山庵小隱東陽 佛成道日誌（花押）

之に據れば、公は數年の間圓相の公案に焦慮し、一旦豁然として茶禪一味なることを悟り、點茶の末技に馳せてその根本義たる禪道を修めざるは、暗中眼ありて物を觀ざるの明盲に等しきものたるを會得せるなり。

今日は御出辱何之御馳走も無之、残念、其節は寤寐之論被_レ仰聞いかにしても、つまらぬ事を申し、残念に御坐候。則ち別紙に申上候、未稔と無之哉、御返答奉_レ待候、以上。

五月十二日

宗 納

山庵老和尙

玉床下

寤寐之論

直に今日の境遇を見る、即ち情識にて御坐候。即境界の見無し、寤寐一の二のは無之候。この書何年頃の者なるかを知らずと雖も、公が禪學修行の初期に於ける悟入の徑路を知り、併せてそ

の精思刻苦、修行餘念なかりし一端を窺ふに足る。なほ天眞寺に長さ約一尺三寸なる桑製の禪板一聯を藏す。その一枚は大巖の問を刻す。書は和尚の眞筆なり。他の一枚は公の答を彫る。書は紛ふかたなき定家流なる公の眞蹟に係る。

是 什 麼 (表面)

僧問趙州、如何是祖師西來意。州曰。庭前栢樹子 (同裏面)

無手者好打 (表面)

未央庵宗納書 (同裏面)

その書風と云ひ、その彫刻と云ひ、苟くも斯業に興味あるものをして垂涎禁する能はざらしむ。公は何時の頃より參禪せしかといふに、天眞寺藏幅、大巖讀、狩野榮川法眼典信筆の釋迦出山の圖に公の箱書せる次の文を見れば、明和六年即ち公の襲封後の二年目、十九歳の時なりしを知る。郷年十九知有此事、而參於武之天眞大巖老師。于今七年。猶如行燈影裡也。昔如來十九出家。三十成道。雖郷不數。志在於此矣。故今使官工榮川畫出山之相。請讀於老師裝褱。乃寄天眞禪寺。然非郷以情識見成道者矣。

安永四乙未春三月

出雲侯從四位下行侍從兼羽州刺史 源朝臣松平治郷謹書

公が退隱するに當り世子月潭に與へし書簡の一節にも、

我等こと十九歳にして禪に志し、天眞寺大巖和尚を師とし、六年にして得本來面目、生死を出離して大自在を得、また若き時より好て茶禪一味なることを辨ふ云々。

とあり。されば公は初めて禪を修めてより、喫棒喝雷七年を経て初めて悟入せるなり。而して公が大巖に就きて修行せしこと、實に前後三十餘年の久しきに涉れり。こは天眞寺藏大巖和尚遺偈の箱書たる次の文を見れば之を知るを得。

不數參山庵大巖禪師。于茲三十年。寛政十孟正二十五日師圓化。讀其遺偈。泣血吞聲。即使工手表裝之。納天眞文庫。

出雲侯從四位下少將兼出羽守 源朝臣松平治郷記寫

寛政七年の秋公大いに疾む。七月六日大巖公の病床に侍して親しく慰むる所あり、公即ち嘗て自ら書する所の扇書を與ふ。その文に曰く、

凡情脱落。聖意皆空。有佛處不用遊。無佛處急須走過。兩頭不著。千眼難窺。百鳥銜華。一場懨懨。鞭素人牛。盡風空。碧天遼瀾。信難通。紅爐焰上。爭容雪。到此方註合祖宗。

少將 書

この扇面金地にして支那製なり。公の知己薩州侯より贈られしものにして、大巖歿後その形見として

更に天眞寺より松平家に納めたるものなり。この偶頌を見るに至りて、公は既に悟入の域に達せるを知るべし。かくの如くして公の禪學を知らんと欲するもの、必ずや大巖の何者たるかを知らざるべからず。大巖和尚名は宗碩、山庵と號し、大德寺派天眞寺の第九代の寺主たり。もと江戸在の澁谷祥雲寺なる東天和尙の弟子にして、同寺内香林院にて剃髮し、後天眞寺第七代宗誠和尚に就きて學び、喫棒喝雷遂に解脱して大に宗誠に畏敬せられ、第八代宗漸天せるに由り入りて法燈を繼げるなり。その系圖次の如し。



公大巖に就き禪を學びし初に當り、狩野榮川に命じて釋迦出山圖を描かしむ。大巖之に贊して曰く、當年曾對淨居時、急々有心改面皮。

六載歸來何所見 滿身風雪立山陰

公また彼がために山林三十町を寄附し、待遇甚だ渥し。然れども彼夙に寺務を厭うて退隱の志切なり。乃ち己の肖像を描かしめ、自ら之に贊して曰く、似我不似我。似我即打殺。若不似燒却。當年四十八」と。彼れ乃ち寺を離れ、悠々として禪道と點茶とに意を專にせんとす。公因て彼が爲に多摩川の里(武藏國橋本郡向丘村字養生)に一山庵を建つ。大巖乃ち第十一代東陽和尚に寺を譲り、自ら此庵に退きて悠々自適、偏に茶禪一味を事とす。公嘗てこの山庵に在る大巖に一首の詩を送れり。

無禪可說法 無傳 雲外一聲鳴杜鵑

空住山庵爲甚麼 青々草色玉河邊

山庵の舊廬今農民の住家となりて頗る荒廢し、室内の障壁金地孔雀を描けるものと、庭前公の手植にかゝる一大楓樹とが、僅に舊時の面影を残すに過ぎず。今俗に天眞寺山といふ。近年東京都の病院建設地として都に買収され、天眞寺は之がために寺院の財産を收得せり。

安永三年公京都の釜師に命じ、大巖の爲に丸釜一個を鑄て、その表に「佛陀「常住」」の自筆を鑄刻せしむ。蓋し佛陀は天眞寺の山號なり。今なほ同寺に藏す。當時釜師の添書左の如し。

大 守 様

御好の丸釜

茶 誦 不 味 公

三〇六

表裏

佛陀 常住

御筆寫

右被_ニ仰付、私鑄_ノ之差出申候。唐金蓋共、金屋五郎三郎調進に而御坐候、爲_ニ後證、仍而如件。

京都御釜師 下間庄兵衛 味次(花押)

安永二年癸巳八月 日

雲州 御茶道

御役所

この箱書に「丸釜一口、松江城主不味候賜_レ之、釜及函上、佛陀常住四字、候之眞蹟なり。安永三甲午四月、大嶺(花押)」とあり。誠に希代の珍とす。なほ天真寺に公の大嶺に與へたる書翰數十通を藏す。今そのうち最も趣味あるもの二三を掲げて、その師弟の間いかに親密なりしかを知らしめんとす。
一筆致_ニ啓達_一候、不勝之天氣相に御坐候へども、彌御萬福奉_レ賀候。先日は御歸山、其節は何寄の油揚、御移りとして被_ニ下置、早速賞玩仕候。然者此間麟祥院(東京都太郷區)へ参り申候。講濟み東嶺始め三人へも逢申候。尤も一人づゝ御逢被_レ下候様に申候へども一同に出申候故、一通りに何ぞ承り候て宜しき儀も御坐候は_レ御咄し可_レ被_レ下と申候得ども、兎角志厚候かしと計に御坐候間、此上申すもや

くたいもない事と其切りに致置候。虚堂録講じ様の儀荒増別紙に書附、御覽に入れ候、御慰に差出申候。東嶺和尚見分、扱々かはゆげ少とも無い男にて御坐候、御一笑御一笑。住持は随分人相能き和尚に御坐候。大衆四百餘集り申候由、尤も寺用などにて歸り候數、三百三四十計りの趣に御坐候。萬々其内御出府の節、面上可_ニ申述_一候、頓首々々。

六月五日

尙々線香御落手可_レ被_レ下候。藥罐薩州(島津榮翁をいふ)へ申遣候間、近日に可_レ参候、以上。

書中謂ふところの東嶺和尚はもと近江の人、伊豆龍澤寺の僧にして臨濟宗の高僧なり、名を圓慈といひ、謚を佛護神照禪師と云ふ。寛政四年閏二月十九日寂す。年七十二。遺偈に曰く「人生七十古來稀。出_ニ輝東庵_一何國之。老僧今年七十一。出_ニ輝東庵_一何國之」と蓋し輝東庵は彼が寛政三年尾張瑞泉寺の請に應じて再興したる庵とす。

急申入候。風烈にて騒御座候。今日御壽麥御約束中、唯今迄風落候哉相待候へども、一向落不_レ申難義仕候、何卒参上可仕と見合候へども、右申上候風にては火之番中にて有_レ之、其上昨夜の度々の火事には延し候旁御斷申候。俄に御斷申候段失禮至極に御座候へども無據御斷申候。何卒明後六日か七日か兩日之内いづれにても御極め可_レ被_レ下候。急度参上可仕候。定御壽麥の御用意を候て御待候事と存候其所へ俄に御斷申候儀、甚申兼候へども無據申上候。和尚も定今日の風は御忙と奉察候。昨夜は御近

第四篇 學藝・家庭・逸事

三〇七

邊出火に御座候て定而御樂しと奉存候。今日は弟(雪川)も露地拵にて御斷申よし、旁六七日之内御極め可被仰下候、今日の所偏に〳〵御免可被下候、御斷計申上候。但し申殘候、何も明後日か七日に可申上候。頓首。

公が壽夢を好むを知る大巖和尚は師弟の嚴を忘れ、寧ろ賓客として公を招けるに對し、公は募命火番役の公儀のため大風の故を以て之を斷るにつき、その言々重複を厭はず頗る懇切を極めたり。これ師に對するの禮と共に公事を重しとする公の人格の發露を見るべし。書中「定而御樂し」とあるは大巖の火事好なるをいへるなり。

夫畫圖之於萬物。無不善盡者。因以求之。莫亦能圖者。何哉。無形也。於是聊寫此二物。以爲守恆之戒。上人願推此意。爲之贊、予即贊曰、

冬夏變化電風是恆君子

立方其以有徵

佛陀大巖和尚贊

未央庵一々宗納拜寫

(松江市正井儀之丞氏藏)

これに因りて見るも公が常に大巖を崇信せるを見るべし。

寛政二年大巖拵拾錄二卷を著す。この書は山庵雜錄、禪林類聚、禪門寶訓、中峯錄、林間錄、法苑珠

林、佛祖通載、叢林盛事、拈崖漫錄、人天寶鑑、弘明集以下、多くの佛書中より禪林の英華を拵拾したるものとす。想ふに彼が山庵と號せしは、この書に引用せる宋末の名僧山庵の雜錄を愛讀し、之に私淑する處ありて、自らも亦この號を襲用せるならん。この書寛政二年の自序、同年明無著の跋及び享和二年夏五月公の序文あり。この年公資を投じて印行せしむ。其の序に曰く。

大巖禪師。出入進退。俯仰左右。泊然淡然。安居山庵。接衆教徒之暇。自數千卷書。拵拾百餘條。而錄爲二卷。皆祖苑之秀。而禪林之英也。愍後進初機之志。不爲不篤矣。莫言。凡有待於外者。皆不能得之於內者也。

享和壬戌(二年)夏五月

出雲國主兼出羽守從四位下左少將

源朝臣 松平治郷謹識(印)

大巖は、寛政十年正月二十五日六十七を以て寂す。その遺偈に曰く、

六十餘年 有說無說

末後一句 蘇蘆々々

これより先、彼自ら病軀壽の長からざるを知り、寛政八年遺書を作る。文中赤坂邸なる公の許に至り積年無量の恩を謝すべきを東陽に遺命せり。其全文次の如し。

老軀百拙加以痿痺。舊利轉變。幸請座元。補闕住。感陳蒲鞋誠孝。殘齡安便。天真興隆。可指日見。且世諦出世諦。吾不及。座元願演法開筵。回祖道於已頹。病骸歿後。掛肖像机上。安住摺拾錄一部。遺囑一章。使壽福和尚燒香。埋葬孝岳祖之墓側了。看病隨從之五子。爲遺物。每一人方金拾顆。衣被一領。配分焉。一派親疎。有例有條。玄叟茄子瓠子。時宜取捨。巷隣問疾之野父。村婆。設一汁三菜齋。供養而可也。

- 一、速至赤阪邸。謝積年無量之厚恩。
- 一、小庵廢立。雖爲座元。物廢易興難。不忘過時之高論哉。
- 一、宗恩拜塔座元。相見不可有許諾。

寬政丙辰秋八月望日

東陽和尚

宗碩 (花押印)

大巖はその歿したる翌年を以て、勅謚眞定良鑑禪師を追贈せらる。その勅書次の如し。
勅。江海之所以異於清濱者。以其深廣也。崇奉之所以別於丘陵者。以其高大也。朱紫奪色。仲尼於是嘆息。玉石同櫃。猗頓爲之於邑。前住德禪大巖座元。實虛堂之裔。乃實門之嗣。開佛祖之關。麻谷仰風。講入天之說。玉河雨花。迅雷在上。其背不局。薄氷在下。其足不踏。眞定維舉。頑石點頭。寶鑑屢磨。惠日增輝。宜垂寵章。以授徽號。謚眞定良鑑禪師。

寬政十一年五月八日

右の日附「八」の一字は墨色他と異なり、實に光格天皇の宸筆とす。抑もこの禪師號の勅書に就きては固より公の誠實なる斡旋に由るものなるは言ふを俟たず。この勅書表装して天真寺に藏す。その箱書に、

寬政十一年五月

黑衣 勅謚始 天真大巖師

出雲國候兼出羽守從四位下少將 源朝臣松平治郷

幹事此欽命裝工(花押)一々

とあり。これ公が道を愛し師を尊び、誠によく祖苑の寶訓を垂れて、衆生を濟度せんとする者のため

に獎勵の途を啓けるなり。大巖の後を襲へるは東陽和尚なり。和尚も公と親交淺からず。公は墓參の際和尚と懇話し、また和尚は公の茶席に招かれたること多かりき。

道不得也三十棒

道得也三十棒

宗 納
前大徳寺東陽

と定家流に彫書せられたる禪板二枚今なほ天真寺に藏す。

公また物先和尚を畏敬す。和尚名は海旭、もと奥州相馬長松寺の僧なり。俗姓小泉氏、奥州田村郡小野に生る。八歳佛門に歸し郡の唱巖連禪師に従ひ、武溪の月船慧禪師に師事すること二十年。明和八年長松寺の法嗣を襲ひ、天明七年江戸に出で東輝庵に住す。即ち月船慧禪師の舊跡なり。禪師一に東輝和尚といふ。公嘗て之を見んとして果さず。因て弟子物先和尚と親交あり。一日出雲より書を和尚に贈る。書辭慇懃誠に誦すべし。

贈長松寺書簡

舊臘辱諭致于東都之邸。伏讀委知道候無恙。幸甚。武溪集後序及上木。其餘所云云。推賞過當。寡人不佞不敢當。不敢當。昔者裴休序乎圓覺經。子昂跋乎明藏。蓋二人。各得其分者也。寡人之於武溪集。爲蛇添足。爲額覆。亦曷恨。寡人久結眉毛于山庵。聞和尚風采。慕道德。厭求相見。然和尚處東海。寡人處於西海。風馬牛不相及。恒以爲遺憾。近以後序之故。始通驛遞。寄殷懃之教。似接上之慈貌。少慰平生矣。寡人好茶。以故大利祕藏祖母懷。遠辱嘉惠。此器銘文灼然。不煩監賞家同盟之會。以點一盞。不亦樂哉。敢謝。敢謝。縣官賜暇。青春歸藩。辨嚴多故。不即作答。今布數字。非樂也。

二月二十八日

主 臣 名

謹答

長松寺老和尚

二空下

公物先和尚のために資を投じ、其師東輝和尚の偈頌を蒐集したる武溪集を上梓せしむ。公の後序に曰く、

武溪集後序

梁武有言曰。嗟夫見之不見。逢之不逢。今之古之。怨之恨之。寡人久欲相見於東輝和尚。而不果焉。及計晉至。怨之恨之。頃者聞其徒物先師編和尚偈頌一名武溪集。寡人乃命有司刻木充于解怨之萬一云。然昧者莫謂。梁武寡人嗟過了。

時天明二年五月

雲國侯從四位下侍從兼出羽守 源朝臣松平治郷謹識

物先、晩年明を失ひしかど、なほ後進を誘誨して倦まず。文化十四年五月十五日寂す。年八十二。遺偈に曰く「雷喝一聲轟白日。此行何墮情然機。從來暖氣今將去。莫使閻王傳下知こと。著に栗棘蓬二卷あり。文政二年誠拙の序、文政五年相馬侯平朝臣益胤の跋あり。或は云ふ。公が初めて禪學を學びしは物先和尚にして、大嶺和尚より以前に屬すと、未だ其確證を得ず。武溪集二冊は原版は天明八年祝融に罹りて焼失したるを以て、寛政二年更に頭註を除きて一冊とし、大嶺和尚の跋を添へて再版せり。

公また夙に古溪和尚の風を慕ふ。和尚名は宗陳、號を蒲庵といふ。天正元年九月勅に因り京都大徳寺第百十七代の法嗣を襲ふ。同十一年豊臣秀吉紫野に惣見院を創立し、請うて第一祖となし、信長の祥忌を修せしむ。同十三年秀吉また根來傳法院を毀ち、その古材を以て和泉に海會寺を立て、蒲庵を聘して開堂演法せしむ。この歳七月、秀吉關白となる。この皇恩を謝せんため、秀吉新に寺を建て古溪に寺名を需め天正寺といふ。地を東山に卜し、將に工を起さんとするや、石田三成の讒に遇ひて果さず、天正十六年遂に太宰府に謫せられ、十八年許されて歸山す。同年十二月師の俗弟子千利休奇禰を買ふに及び秀吉怒を移して紫野の伽藍をも壞たしめんとす。秀吉の使臣徳川家康、前田利家、同玄以、細川忠興の四人大徳寺に迫る。蒲庵乃ち劍を抜きて一揮して曰く、法の衰替かくの如し。吾唯死あるのみと、使臣感服して去り、秀吉に説きて遂に伽藍破壊の事を止む。文祿五年(改元慶長)八月二日病革る、遺偈を書して曰く「六十餘年。胡喝亂喝。末後轉機。不作一喝」と筆を擲つて逝く。既にして蘇生す。一衆駭然たり。同二年正月十七日遂に寂す。年六十六。同年十二月後陽成天皇より特に大慈廣照禪師の諡號を賜ふ。遺著に蒲庵稿二卷あり。公常に之を愛讀し、その湮滅を恐れ資を投じて上梓せしむ。公の序あり。曰く。

蒲庵稿序

寡人曾入龍寶山。見古溪陳公所。著胡言亂說。爛葛藤二卷矣。今扶護其宗裔。漱盥其餘派者。恐

涇渭之混濁。而欲使寡人上木而傳之不朽。雖然教外別傳。不立文字呼作祖師禪。早已落第二。況於文字禪乎。道流莫謂將錯就錯者也。

于時享和三癸亥孟春

雲國侯兼出羽守從四位下左少將源朝臣 松平治郷謹識

公はかくの如く禪林のために盡瘁し、法味を世人に頒つに努めたり。晩年鎌倉圓覺寺の誠拙和尚に就きて字和島侯、桑名侯と共に入室問法せり。誠拙名は周樞、無用道人と號す。伊豫の人、同國佛海寺にて剃髮し、後豊後福聚寺東岩和尚を師とし、更に伊豫海藏寺荆林和尚に就き、遂に陸奥高竈院月船和尚に従ひて印可を得、安永二年圓覺寺佛日庵に住し、また正續庵に移り、開山佛光禪師の傍に僧堂を開き禪風を闡揚す。文化十二年住持となり、後心華院に住す。夙に高僧智識の譽あり、世人呼んで佛光の再來となす。文政三年六月二十八日示寂す。年七十五。遺偈に曰く「時來人未來。人將來。災難大王令嚴。明日打爲君行」と。大正八年その百年忌に際し、朝廷より大用禪師を追諡せらる。著書に正法眼、語錄忘語集、雲門關あり。また天徳寺不昧の廟門に「彈指圓成」の四字を書す、蓋し大圓庵の佛徳を廣衍せんがために、證道歌の彈指圓成八萬門、刹那滅却三祇劫の語に取れるなり。

江戸深川材木商白木屋海津傳兵衛の一女危篤に瀕す。主人乃ち誠拙和尚の高徳を慕ひ、急使を以て之を聘し、その女の爲に修法を請ふ。和尚乃ち來る。主人拜謝し、女の病癒ゆれば即ち其の謝禮は師の望

に任すべしといふ。和尚乃ち前禮として金百兩、米百俵を直に鎌倉に送るべきを告ぐ。主人その巨額なるに喫驚せりと雖も、愛娘の病癒えんことを欲するの情切なるを以て直に諾して命の如くす。和尚乃ち病室に入り、娘の枕頭に座し敢て誦經せず。平然として曰く、汝大家の裡に生れ、その榮華を受けずして逝く。憐むべし。然れども定命はまた如何ともすること能はず、我今汝の父に請ひ金百兩、米百俵を得たり。以て我が鎌倉の僧堂に在るもの數十人を養ふべし。その中數輩は則ち悟道に入るもあらん。是を以て汝は佛縁を結びたるを以て誠に極樂に入るを得。冀くば心を安んじて瞑するところあれと。直ちに起つて鎌倉に還れり。主人その頗る突兀機警なるに驚き、且つ怒りたりしが、病娘の苦惱忽ち散じて日々快方に赴き、數日にして全癒せりといふ。(禪林奇行に據る)

誠拙少時生國佛海寺にあるや、伊達侯寺に至り、常に彼をして肩を叩かしむ。侯或る時江戸土産として袈裟を與ふべきを約す。次年侯再び寺に來り、誠拙をして肩を叩かしむ、彼即ち前約を果さんことを求めたるに、侯笑ひて忘れたるを告ぐ。誠拙乃ち曰く、武士に二言なし、君公は武士にあらずやと。直に鐵拳を侯の頭上加ふ。寺主蒼皇恐懼罪を謝す。侯曰く、我謬れり。この小僧他日名僧たるべしといへり。

公は既に禪道の師友としてかゝる名僧に交はり、屢々茶事に託して師を招き、共に茗を煮たること、前に説けるが如し。

或る年の冬東海道某驛にて、誠拙偶々公の駕に遇ふ。驛吏之を誰何す。誠拙侍者に言はしめて曰く鎌倉の西堂なりと。公乃ち駕を止め籠戸を排して相共に語りて後、公誠拙に向ひて「手爐の用意ありや」と問ひ、誠拙所持せざる旨を答ふるや、自ら手爐を與へたりといふ。鈴木子順氏の近世禪林逸話(禪道第五十一號)には、公白銀製の手爐を出して和尚旅行にこの用意なきかと問ひしに、誠拙忽ち其の手爐を奪つて曰く「大名は贅澤の物を持つものなり。結構の品有がたう御座る。是さへ貰うたら別に用はない」と輿戸を閉ぢ、輿丁を督して去る。公笑つて禪師の作略は尋常の爲し得べき所にあらずとて、歸依益々深かりき、と記せり。

誠拙和尚嘗て不願齋待合噺といふ一本を著し、その中自家の茶事訓を述べて曰く、

不願が茶は無茶なり、有茶に對する無茶にはあらじ、然るに無茶といふことは何ぞや、若し人無茶の佳境に入り給はゞ、無茶は即ち大道なり、道に生死迷悟、是非取捨の備なし、備なきの域に至るは無茶の道なり、備なきを知て行ふは無茶の徳なり。さあれば貴きことも、無茶の道より貴きはなく、美なる事も、無茶の徳より美なるはなし。此に一つの話あり、僧あり、趙州和尚の所に到る。州云く、曾て到るや。僧曰く、曾て到らず。州云く、喫茶去。又僧あり、到る。州云く、曾て到るや。僧云く、曾て到る。州云く、喫茶去と。曾て到るも到らざるも、喫茶去といふ、意何れの處にかある。これ等の趣深く知らば、趙州和尚の堂奥に入つて、茶味の苦うして且つ甘き鹽梅を知り給はん。それ何か嗚

るやうだ。

公嘗て入國の途鎌倉に誠拙を訪ふ。時に黄昏、誠拙直ちにいで迎へ、虚空に大圓を描く。公乃ち諾し速かに駕を返す。蓋し禪門歸去を示すにこの無言の法を以てするなり。従者之を知らず、幸に一夜は鎌倉に宿して疲を慰せんと思ひしが、この問答によりて公駕の速に舊路に返るを憾とせりとぞ。この逸事を以て公が如何に禪門に歸依し、誠拙を畏敬せられたるかを知るに足る。

公の父君天隆院宗衍の師事せる董潭和尚は不傳流の士一川傳外の子なり。嘗て己が姉に懸想し、過つて其首を墜す。爲に佛門に歸依し、駿河の白隠和尚に従ふ。松江天倫寺の圓柱和尚と同門たり。夙に善智識の譽あり、世に東の白隠、西に董潭ありと喧傳せらるゝに至れり。號を慧隆、書名を雲叟といふ。彼また周易に通じ詩文に巧に、儒臣桃白鹿とも親交あり。荻野獨園の著「近世禪林僧寶傳」に曰く「師雲州人。久參鶴林（白隠和尚）承嗣家風。然其峻峻十倍鶴林。居常接人。置白刃於座右。人擬議。輒揮刃逐之。學者往々望崖而退。」と、以てその機鋒峭峻なるを知るべし。寶曆九年三月天隆院之を迎へ、出雲郡莊原村字學頭永徳寺の住持とす。明和六年九月二十四日示寂、年五十。

天隆院の尊崇淺からざりしことは同寺の禪堂に天隆公の扁額數多あり。所藏の「大願主願文」及び「奉歸命拜獻上天願疏」などの書類に由りて明かなり。安永元年公乃ち父君の孝養の爲めに新に山門を建つ。また寺内に公の別座敷ありしが、明治の初年に取毀ちたりとぞ。

其他京都の寶海和尚、大鼎和尚等のことに就きては既に「孤篷庵」の章に於て之を説けり。終に公の自作として傳へられたる偈頌頗る多し。今その中より僅少の偈を掲げ、以ていかに公が禪機の堂に入りて醍醐の法味を咀嚼したるかを示さん。

偈頌

沈吟三七 冷座六年 無度衆生 蘆茅芊々

達磨自畫贊

西來直指 事同囀起 撓聒叢林 元來是爾

面壁

嵩山毒氣自縱橫 下有神光其勢攫 要會九年觀壁意 少林千古月明清

達磨形似飄

似達磨如飄箆 非達磨非飄箆

蘆葉達磨畫

一葦渡江 孤坐少林 月上嵩峯 影前溪沈

維摩

莫言三萬二千徒 豈以狹寬可割乎 半夜風寒方丈室 窓前雪嶺老松孤

布 袋

不這箇人 乞一文錢 要見老漢 倚布袋眠

百丈野鴨子

野鴨元來不見蹤 此中何者發言容 鼻頭扭得阿爺道 江上秋風霜露濃

丹霞燒木佛

天寒燒木佛 院主墮眉鬚 大衆休疑着 雲晴山月孤

斬 猫

兩堂無對 斬却一刀 道得不得 猫兒啼々

狗無佛性

狗無佛性 多滯有無 吠々吠々 說有說無

麻 三斤

三斤機應洞山麻 雨歇千峰帶晚霞 錦簇々花簇々 幾人自古箇秤麻

俱 抵 豎 指

三冬枯木雪 晚夏碧蓮清 花發春風暖 月秋氣冷清

喫 茶 去

到喫茶去 不到也同 到與不到 幽松微風

蘆葉圓相

圓相浮水 蘆葉風清 喚作甚麼 秋江波平

自像圓相贊

道箇圓相 多論圓方 不方不圓 松平治海

圓相日字

相中一字 日字書兮 要識玄旨 南北東西

二 儒 學

幕府大廣間詰の諸侯中、もとより文字あるものなかりしに非ず。然れども幕令の下る毎に、諸侯常に公を推して公の口より之を読み聞かせらるゝを常とせりといふ。凡そ位官に於て、封祿に於て、公の上に出づるもの少しとせず。而も尙この事ある、これ公が大廣間諸侯中能く文字を解せるを以てなり。文字の知識は漢學に基す。公は八歳にして初めて字佐美惠助に句讀を受け、爾來讀書に勉めたり。もとよ

り禪學及び茶道に於けるが如き多大の趣味には及ばざりしと雖も、天資明敏、一を聞いて十を知るの概あり。字句に拘々たらずして大體を達觀せり。公の學識は蓋し其の天稟に出づ。宇佐美惠助が朝日丹波との問答を録せる「極秘宇佐美惠助意見書」の中に次の如き記事あり。

一、人君の上は餘り幼年より歡樂も多く、其上御發明なる事、下品のものには格別なるものに候間、彌以て學には遠く成行候。下品の人には業より入るものも可有之候へ共、中々人君には稀にて有之候。

答。かくありては、世子御成立善くは御成り不被成候。輕きもの、輔導にては參らず候に付、世子の憚り給ふ大臣を御後見に被仰付候。歡樂多きものゆゑ、下を志給ふ事に成り、御發明を其儘に致し候へば、邪習に成り候。學には遠く成候もの故、別して勤めを専らとし、總じて嚴に無之候ては、流れ候もの故、大臣に輔導を命ぜられ候云々。

この文は朝日丹波が天隆院の命により、再び國相として當時世子たりし公を輔佐せんとする時代に書けるものなり。その文中御發明云々は、公の聰明なるを稱して其將來を危み、勸學の必要を説けるものなり。

宇佐美惠助は上總國夷瀧郡の人、その祖嘗て上杉謙信に仕へて武功あり。郡内に同名の川あり、因て瀧水と號す。字は子迪、寶永七年七月二十三日生る。十一歳にして利倉壽仙に句讀を受け、十七歳の時

江戸に來り、荻生徂徠に學ぶこと三年にして師歿す。因て社友と共に切瑛して學を修め、江戸に居ること六年にして板美中を携へて郷に歸り、美中を以て食客とし、切に研鑽を重ね學大に進む。後江戸に來り芝三島街に塾を開きて子弟を教授せり。其家世々富豪にして其學の護國派なりしは、人をして彼が資性剛直にして直言忌憚する所なかりし所以を首肯せしむ。寛延元年十一月十一日初めて天隆院に仕へて儒臣となり、寶曆八年正月二十八日公が素讀の師範たり。同十一年叡山助役の際に上りし諫草の如き、辭意頗る峻烈なるものあり。是に由て見れば彼の輔備篇に於ける教育主義も、偏に嚴峻端厲を主としたること推知するに難からず。他の諸侯彼を聘して一席の講筵を請ふや、師禮を執らざるものは之を拒む。小泉侯優遇最も厚く、彼の獻策を用ひ旱災を免れたりといふ。燕飲すれば温類物に接す。人畏れて之を愛せり。安永五年八月九日卒す。年六十七。四谷戒行寺に葬る。嘗て師徂徠の學を弘めんがために其遺著四家稿、古文矩文變考、絶句解、南留別志等を刊行す。辨道考、辨名考、護國錄、訓點千字文、王註老子等の著あり。その傳は服部元立撰の墓碑銘及び先哲叢談にあり。二代金八僅に三年間雲藩に仕へ、三代貞藏に及び出雲に入り、原田周助に學び、天明二年十月九日祖父惠助の勤功に依り二十人扶持を給せらる。四代金八は月潭院の學問相手たり、五代尙藏家を嗣ぐ。

儒臣桃源藏は護國派に反して官學たる程朱派の學者なり。その養父東園初め源藏を學に就かしむるに方り以爲らく、當時江戸の人多く護國派に贊すれども、諸侯に仕へて道を説くには洛園の學に如かずと

因て昌平費に學ばしめたりと云ふ。天隆院が江戸藩邸に剛直なる惠助を聘し、出雲藩國に穩健なる源藏を招じて公の侍講とせしは、その用意の周到なる、感ずるに餘りあり。公の國に在るや悦んで源藏の講筵を聴けり。公明和三年初めて出雲に入り、同年十一月二十三日初めて源藏を召して詩經小雅天保六章を講せしめてこれを聴けり。十二月十三日源藏出車六章を講す。翌年正月二十四日小雅鶴鳴二章を講す。明和六年公襲封後初めて歸國せしが、十二月十七日桃源藏爲に尙書大禹謨「曰若稽古」より「時乃功」に至るまでを進講せり。爾來毎年の進講書目を擧ぐれば、明和七年に劉向の説苑、君道篇、臣術篇及び絶句解、同八年に孟子梁惠王篇及び公孫丑篇、安永二年に荀子君道篇、勸學篇及び天論、同三年に同天論、同四年に書經の説命及び説苑の政理篇、同五年に同政篇、六年に大學、同八年に尙書堯典、同九年に尙書、天明元年に中庸、同三年に齊語を進講せり。同五年には易經を國字解にして公に上れり。寛政六年には孟子公孫丑を進講し、同五年には尙書洪範を進講せんとせしが、公國務多端の故を以て中止せり。是より前後、國務愈々繁劇にして公は儒臣の進講を聞くの暇を有せざりき。

源藏嘗て説苑臣術篇を講ぜし後、中老脇坂太夫、源藏を召して公の意を傳ふ。曰く、聖賢の言もとより豊富なり。加ふるに源藏の進講甚だ明辯にして頗る悦樂すべしと。かくの如きの賞詞曾て數回なりしが、今日も亦この賞詞ありき」と。また荀子君道篇「楚莊王好細腰朝有餓人云々」の條を進講せし時、赤木太夫、源藏を召して公の意を傳へて曰く「今日講する所甚だ好し、之に加ふるに講説明辯、更

に感喜するに堪ふ」と。翌夜朝日丹波、また源藏を召してこれと同じき公の意を傳ふ。荀子は源藏の得意とするところにして、加ふるに雄辯滔々説き去り説き來り、以て大に君徳を進め奉らんとせるなり。源藏自筆の年譜には、公の賞讀ありしを聴く毎に幾層の勇氣を得て、憚る所なく悦んで進講するに至れる旨を記せり。これ公の篤學にして道を重んじ儒を尙び、儒臣を優待したるを證するに足る。凡そ侍講の進講するに當り、公は學問所の上座に南面し、侍講は次の間にて正面よりや、斜に公に向ひて見臺に對し、その右側に執政以下列坐し、其左側に侍臣列坐し、更に次の間に近習頭等列坐して、之を陪聽するを常とせり。而して進講終るや儒臣に酒食を賜ひ、時に自ら時服を授け、毎歳末には時服を賜ふを常とせり。

桃源藏は享保七年十一月冬至の日石見國安濃郡川合村字出岡に生る。父は坂根幸悦といひ瘍醫を以て名あり。源藏幼名友之助、大藏、後題藏と改め、また硯次郎といふ。名は盛、字茂功、百川、子深、白鹿、養老菴等の號あり。七歳にしてよく國字小説を讀む。八歳濱田に行き仲父潭龍の專稱寺に寓し、檀家常盤氏に學ぶこと三年なり。十一歳の時父伯耆米子の人、賤が嶽七本槍の一人糟谷助右衛門の裔たる糟谷捷久に聘せられて其家に治療す。捷久贈るに無點五經を以てす。父歸りて之を源藏に授け、村市の杉本加藤次に就て學ばしむ。師は訓點本に據り、弟子は無點本にて習ひ學力遂に師を凌ぐ。十二歳の頃同村瓜坂の醫師の童某強記を自負し、彼と強記を闘はさんことを求む。因て滑伯十四經の穴歌を讀むを

約す。源藏一點畫を誤らず遂に勝を制す。父乃ち大に悦んで曰く、此兒草澤の物にあらず、久しく膝下に屈せしむべからずと。

享保二十年源藏十四歳の時、伯父村長坂根半四郎(後六右衛門と改む)税銀を江戸に送るために東上せんとす。父因て源藏をして之に従はしむ。偶々淺草藏前の札差大口屋桃東園彼が史記左傳を讀むこと流るゝが如きを見て之を奇とし、父に請ひて己が子として寛保元年昌平費に學ばしむ。因て桃氏を冒す。その費に在るや學力優秀にして助講となり、業を畢へて後寶曆二年日光山の院主に聘せられ、爾來寶曆六年に至るまで毎夏彼地に遊びて講筵を開く。往還の途、地方篤學の人争うて一席の講筵を請ふものあるに至る。

偶々雲藩々醫萩野喜内の父萩野珉等源藏を天隆院に薦む。是より先き源藏の實父松江に移住す。東園以爲らく、我強ひて長子を請ひて己が嗣とす、實父國に在り、父子の情誼拒むべからずと、因て出雲に仕官するを許す。東園夙に任俠を以て江戸に名あり、家富み學を好み諸藝に長じ、また星曆に明かなり。其の弟曉雨また任俠にして俳名あり。源藏養父東園を率ゐて國に就かんことを請ふ。東園曰く、我腰を諸太夫に屈するを好まずと。天隆院ために毎三年江戸に歸省するを允し、毎回銀十枚を賜ひて其費に充てしむ。寶曆七年十月七日雲藩の儒臣となり、初め祿七十石を給せられしが、後百石より百二十石を授けられ、別に學講料米二十俵、銀十枚を賜ふに至る。

是より先き寶曆七年五月八日源藏松江に來り、十月二十五日出發し十一月十六日江戸に歸り、翌年六月一日再び松江に赴く。六月五日母衣町に宅を賜ふ。時に我が藩校文明館既に成る。後(天明四年)改めて明教館といふ。蓋し荀子の「立大學設庠序修六禮明十教」の義に取るなり。これ出雲に於ける學校の鼻祖なり。寶曆七年は今を距ること一百八十七年の昔なれば、日本教育史中に於ても、特筆すべきこととす。寶曆八年秋近侍園田信成藩邸に祇役せし時、天隆院具に文明館の狀況を問ふ。信成その盛事を語りしに天隆院大に之を悦ぶ。藩の士大夫之を聞き、園國翕然として學に嚮へりといふ。

明教館公の時代に至りて愈々盛大となり、常に一百乃至二百の聽講者を收容し、安永の冬十二月の如きは講筵に列するもの三百七十二人に達せり。源藏の年譜に開學以來の盛事と註するもの是なり。安永七年に至り朝日丹波錢一千緡を以て書を購はしめしかば、京師より群籍到著して文庫に堆積し、九月四日爲に文庫を改造するに至れり。而して學館もまた狹隘を告げられたれば、之が改築を企て同年十二月二十七日に至りて落成す。因て講堂に聖像を掲げ、以て教化の師表たらしめたり。明教館の教導條目は之を分つて十等とす。初歩に入等、初等の二階級を置き、次に八等より一等に至らしむ。これ漢土及第の法則に倣ひたるものとす。

源藏年老いて後、養子義三郎をして代講せしめたることあり。また原田周助、宇佐美之助等も之に代り、後には園山朔助、海野才藏等も代講を勉む。源藏自記の年譜に各年末必ず明教館にて講釋會讀せし

統計を載せたり。今其の天明六年度の統計を見るに、

講釋 百四十七度
會讀 百八十二度

合三百二十九度 奥力以上御徒以下三十九名

内

三百十度

桃 源藏

五十度

原田 周助

二十度

宇佐美之助

四十九度

桃 義三郎

桃白鹿は夙に後藤芝山と親交あり、その柴野栗山と交はるに至りしも、芝山の紹介によるといふ。寛政三年白鹿年七十に達す。正月十一日多年教授の功に依り意字郡新邑十石を賜ふ。源藏七十五歳にして妻を喪ひ、中秋獨坐して「一片香魂何處行、杯盤蕭瑟月空明」と嘆じ、又中元に際して「此朝猶薦黄粱飯、不見年々舉案人」と悲み、或ひは「我無德多福、鬼神所惡豈無虧乎」と嘆せしが、享和六年八月十九日遂に歿す。年八十。歿するに先だち八十賀を祝ふ。門人關山雄、爲に詩を賦して曰く、

淵々 簞鼓樂 儒宗 多士 松江 似景 從

白鹿山頭雲五色

高臨几杖照清容

墓は松江天倫寺に在り。また寛政戊午秋孫維忠書の「白鹿桃翁壽像碑」あり。源藏天資高邁聰敏にして容貌端正、眉目畫けるが如く、平居手に巻を放たず、家人事ありて語る時耳これを聴き、日書を讀み、未だ會て一字を誤らず、事また從つて辨じたりといふ。その經を説くや明快精緻、辯は懸河の如く、鴻音朗々として門牆に達せりといふ。職に在ること四十有五年、未だ會て一日も其務を曠うせず、諄々として子弟を教ふ。晩年體疾にかゝりしと雖もなほ繩床に坐し輿に倚りて講堂に臨みたりとぞ。常に菊を愛し、毎秋東西南の籬に陶淵明、天羽衣、七賢、殘月、金衣公子、今胡蝶、獅子王など、各種の名花を栽培し、時に詞人高僧を招きて偕に之を娛めり。著はすところ天隆公年譜、同義譯(未完)荀子遺乘、世說新語補考、同補遺、典謨臆斷、文體明辨、禹貢考、論語一斑、中庸管窺、孟子管窺、大學獨斷、說苑考、荀子考(未完稿)、詩三百詳解(未完稿)等あり。荀子遺乘は荀子の研究に於て最上乘の名を博せるものなり。もとこれ國老朝日丹波のために精究して自得せるもの、寛政十年之を刊行す。仲村君山の跋を載す。君山嘗て白鹿の博識を疑ふ。其の二十一史を精讀せるを知り之を嘆賞す。後白鹿人に語りて曰く、我君山の爲に意外の名を成せりと、白鹿の雅量想ふべし。

源藏の養子義三郎は世明また君義といふ。その河津村に生れしを以て孟津又西河といふ。藩費を以て江戸に遊學し、歸りて明教館の教授となり、また唐船番の通詞となり、尋で月潭の侍講となる。文化四

年八月十九日六十三を以て歿す。坐臥記の著あり、出雲文庫第一篇に收む。其子孝太郎、子孝、字維忠、薰園と號し、文化元年公の年譜撰上を命ぜられしが、同十四年二月二十四日年僅に三十九を以て歿す。其子大藏、世文に至り、公の年譜を完成す。其子文之助、好裕は節山と號し、「出雲私史」藩祖事蹟及び「贅言」等を著す。晩年縣志編纂を囑託せられしが、稿を了へず明治八年十一月十八日歿す、年四十四。養子桃溪天死し、子敏行、孫裕行家を嗣ぐ。

先に宇佐見惠助を薦め、更に桃源藏を薦めたるは萩野珉なり。珉の子喜内は天下の奇人天愚孔平の名を以て著はる。彼は父の醫業を繼ぐを屑しとせず、明和九年八月十六日老公附御納戸並側醫に任ぜられたれど、醫は唯その名のみにして數年後之を免ぜられ、多くは藩邸の慶事或ひは疾病ある時に際し、神社佛閣の拜事に當れり。而も好んで一流の漢文を草し、大膽にも碑銘などの揮毫を敢てし、竊に自ら儒臣を以て任じたるが如し。殊に天明八年大規模水の著「蘭學階梯」に滔々一千有餘字の序文を掲げたるが如き、當時學界の奇人として、彼が文章もまた世の注目に値するに足りしならん。故に今彼を藩の儒臣傳中に附收して其經歷の一斑を敘し、併せて天隆院及び不昧が人の長を棄てざりし美德を表示せんとす。

萩野喜内名は信敏、字は求之、鳩谷と號し、天愚齋といふ。自らいふ「明の世、孔子六十五代の裔、孔胤椿の妾孕めるあり、倭寇に捕へられて日本に來りしが、平某之を容れて妻とし、其の生みし子を養う

て子となす、これ喜内の祖なるを以て、孔平氏と稱す」と。祖父彦一郎元祿六年始めて雲藩に仕へ、父珉、俗稱春庵また醫を以て天隆院に仕ふ。喜内幼より父に従ひ、屢々藩邸に來る。天隆院の母天岳大夫人逝きし後、天隆院なほ幼年にて侍童を隨へて殿内に遊びしが、喜内もその一人なりき。傳祿本知三百石加米五十俵是は一代限りなり、先年御客應對表向御書向と申役儀を命ぜられしとき別に百五十石（列士錄にこの事なし、御給帳に定江戸三百石とあり、例の誇張なるべし。）くれられしに不首尾にてこの百五十石取上られ、本知三百石ばかりなり、私儀當年（文化九年）百五つに相成候。父彦一郎醫業をつがせまじとて生れしことを且那寺に届けざることを十二年、享保六年に届けをしたる故、且那前は當年九十四五歳なるべし。私儀六侯、十三盜、七妙、一奇とて、世に珍しき行あり、是はいつぞ申すべし云々」とは、彼が親しく瀧澤馬琴に語れる豪語にして、兎園小説別集に出づ。

列士錄に據るに、彼は延享元年三月二十日御伽勤として初めて出仕し、同三年六月七日扈從見習となり、寛延元年八月二十五日小姓本役となり、寶曆五年十一月江州多賀社に代參を命ぜられ、同六年一月二十六日公痲瘡を疾むを以て伊勢多賀兩社及び武州痲瘡神に代參を命ぜられ、明和九年老公側醫となり、安永六年之を免ぜられ、天明二年宗門改奉行、鐵砲役、關取通手形判役を命ぜられ、勤続十九年に及ぶ。天明七年寛政六年兩度幕府の公役に勉めて賞賜あり、文化二年八月二十日番頭格に進み、加米五十俵を給せらる。

文化十三年秋八月公天愚を隨へて三河國大樹寺に遊ぶ。寺に貫木を藏す。これ家康永祿三年の役敵を撃退したる寺門の貫木とす。公之を觀て感嘆し、爲に一文を草す。今同寺に藏するものを見るに其文次の如し。

永祿之間。國家多難。大樹寺之役。危急最甚。記載悉矣。當時門貫今尙存。龍擊刀痕顯然。鑿蝨之難。介汗之勞。誰不_レ恭想。實國家之神箴也。創業最難。守成不易。居安慮難。處治思亂。夫幾乎哉。寡人幸屬_レ族末。特不_レ勝_レ感慨。頓掇筆陳_レ清矣。

文化十三年八月十七日

前出雲國主從四位下左少將

源朝臣松平治郷題

函書の表に「出雲大公不昧公三河大樹寺古門貫記、一幅」とあり。その裏に天愚の書あり。曰く、三河大樹寺古門貫、我太公一見。嘆_レ祖業。顯_レ九十一言。時歲六十六。住僧拜謝。珍重請_レ左右記其由。臣信敏百有十歲。感題而命_レ之。即如此右云爾。

文化十三年秋八月晦日

出雲國鳩谷天愚老孔平信敏恭撰

馬琴の記する處によれば、彼は古き衣裳を著し、上には舊き合羽を著、草鞋を穿ち、草履取只一人を伴ひ、江戸中を歩きしかば、世の人天愚孔平の名を知らざるものなく、年久しく浴みせざる故に、人之

に應對すれば臭氣鼻を穿つ。婦女子之を厭ひて其の去りしあとを速に灑掃せりとぞ。また千社参りの札を貼ることはこの孔平のはじむる所なりといふ。かくの如く彼は奇行を敢てし、更に神社佛閣に天愚孔平と太く白抜きにせる木版の納札を貼附し行くを常とす。自家廣告の術に於て妙を得たりといふべし。然るにこの納札の擧は能く江戸趣味に投じ、市人相率ひてこの風を學び、文化六年孔平を盟主として青山梅窓院に納札大會を開き、同十五年の頃は毎月晦日上野山内二本杉の原に集會せり。彼の歿後も同好者の崇拜絶ゆることなく、明治二十八年四月十日深川連、柳喜連、梅花連、八町堀連、惠方連、神田市場、和合連、巴連など納札會の有志相集りて下谷區稻荷町泰宗寺に於て孔平のために八十年忌の追福大法會を營み、納札會を開き、その墓側に「納札元祖天愚孔平墓」の木標を建つ。また彼がために建碑を議し、向島長命寺に納札塚を建てたり。

天愚孔平は文化十四年四月初(烈士錄には三日とあり)を以て歿す。法號は綴山院鳩谷求敏居士といふ。年壽詳ならず。彼が馬琴に語る所の寶永六年五月二十八日出生を以て眞とせば正に一百九歳なるべく、前述三河大樹寺貫木の函書に自記する所を以てすれば當に一百一十一歳なるべし。然るに明治二十八年納札會の有志が八十回忌を行ふに當りては、齡一百零一歳と記せる墓標を下谷稻荷町泰宗寺に建てたり。その何れも信すべからず。案するに延享元年三月二十八日初めて天隆公の御働勤たりしとせば、當年漸く十二三歳の少年たるべし。若し彼が自稱せるが如く一百十歳の長壽を保てりとせば、三十六七歳の御

伽役たらざるべからず、されど長壽を保ちしことは敢て疑ふべからず。祖父玄玖初めて藩に仕へたるを第一代とし、其後四代彦一郎、五代謙藏、六代彦一郎（實は石原佐助の弟）、相繼いで藩臣たりき。安永七年三月天隆院信敏に命じて松江月照寺に建つるところの壽藏の碑文を書せしむ。その末文次の如し。

我天隆公命臣信敏。撰此碑文也。臣請見國史之記。有司不許。臣恐惶不知其意。而無復奈何。勉強從事。自恐故事實歲月至時人姓名職主。皆訪求以參見聞。撰上而請正。臣恐惶不安。有司曰。悉合史之記。則臣始安。尙恐多誤謬。公召見賞其勞也。臣欲進陳其故。時公授筆作草字。賜臣以大筆。曰。寡人悉知爾言矣。唯以此題其由于陰。即謹如其言。無復知其意。唯毛穎肥大。不適細用。如牛刀割雞。狂走不能謹小。不若之罪是恐而已矣。戊戌之秋孔平信敏題書。安永七年夏四月二十七日、公、父天隆院の筆塚を西ヶ窪天德寺の墓前に建つ。（大正十四年墓と筆塚とを松江月照寺に移す）その文は即ち次の如し。

天隆公之好書、周日揮毫不倦、四十年于此矣。退筆積久如堆、及東西爲壽藏、公謂、管城子久勞繪事、所其憐也、寡人已有永夜之寶、則之子亦不可無、即安之居國墓之東都壽域之石、其上自題曰退筆塚、先是封內壽藏成、建碑神道、臣信敏奉命。東都尋告成、則有司請建碑記事。公曰、止、寡人不省一旦有羞、亦無復言、謀之信敏、信敏曰、公之盛德、封內有記、是以神道無碑庸何傷、若不聽則已矣、信敏幸與瘞筆之役、竊識之其陰云爾。

安永七年夏四月二十七日

臣 孔平信敏謹撰

豐州杵築 藤山惟熊書

享和二年赤坂藩邸内玉川瀧の碑成る。碑文は丹波元簡撰、久世道空書なり。公孔平に命じてその碑陰に書せしむ。彼頗る得意、輒ち筆を揮ふ、その文に曰く。

園之奇勝碑文盡矣。非世無奇勝。唯幽涼之趣。如此園。則天下稀。其成焉矣。誰種樹。山匠彌次兵衛。奉命從事。無一不得其意。時稱名園。詩云。他人有心。我付度之。是此謂也。乃命題碑陰。可謂小物不遺哉。彌次。西郊中谷之人也。

享和壬戌之禱

臣信敏敬撰

天明七年春二月江戸深川八幡社内に出雲の力士釋迦ヶ嶽雲右衛門の碑を建つ。碑は圓柱の石にして今なほ同社殿の後庭に陳幕久五郎の碑石と並び存す。孔平は即ちその撰文者なり。曰く、

出雲釋迦嶽雲右衛門、長七尺五寸、石象表本、右没十三年、永慕建焉。
關里孔信龍伯麟韻言。
東魯孔信鳳仲翼書揮。

天明七年春二月朔天建置弟眞鶴崎右衛門。

山川降氣、斯出大人、身長丈餘、膂力絶倫、角觚相撲、鳴於深川、一朝化去、姓名尙傳、空存其地、子弟消魂、建石象形、表於萬年。

鳩谷天愚公孔平信敏撰

赤峰劉長和書

孔平素奇行を以て聞ゆ。其の文章の巧拙は敢て人の問ふ所にあらず、唯當時の人氣役者として彼が碑文を喜ぶもの頗る多かりしが如し。孔平常に玄關に籠を吊し、其内に入りて讀書す。來訪者その聲の天外より來るを聽きて一驚を喫せざるはなし。彼曰く、讀書は心の散らざるを要訣とす。籠裡の別天地は頗る之に適すと。其内に手爐茶器及び尿瓶をも容れ、客來らざれば終日この中に在りて讀書せりといふ。天愚の筆蹟敢て善からず、寧ろ拙なりと雖も、天愚の名天下に知られたるを以てその書を乞ふもの多けれど容易に書き與へず。偶々その幼孫路に迷ひしを扇屋某送りてその家に到る。天愚自ら往きて謝し、店頭金の扇數柄を取り、詩を題して去る。其書拙なれば扇商大に當惑せしが、某藩侯偶々この店頭を過ぎ、之を觀て價を倍して之を求む。扇商始めて天愚の名家たるを知る。後數日にして天愚復た往き扇賣れしや否やを問ふ。店主趨り出でて拜謝し、再び揮毫を乞ふ。天愚憤懣として去り走り、行くところを見ず。

孔平晩年に至りて奇行益々多く、馬鞋を取つて之を著するに至る。或ひは曰く、故ありて伴り狂せる

なりと。嘗て公に謂つて曰く、臣が家周文王の冠を藏すと、乃ち腹或ひは蠅蝶の殻を獻じ、色を正して曰く、これ文王の冠なり、これ周公孔子の冠なりと。蓋し古器の愛玩するに足らざることを諷せるなり。然れども公は敢てその無禮を咎めず、終身彼を庇護せり。一日彼泥酔して紀州侯の邸に入り「我はこれ楠多門兵衛なり」と大音聲に呼ばりて玄關に立つ。邸内の家臣驚き出でて之を見しに、例の天下の奇人萩野喜内なりければ、敢て取りあふものもなし。喜内仍て籠部屋に入りて一睡す。醉醒めて後恐縮して辭し去る。其後公の幕府に登城せし時、紀州侯公に問うて曰く「貴臣に楠正成と同名の者ありや」と。公夙に喜内が失行を耳にせしかば、即妙の頓智を以て直ちに答へて曰く「楠多門兵衛といふものはなけれど、楠田門兵衛といふものあり」と。紀州侯因て過日の事を語りしに、公は知らざるまねして「それは別人ならん」といへり。以て答の喜内に及ばんことを防げるなり。喜内之を聞き、大に公の仁恵に感じ爾後大酒を慎むに至れりといふ。

或時幕府より日時を期して聖堂に獻供の命ありしに、藩邸の有司これを忘却し、當日の朝に至り初めて心付き、公に其由を告げしかば、公は喜内を召して之が使者たらしむ。喜内直ちに諾して聖堂に到りしに、既に事終へて幕吏受納を肯んぜず。是に至りて喜内内容を改め「私儀今朝早く參上仕りしに俄に腹痛致し、已むなく近き知合ひの家に立寄り、漸く快癒せるを以て遅刻に相成りたり」と辯疏せしかど、更に首肯せざるを以て喜内「然らば主人に申譯なし、こゝにて制腹仕らん」と、既に覺悟の體に見えけ

れば、幕吏大に驚き遂に之を受理して事止みたりとぞ。この逸話偶々以て公が適材を適所に用ひたるを知るべし。なほ彼が奇人として藩臣の間に傳へられたる逸話に、彼が子彦一郎誤つてその乗馬を江戸本丸の番所に乗入れ、衛吏の誰何するところとなり、竊に金十兩を賄ひて事止みたり。天愚この事を聞き愚かなる奴かな、我その十兩を取返すべしとて速に馬に跨り、誤りて馬の逸したる状して番所に駆け入りたるに、衛吏輒ち之を叱責す、彼れ馬上ながら「今十兩遣すべし」とて立去らんとせす、衛吏怪みられては後日の悔を残すべしとて、恐る／＼懐より先の十兩の金を取り出し、宜しく之を認して人に知るなからんことを請ふ。彼哄笑しつゝ速にその金を收めて馬首を回らし、悠然として歸路に就けりといふ。彼は此の如く奇行を以て天下に知られ、權門勢家に直言するを憚らざりしを以て、一面に嘲笑を以て迎へられたれども、他面に於て畏敬せられたるなり。

三書道

公は年七歳にして始めて書を細井九卓に學ぶ。年譜に寶曆七年二月八日始めて書を習ふと見ゆ。九卓

は時に天隆院の書師たり。天隆院は始め高井某に就きて書を學びしが、延享元年四月十八日齡十六にして細井九卓に就きたるなり。是に於てか公の最初の書風を知らんと欲するもの、まづ九卓の人となりを知らざるべからず。

九卓の父は唐様書法の泰斗たる細井廣澤にして名を知慎といふ。人格崇高にして赤穂義士大高源吾、武林唯七と深交あり。因て二人豫め書を裁して復讐の夜を報す。廣澤の家吉良邸に近し。當夜家人に告ぐるに他行すべきを以てし、竊に屋上の物干場に登り吉良氏邸を望む。既にして潜に室に還り獨坐寝ねず。暫くして門を叩くものあり。即ち大高及び武林なり。二人欣然として復讐の状を告ぐ。源吾刀の小柄を賄り、唯七血に染める籠手を賄る。廣澤深く秘して之を函底に藏し、終身に語らざりき。後九卓函を開き、始めて之を知れりといふ。近世偉人傳の著者蒲生有章之を記し、且つ評して曰く「廣澤不語義士之事。何其慎也。眞可謂不負其名一矣。此義士之所以告而不疑歟」と、適評といふべし。凡そ書風の秀麗なるは人格の流露するところ、廣澤の書風が一世を風靡せるは誠に故なきにあらず。況んや彼の書法はもと文徵明の正統に出づるをや。初め文徵明之を文嘉に傳へ、更に文啓美、全梁、任徳天に三傳し、我が寛文の頃來朝せる明人俞立德に及ぶ。肥後の人北島雪山は即ち立德の弟子にして、之を廣澤に傳へたるなり。當時唐様と稱するもの多くは和臭を帯びしが、廣澤の書風ひとり唐様の神髓を發揮し、滿天下の稱讚を博したり。廣澤享保二十年十二月十二日年七十八を以て歿す。九卓その後を襲ひ、

關思恭、三井親和、松下葛辰と共に唐様書風の發展に勉めたり。九阜名は知文、略して文ともいひ、字を一大錫といふ。別號を籀齋、鶴山、また澤雉道人といふ。父の後を襲ひて某侯に仕へ、傍ら諸侯及び名門のために書法を教授せしが、後、事に坐して仕籍を削られ、天明二年五月四日年七十二にして歿す。墓は東都の西郊等々力の満願寺にあり。

天隆院の書風は唐様の筆法を傳へて、英邁の氣象紙上に躍如たり。公の最初の筆蹟も筆力遒勁にして天隆院に酷似し、一見識別に苦しむ。東都護國寺藏「枕流」「嗽石」の四大字双幅(松平家より寄附、安永六年の年號署名あり)出雲篠川郡神門寺藏の「一超直入如來地」の縦一行書、箬庵高橋義雄氏藏の「庭前栢樹子」縦一行書の如き、いづれも筆力雄渾にして唐様の神髓を捕へて遺憾なきものなり。これは父君天隆院の「懷瑾」「握瑜」の大幅一對に對比すべき名幅なり。(第一篇父君天隆院の條參照)

然るに公は後唐様より一轉して定家流に變じたり。こは茶道の趣味に於て夙に小堀遠州に私淑せるを以て然りしならん。遠州は茶道に於て三代將軍家光の師範たると共に、實に藩祖高眞院の師たり。而してその門下に僧江月、僧澤庵、古筆了雪、狩野探幽、佐川田昌俊、瀧本坊昭乘等の偉人輩出せり。遠州は京都の孤篷庵を創建し、土木建築に長じ、殊に築庭の技に於て古今獨歩たりしは敢て暇々を要せず。公が茶道に於て彼を崇拜して孤篷庵中大圓庵を建立し、彼に倣ひて窯業に力を致したるを以て考ふるに、書風に於てもまた公が彼に倣はんとせるは、蓋し偶然ならざるなり。遠州は冷泉爲頼に就きて定家の書

風を學び、その筆致既に堂に入り神を極むるものありき。而して公の習字帖は遠州が肉筆なる斯道傳授の秘本にて、當時決して他見を許されざりし極秘のものに係る。その書に曰く

定家卿のいはく、わが筆道は一なり。二聖(嵯峨天皇、弘法大師)三賢(道風、佐理、行成)のあとをしたはず、兩公(法性寺關白、後京極攝政)四輩(文昌、時文、保時、文時)の風をもねがはず、たゞ法而任運の道にして、柳はみどり、花はくれなる、風雲流水のすがた、おのづから不可説の道なれば、わが師にあらずといふことなく、わが手ならひにもれたる物なし。しばらく其字相をいはじ、いはけなき嬰兒のはじめて書いたしたる字形のさらに未證已證の分別なく、難解易入の修行をもからず、たゞなにとなくうちむきて、己が心にまかせてあらはしたる所の字相、則本有性徳の文字の體なりと、うらやむところをたねとして、本分至妙の道をわきたまふなるべし。よこしまなからんことを思へといふ事、あに詩歌のみならんや。

凡本家にしるし侍る所の大綱の品をもちて此卿の道に入門をたゞくに、いはゆる三あり。筆の取様、筆づかひ、かみあたり、是也。

筆の取様

いかにも豎にとりて、あからさまにもよこたふる事なかれ。指をとりかためてつよくとるはうるはしからず。